
東方雷電記 ～ Light to come off in a fantasy ～

パーラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷電記 ｝ Light to come off in
a fantasy ｝

【Nコード】

N8608T

【作者名】

パーラー

【あらすじ】

生まれたそれは、彼と同じく矛盾の塊。
生まれたそれは、彼と違う非力な人間。

「神隠しの共犯」は、今日も無意味に生きる。
これは、そんな物語。

負の第二幕：独白（前書き）

※ こいつは主人公じゃないですよ！

負の第一幕：独白

皆様どうも初めまして。

単刀直入で非常に申し訳ないが、

彼視点の物語を始める前に、僕の話聞いてほしいんだ。

主人公の話じゃなくて、関係者の話をね。

僕は前の世界……いわば現実世界と言うものか。

とにかく、僕という存在はその世界に生まれ、育ち、死んだと認識された。

本当は死んだんじゃないくて、この世界から消えたのだけれど。

僕がいなくなったその日は天気が激しい雷雨だったから、雷に打たれて死んだのだと思われたのだろう。

それを知った僕は、勝手に殺すなど言いたくなかったね。

僕は別の世界に行っただけなのだから。

僕の唯一の友達がそうしたように、さ。

まあ、友達とは言ったけど彼が勝手に言ってるだけだけどね。実際僕にとっては、いい迷惑だし。

まあとにかく、僕はその雷雨の日に、自分が興味を持った世界に行く事にしたんだ。理由は、暇だったから。

学生にはよくある動機だよね。

何て言ったっけ？ 殺人を犯した学生やニートが言う常套句。

『ムシヤクシヤしてやった。誰でも良かった。今は反省している』
だっけ？

あれって可笑しいよね。

僕なら最後の台詞に『僕は悪くない』って言えるからさ、余計に笑えちゃうんだよ。

おっと、話が逸れたね。

まあとにかく、僕は暇だからと理由だけでその世界に行こうとしたんだよ。

その所為で死んだ扱いなんだから酷いよね。

僕は何も悪い事をしていないのに。

で、その世界に言っただけいいのだけど、
浮かれていた所為で本当に雷に打たれたんだよ。

そしてその所為で気絶したのさ。

まさか向こうの世界まで天気が雷雨だとは思わなくてさ、一瞬で気絶しちゃったんだよ。

忌まわしい事この上ないね。

でも、それで良かったのかもしれない。

今思い出せば、そう感じてしまうよ。

そんな中で、僕の救世主が僕の中で生まれたのだから。

僕とは全く違い、それでも僕である彼が。

さて、語りたい事も済んだ。

僕はしばしの間傍観に徹し、物語は彼にバトンタッチするとしよう。

継ぎ接ぎで、矛盾だらけな。

僕と同じ醜さと、僕には無い美点を兼ねる。

あの男に。

第一幕：始まりはいつも理不尽に（前書き）

はい、これが本編。

第一幕：始まりはいつも理不尽に

目が覚めると、俺は地面に倒れていた。

「……………」

ここは、何処だ。

目の前には紅葉一杯の木。土砂降りの雨。
自然しかない、幻想のような景色。

でもそんな景色も、この状況では観賞する心の余裕は無かった。

「……寒いな」

とりあえず起き上がり、雨に打たれない場所を探す為に森を歩く。
本当は走りたいところだが、足下がグチャグチャだ。
走ったらすぐさま転んでしまうだろう。

ぐしょ濡れの髪や身体の水を精一杯手で掃う。
全く酷い雨だ、一体何時から降り出したんだろう。

「あ、そういえば今何時だ？」

時計を見る為に左袖を捲る。

しかし、時計はその機能を果たしていない。

「秒針が止まってる……」

いや、それ以前にガラス部分が割れている。

「何かあったっけ……」

そういえば何で俺はあそこで倒れていた？
そもそも、俺の名前は？

「……思い、出せない？」

……本当に何があった？
俺は思い出そうと頭を抑える。

「……あ」

そして、ひとつの情景が頭に浮かんだ。
それと同時に、遠くで雷が落ちる。

「……！」

その瞬間、ただ己の衝動に身を任せて走りだした。
転んでは立ち上がり、また走り出す。

「馬鹿な……！」

その浮かんだ情景は、自分が雷に打たれ死んだ姿。

「違う、気が狂ったんだ……！」

雷なんかには撃たれたら生きてる訳が無いし、仮に生きていたとしても全身大火傷だ。
絶対に違うはず。

「でも、でも……！」

だったら何で、記憶がない？

ここは何処だ？

俺は誰だ？

なんでここにいます？

俺に何があった？

疑問に対する答えは、全く出てこない。

その事実が、更に俺の恐怖を加速させる。

「記憶喪失……！」

ふと、そんな言葉が頭に浮かんだ。

それがまるで自分が死んだ証拠のように思えて、更に鳥肌が立ってしまう。

嫌だ。

認めない。

認めたくない。

「夢だ、夢なんだ……！」

口ではそう言う物の、身体がそれを拒否する。

あの夢独特の浮遊感が感じられない。

転んだら、痛みがある。

「違う違う違う違う違う違う違う！」

それでもまだ信じたくなくて、『これは夢だ』と自分に言い聞かせる。

言い聞かせれば、本当にそうなると思っているかのように。

「夢だ、妄想だ、幻だ、嘘だ……！」

何も考えず、否定するための言葉を呟き続ける。

そうしていく内に、今度は雷が近くに落ちる。

「……！」

そんな雷を見て、もう一度脳裏に浮かんだイメージ。

事実と思うには非現実的過ぎて、夢と思うには現実的過ぎた光景。

雷に打たれて、あの場所に倒れた自分の姿。

何度も現れる鮮明なイメージは、俺を諦めさせるには十分だった。

「そうか……俺は、死んだのか……」

どうしようもなく認めるしか無く、

乾いた笑いが口から漏れた。

「……これからどうしよう」

死んだ事実を強制的に植え付けられた俺は、何をするでもなくただ俯いていた。

雷雨は、その勢いを強くする。

「生き返らなきゃ良かった……」

溜息が自然と出てしまう。

未だにこれが夢だったらと切実に思う。
いつそ死んで、楽になりたい。

「じゃあ、食べさせて」

そんな声が聞こえた時には、右腕一つ持ってかれていた。

第一幕：始まりはいつも理不尽に（後書き）

再々改訂とか巫山戯てますよね。
ごめんなさい。

もう改訂はしません。
ご安心ください。

誤字脱字のご指摘お願いします。

第二幕：恩人はネコ科

「じゃあ、食べさせて」

そんな声が聞こえた途端、右腕が喰われる。
あまりにも突拍子な出来事に思考が追いつかない。

「……っ！」

そして、やっと理解した。

腕をもぎ取られるなんて経験がない俺には、
この突然の痛みを表現する術を知らない。
まるで機械の警告音の様に、『痛い』という感情が頭に鳴り響く。

「あっ……ひっ……くあっ……！」

まともに喋れない。
まともに動けない。

「いただきます」

最後に聞いた声は、死んだ命に感謝する言葉。
では無く。

「橙！」

「了解です！」

俺に救いの言葉と認識させる、知らない二人の声だった。

「……夢？」

目覚めると、布団の中にいた。

「そうだ、右腕は……？」

飛び起きて、肩から下へ撫でる様に確認する。

二の腕が、肘が、指がある。

右腕は、確かに俺の体に繋がっていた。

「……変な夢だったな」

立ち上がって周囲を見る。

周囲には床の間と、煎餅の置いてあるちゃぶ台しかない。

「……何処までが夢なんだろう？」

妖怪だとか右腕の消失とかは、あまりにも非現実的だから夢だ。
じゃあ、自分の名前やそれ以前の記憶は？

……やっぱり、思い出せない。

「記憶喪失なのは間違いないのか……」

振り出しに戻っただけ、か。

俺は溜息をついた。

それにしても、ここは何処だろうか？

民家なのは間違いないが、えらく古風だ。

「……状況がわからねえな」

まあなんにせよ、動かない事には何も変わらない。

「襖は……そこか」

若干痛む体を引きずって

「すみません、誰かいますか？」

と、襖をスライドした。

するとどうだろう。

目の前で猫耳の少女と、九尾風の尻尾のついた女性が。

「「あ」」

着替えていた。

「ごめんなさい」

反射なんてレベルではない速度で襖を閉める。
刺すような視線が、襖越しに感じられる。

「……少々待っていてくれ」

襖の向こうから……声から想像して九尾風の女性の声がそう言う。

「はい」

俺は迷わずそう答えた。

しばしの間、沈黙が空間を支配する。

やがて向こう側から物音が聞こえ出した。

……やばい。

衣擦れの音が脳に響くようだ。

女性二人が、襖越しに男がいるにも関わらず服を着替えている。
そんな異質な環境が、深い背徳感が俺の心を支配する。

（駄目駄目駄目駄目、変な事考えたら絶対駄目だ）

そう思っても、心臓が収まらない。

（……かくなる上は！）

「もういいぞ……って何をしている！」

私が襖を開けて最初に見たのは、
額を血まみれにして柱に頭をぶつけている修羅だった。

「煩惱の抑制です」

彼は涼しげな顔でそう言った。

俺は額の傷を治癒して貰い、現状の説明を彼女からしてもらおう。
治癒に術を使ったところを見ると、
右腕も本当は外れていて術で治癒してもらったという可能性が出てきた。

……尻尾がある事といい、術を使える事といい、
どうやら俺は現在、非日常的空間に居るって事だ。

「待たせたな」

噂をすれば、九尾の女性が居間に入って来た。
手には、煎餅と緑茶を乗せたお盆がある。

「いえ、そんなに待ってはいませんよ」

嘘だ。

実はさっきからずっと落ち着かずにソワソワしている。
実際の時間は解らないが、
体感時間的には結構待っているつもりだったりする。

「そうか」

九尾の女性はお盆を置いて座り、気さくな笑みをこちらに向けた。

「まずは自己紹介から始めようか。」

私の名前は八雲藍。この幻想郷の管理者の式神をやっている」

八雲藍さんか……。

「えっと、俺の名前なんですが……」

「聞ってるよ、■■■■だろ？」

「え？」

今彼女、何て言った？

「すみません、今なんと仰られたのか聞き取れなかったのですが……」

「ん？ ■■■■と言ったが？」

……一部、全く聞こえない。

会話の流れからして、それが俺の名前なのだろうけど……。

「……すみません。俺の名前の部分が聞き取れないです」

何て言うか、脳が聞く事を拒否しているような感覚だ。
理由が解らないだけに、少し怖い。

「そうか。一体どうしたのだろうか……」

藍さんが思案顔になる。

考えてくれるのはありがたいが、

当事者本人にも解らない事に答えを出す事は不可能だろう。

いつかは解ると考えた俺は、話をそらした。

「で、その……幻想郷って何ですか？」

先ほど藍さんから出てきた単語について説明を要求する。
俺のかすかな知識を信じるなら、
そんな地名は世界の何処にも実在していないはずだ。

だって、『幻想』郷だぜ？

そんな地名、一度聞いたら忘れませんよ？

「哀れにも人々から忘れられた物の集まる場所だ。

君がいた世界からは隔離された世界だよ」

「隔離……別世界って事ですか？」

「そうだ」

心の何処かであれはただのコスプレだと信じていたが、
どうやらその可能性は皆無のようだ。

「そうだ。私達のように人型の妖怪も数多くいるが、

大半は君……大抵の人が知ってるような妖怪だろう」

藍さん曰く、人型は比較的理性が高くて実力者クラスになると滅多
に人を襲わないらしい。

「あれ？ でも先ほどの女の子も妖怪なんですよね？」

「ルーミアの事か？ あいつはいつも人間を食べる事しか考えてな
いから仕方ないぞ？」

「だいたい、私や橙だって人を食べた事くらいある」

藍さんの台詞に、背筋が凍る。

俺のそんな様子を見た藍さんは失言だったと思ったのか、君は取っ
て喰わないと弁解した。

やっぱり、目の前の人も妖怪なんだよね。

常識人でもあるけど、それ以前に妖怪なんだよね。

「いくら人型でも、人間を食事的に食べる事はあるからな。ルーミアに理性がない訳ではないぞ？」

藍さんが話をまとめようと口を動かす。

どう考えても、空気に耐えられないのだろう。

俺は藍さんに気を遣って、話題を変えた。

「幻想郷と妖怪の事については解りました。

では、何故俺は今、この幻想郷にいるのでしょうか？」

聞いてみたはいいものの、実はおおよその検討はついている。

『哀れにも人々から忘れられた物の集まる場所』

藍さんは確か、そう言った。

「それは、君が周囲から忘れ去られたからだ。

幻想郷には忘れ去られた物や人が集まる特殊な結界がある。

ちなみのその結界は私の主が……いや、この説明は不必要だな」

……やはりか。

「つまり俺は、忘れられた存在という訳ですね」

「ああ、そうなるな」

藍さんは俺の言葉に同意した。

自分ですら自分の事を忘れてるからな。
他人が覚えている訳がない。

「他になにか質問はあるかな？」

「いいえ、ありません。どうもありがとうございました」

説明が終わったので、一礼する。

おかげで現状を正確に理解出来た。

「役に立って嬉しいよ」

藍さんは湯飲みをお盆に乗せながら言った。

「一応聞くが、外の世界に戻りたいか？」

「いえ、別に」

俺は迷わず答える。

「帰っても、記憶が無いんですよ」

どこに住んでいて、どんな家族がいて、自分がどういう人間だったのか。

そういう記憶が、全く無い。

「だったら俺は、ここに住みます」

それしか、方法が思いつかない。

「そうか……。では、君には身を守る手段はあるかな？」

「はい？」

「幻想郷で生き残るには、身を守る手段は必要不可欠だぞ？」

そう言われて、俺は襲われた事を鮮明に思い出す。

今はもう身体の震えはないが、出来れば何度も思い出したいくない記憶だ。

それにしても、身を守る手段か……。

「逃げ足なら速いですよ」

「ルーミアの存在に気付かないんじゃない意味が無い。半日で食われるぞ」

「……………」

返す言葉もない。

「つまり、戦闘手段は無いってことか」

藍さんがため息をつく。

「せめてスペルカードが使えればな……」

「スペルカード？」

またしても聞き慣れない単語だ。

俺は純粹に疑問に思い、藍に聞いてみた。

「何ですか？ そのスペルカードって」

「幻想郷での決闘で使う札の事だ。これを媒介に弾幕を放つ」

弾幕……飛び道具か？

「人間で使える奴は少ないが、君なら使えるだろう」

「え？ 何ですか？」

「君は素質十分な霊力がある」

「霊力？」

また知らない単語だ。

いっぺんにそんなに覚えられないぞ。

「まあ、原料みたいなものだ」

「は、はあ……」

あれか、車で言うところのガソリン的な物か。

「その霊力ってものの素質はあっても、どう使えばいいか何て解りませんよ？」

「なら、私が教えよう」

……は？

「どうせ行く当てもないんだろう？ だったらここに泊まるといい。その間に力をつければ問題あるまい。」

そうと決まれば、早速紫様の許可を取りに行くよ。君はここで待っていてくれ」

藍さんは自分の主人——紫さんを探しに迷い家から出て行った。

「……なんか、急展開だな」

俺は庭の景色を見ながら、そう呟いた。

第二幕：恩人はネコ科（後書き）

誤字脱字のご指摘お願いします。

第三幕：幻想郷の賢者（前書き）

■■■の中身はいずれわかりますよー。

第三幕：幻想郷の賢者

藍さんが紫さんとやらを呼びに行って、数分が経過した。
その間、俺が何をしていたかと言うと……。

トイレを探していた。

「漏れる……漏れちゃう……！」

無事に辿り着いた時には、もう漏れそうだった。

「ま、間に合え……」

急いでトイレのドアを開け、便座に座る。

「お、ほおお……」

用を足すと、一気に緊張が解けた。

一段落ついたところで、俺は立ち上がる。

不意に、窓の向こうの空を見る。

「まだ夜になってないな……」

もう四時間経過しているかと思ったのに。
自身の体内時計の精度を疑った。

そんな事を思いながら、俺は手洗いの蛇口を捻る。

「あ、水がキンキンに冷えてる……」

手を洗う為の蛇口の水は、井戸から汲んだ水だろうか。
幻想郷は、どこか田舎のような雰囲気がある。

「これも忘れ去られたって事なのか……？」

外の世界が、自然を忘れたという事なのか。

「だとすれば、もったいないよな……」

俺はそう言いながら、手洗いの鏡を見る。

「あ、そういえば鏡を見るのは死んでから初めてだな」

つまり、自分の顔を見るのは初めてという事だ。

自分がどんな顔だったかの記憶すらないというのは、あまりにも記憶が欠落している。

最初からそれだけの記憶しかないとも錯覚してしまう程だ。

「ええつと……」

自分の顔を凝視する。

深緑の髪、黄緑色の瞳、イケメン率40%。
まったくもって、知らない顔だった。

「……アニメかよ」

髪の色が緑だなんて、二次元の産物だと思った。

「まあ、非現実なここじゃあそれもお似合いか」

俺はそう呟いて、居間に戻ろうとした。

「そうだ、ついでに煎餅の補充をしよう」

そんな図々しい事を考えながら。

待つ為だし、いいよね。

たぶん。

「まさかあんな所に放ってあるなんてな……」

おれは煎餅と共にある物を学ランのポケットに仕舞い、居間まで歩く。

「あれ？ ■さん？」

「ああ、橙さん」

居間へ向かう廊下の途中で、橙さんに会った。

俺は動揺を隠して質問をした。

「藍さんはまだ来てない？」

「うん、もう少し見つけるのが遅くなるって」

橙さんはそう言って、居間への襖を開ける。

「むう、意地悪するなよお」

「ごめんごめん」

しかし、名前か。

なんで名前だけ聞き取れないんだろう。

原因は……雷？

「……おい、■？」

どうも情報が少ないと考えが安直になるな。
うーむ。

「おい……」

ふむ。

考えても無駄だろうな。

「返事しにゃさいよ！」

ガリツと新鮮な音。

鼻が凄くヒリヒリする。

「痛い！ いきなり何すんだ！」

「何すんだじゃにゃい！ 返事しないのが悪いんだ！」

「だから名前が聞こえないのに返事なんか出来ないっての！」

嘘じゃない、本当だ。

っていうか■ ■ ■が俺の名前であることすら疑わしい。

「嘘つき！ あんたなんてこうだ！」

ガブツと凄惨な音。

腕が半分飲まれている。

「わあああ！？ 食べるな食べるな！」

必要以上に腕を振り回す。

人間と妖怪の腕力じゃ、噛まれた手を振りほどくのは至難の業だ。

「痛い痛い！ 離せマジ離せ！」

見た目幼女とマジ喧嘩する男子高校生。

犯人が自分じゃなかったら通報している。

どうやら食べられる事にトラウマが出来てしまったようだ。

まあ当然か。

「……はっ！ そうだ！」

俺は半分噛まれてる自分の腕を使い、橙さんの喉を指で弄る。

「っ！ ゴホッゴホッ」

すると橙さんは、苦しさのあまり口を開く。

俺はその隙を見逃さず、手を引っこ抜いた。

「痛え……血が出てる……」

今度のこれはさすがに幻覚じゃなかった。

さっき俺が行ったのは、犬に噛まれた時の対処法だ。

犬に腕を噛まれた時、慌てて腕を引っ張ってしまうと噛む力を強くされてなかなか振り払えないらしい。

しかし、逆に喉目掛けて手を突っ込んだらどうだろう？

答えは、咳をする。

犬に限った話ではなく、生命は異物が喉に入った時に咳をする防衛本能がある。

それを強制的に起こさせる事で、噛まれた手を外すという技だ。

今回は咳をさせれば解決出来ると判断したので、喉を弄するという方法で極力穏便に済ませようとした。

「でもさすがに、女の子が咳で苦しませるのはアウトかな……」

いくら身を守る為とはいえ、さすがにやり過ぎた気がする。

ビジュアル的にNGだ。

「だ、大丈夫ですかっとうおお!？」

「ぎにゃー!」

俺が近付いた途端、鋭く尖った爪と牙を構えて飛びかかってくる橙さん。

首に、数本の切り傷が出来る。

「ああもう! 心配して損した!」

こうなりや徹底的にやってやる!

「こい! 化け猫!」

「ふしゃあああああ!」

結局藍さんが帰ってくるまで、命がけの喧嘩は続いた。
でもなんで一方的に怒られたんだろう……。。

「橙のことは謝りますから、機嫌直してくださいよ」

迷い家から離れ、博麗神社に向かう俺と藍さんと橙。
俺はあれからずっと、半泣きで藍さんにすがりついている。

「いくら妖怪とはいえ見た目は子供だろう！
まさか暴行を行ってるとは夢にも思わなかったわ！」

ようやく口を開いた藍さんは般若のようだった。
いや、般若の方がまだ救いがある。

「反省してます」

その睨むだけで鬼すら殺せるような顔を見ると、これしか言えなくなってしまう。

「反省してます」

どうにか許して貰おうと必死で謝る。
俺が土下座をしようとしたところで、藍さんは許してくれた。

「私より橙に謝れ。半泣きだぞ」

……藍さん二言目にはいつも橙さんですね。

猫可愛がりとはまさにこのこと。

「……ごめんよ、橙さん」

誠意を込めて腰を曲げる。

でも、腕を食べるのはNGだと思うんだ。

「ふん、許してあげてもいいけど」

「……ありがとう」

思わず笑顔を作る。

「ただし、あたしの事は橙様って呼びなさい」

「……わかりました」

ここで反論しようものなら、猫と狐のダブル弾幕で命を奪われかねないと判断し、

俺は素直に頷いた。橙さん……橙様は凄く満足そうだ。

「君が式になったら、橙の下だな」

「は、ははは……」

正直、前途多難だと思った。

それから藍さんと橙と話ながら歩き、彼女達が妖怪である事を忘れて仲良くなった。

俺はその事実にも、心の底から安心した。

「さて、着いたぞ」

「もうですか、早いです……ね……」

俺は絶句した。

着いたという割には、目の前には神社らしき物は無かったからだ。代わりに、えらく長い階段が目の前を支配する。

その向こうには、鳥居がギリギリ見えた。

「さすがに君にこの階段は無理かな？」

「じ、自力で上れますよ！」

俺はそう言って、二段飛ばしで駆け上がった。

「あ、こら！ 危ないぞ！」

「転んだりしませんから安心してください！」

俺は更に三段飛ばしにして、ペースアップをする。

「そうじゃなくてだな！」

「神社の何が危ないって言うんですか！」

まさか妖怪が現れる訳でもあるまいし。

「グオアアアアア！」

「!？」

突如、階段の横からとても大きな物体が現れた。

これ……妖怪!？」

「嘘だろ……？ 何で神社に妖怪がいるんだよ！」

「まったく……忠告を聞かないからだ。」

ついでにそいつはただの熊だ」

すぐ後ろには、藍さんがいた。

藍さんは俺を橙様の所に投げたと思うと、大熊を拳一つで吹き飛ばした。

「つ、強い……」

吹き飛ばされた大熊は、泣いて逃げていった。

あの細い腕の何処に、そんな力があるのだろうか？

「ふう、こんな程度か」

藍さんはそう言い、こちらまで優雅な足取りで戻ってきた。

「大馬鹿物！」

「のぼらっ!？」

そして、俺に拳を放った。

ご丁寧に、鳩尾である。

「何故……」

「調子に乗るからだ！　ちゃんと言う事を聞け！」

いや、だからって神社に野生の熊がいるとは普通思わないでしょう……？

常識的に考えてさあ。

「幻想郷で外の世界の常識が通用すると思うな！」

そう言われると、返す言葉もなかった。
まあ、妖怪がいる時点でアウトだね。常識なんて。

「ほら、さっさと歩け。時間が無いぞ」

あれから数分、とうとう階段を上りきる事が出来た。

「ここが博麗神社だ」

「……もう説明はいいので、紫さんに会わせてください」

息が切れて、呼吸する度に血の味がしてしょうがない。
何か飲むものがほしい。

「随分とせっかちだな。いずれ早死にするぞ」

「妖怪に比べたら人間なんて全員早死にできるように」

妖怪が馬鹿みたいに長命な事くらい、俺だって知ってるぞ。
俺がそう言うのと、藍さんは微笑みながらこう言った。

「そう返されると言い返せないな。博麗の巫女は……いないな、好都合だ」

「居ると困るんですか？」

「君とは性格が合わないそうだ」

「はぁ……」

どんな性格なんだろう。
それに、巫女か……。

「なんでもありだな」

「外人はよくそう言うよ」

藍さんの声。

「では、主人を呼ぶとしますか」

「……………」

「そんな緊張しなくていいさ。紫様は基本優しいから」

主を呼ぶと言った瞬間の橙様を見た俺には、そう緊張するなという方が難しい。

優しいという主の主に震えるか？ 俺にはそうは思えない。

「……橙様、なんでそんなに震えてるのですか？」

「……紫様が来ればわかる」

「？」

登場の仕方が変なのか？

そう言えば紫さんってどんな妖怪なんだろう。

登場の仕方が変な妖怪……。

駄目だ、思いつかん。つーか知らん。

若干不安な二人をよそに、藍さんは空に向かって何かをなぞるように指を動かした。

「……藍さんは何をしているんだ？」

「結界の調整だと思う」

……紫さんってのは結界の中にいるのか？

「ちょっと藍？ その結界はもう少し緩めにしなさいといつも言

ってるでしょ？」

不意に後ろから声が聞こえる。

その瞬間、待ってましたと言わんばかりの速度で藍さんがこちらを向く。

「紫様、■■■を連れて参りました」
「へ？」

振り返ると、真後ろに。

「あら？ あなたが■■■ね？」

妖艶で、見透かすような微笑みの。

「ようこそ、幻想郷へ」

傘を差した女性がいた。

第四幕：程度の能力

最初に感じたのは、不信感。
その扇子で隠した微笑みに。

次に思ったのは、胡散臭さ。

髪を触る、扇子を開くなどの、ちょっとした仕草の一つ一つに。

最後に覚えたのは、恐怖。

常に心の底を見透かされるような視線に。

その一つ一つに、

全身の毛が震えるような悪寒を感じた。

「ど、どうも初めまして」

辛うじて口を開く。

なるほど、橙様が怯える訳だ。警戒心MAXで喋ってしまう。

そうでもしないと、不安でしょうがない。

「ふふ、そう警戒しなくていいのよ」

優しく微笑む紫さん。

やはり、見抜かれてる。

「立ち話もあれだし、神社に入りましょう」

「藍、結界を弄ったのは何故かしら？」

「いくら起こしても起きないからです」

「少々、いえ、かなり強引よ」

「すみません。ですが、紫様を起こす手段を出し尽くした後だったんですよ？」

「……勝手に弄られても困るから、もう少し生活環境を整えてみるわ」

「助かります」

藍さんと紫さんの会話。

俺の事なんて全く話していないのに、何故かこちらを見られているような感覚がある。

「ところで、本当に彼は■■■なのかしら？」

「え？　どういう事ですか？」

会話の内容の一部が聞こえる。

あれ？　もしかして人違い？

「本物の彼なら、ルーミアぐらい簡単に屈服させられる力はあるはずよ。」

「そ、そうなんですか……。ですが、彼は記憶喪失らしいんですよ」

「記憶喪失で髪の色まで変わるかしらねえ？」

「……………」

なんか、凄く怖い話が聞こえる。

記憶喪失前は、紫さんと知り合い？

……怖すぎる。

「まあいいわ」

よくない。

「ここでもいいかしら。霊夢がいなくてもどうかしたのかしら？」

「食料の買い出しだと思います」

藍さんはそう言いながら、部屋にあった茶葉と煎餅を取り出した。

……ここって人の家だね？

なんで緑茶の葉の位置を知ってるの？

なんで煎餅の位置を知ってるの？

「それで？ 彼は私に何の話があるのかしら？」

紫さんがこちらを向いて問いかける。

俺は内心びくびくしながらも、こう切り出した。

「あの、お願いがあるのですが……」

「なるほど、藍を師匠にねえ」

お茶を啜る紫さん。煎餅を囓る藍さん。

藍さんの尻尾に蹲る橙様。未だ緊張の解けない俺。

空気がおいしいはずの山の神社の中で、俺にだけ居心地の悪い空気を与えられている。

「あの……駄目でしょうか」

恐る恐る聞く。

「駄目駄目よ」

しかし、即答されてしまった。

「妖怪でもないあなたを弟子にする理由がないわ」

そう言ってまたお茶を啜る。顔は心なしか険しい。

俺は紫さんを説得出来るかどうか、藍さんにアイコンタクトを取る。

「……………」

……駄目ですか。

そんな顔されちゃあ、頷くしかないよな。

「……わかりました」

「そう、わかったならいいのよ」

心底どうでもよさそうな顔で話す紫さん。

お茶を飲みきったら扇子を持ち出し、空間に線を描いた。

描いた場所から、端にリボンが結ばれた隙間の様な物が開く。

「もう遅いし、私は帰るわ。藍、後はよろしく」

そしてそのまま隙間に入り、消えていった。

今神社にいるのは藍さんと橙様、俺だけだ。

「……すまないな■君」

「あ、いえ。こちらが無理を言ったんで仕方ないですよ」

まあ結構残念だけど、駄目なら仕方ないから。

まあ、あれがあるし今日はなんとかなるだろう。

「他に身を守る手段はありますかね？」

俺がそう言うと、藍さんは思案する。

こういう所は主人さんとは違うね。

「そうだな……武器とかはどうだ？」

「無いよかマシですね」

他にいい案もないので提案に乗ることにした。

でも上手く扱えるかなあ……。

あの武器。

「武器なら人里だな……時間も時間だ、明日にするかい？」

「いえ、これ以上お世話になる訳にはいかないので遠慮しておきます」

「また妖怪に襲われるぞ？」

「いえ、大丈夫です」

っていうか紫さんの家に泊まりたくない。

藍さんの家、つまり紫さんの家だ。

絶対にバレる。

「道筋はわかるかい？」

「道中通ったんでわかります」

「そうか……気をつけてな」

「ありがとうございます。では」

月が照らす真夜中、藍さんに見送られて俺は神社から立ち去った。

「……彼は、外の世界で生きるのは能力が強大すぎる」

だから、ここに逃げてきたはず。

全てを受け入れる、幻想郷へ。

「でも、そこにいたのはまるっきり別人の彼……」

おそらく作ったか……。

ここに来てすぐに作ったような意志が、まともな人格を持ってるはずがないだろう。

同じだけど、同じじゃない。

「厄介ね……」

今すぐここで消すか、様子を見るか。

「……これから次第ね」

私は紅い札を握りしめ、スキマからじっと彼を見つめていた。

「……暗い」

人里までの道中、青白かった月明かりが見えなくなった。
今となっては、一寸先も見えない。

「一寸先は闇。……闇か」

……そこにきつという。

俺を喰おうと待ち構えてる。

「……出てこいよ、もう逃げないから」

俺が促すと、辺りの闇が収縮した。

そしてそこから、見覚えのある金髪の少女が現れる。

「やっぱりお前か、ルーミア」

「……………」

返事は無い。

でも、背中から生えた翼から禍々しい程の暗闇が自己主張をしている。

呪詛、怨念。

それが一番わかりやすい例えだ。

「あいにく、今度はただでは喰われないぜ」
「……………」

やはり返事は無い。

でもルーミアの眼を見れば、言いたい事はわかってしまう。

殺してやる。

食べてやる。

腹の底から沸いて出る負の感情。

でもそんなのは紫さんに比べたら生やさしい物だった。

上を知るという事は、何て励まされる事だろう。

だから、前を見据えられる。

「藍さん、ごめんな」

俺はポケットから一つの身を守る手段を取り出す。

三枚のカード。

武器。

俺は生き返り、生まれ変わった。

そして一日で多くを学んだ。

結果、目標が出てきた。

だのに、こんな所で死ぬ訳にはいかない。

「ちょっと拝借しますよ」

それは俺なりに考えだした答え。

武器、彼女はそう言った。

剣、槍、銃、拳。

普通の人間ならこれらを想像するだろう。

でもここは幻想郷。

「ルーミア、弾幕決闘だ」

武器はそう、スペルカードだ。

「橙、ここに置いてあったスペルカードを知らないか？」

深夜、一眠りした私は橙に訪ねる。

台所に置いておいたスペルカードが見あたらないのだ。

橙は不思議そうな顔をして答える。

「机の上のケースには無いんですか？」

「ああ、無いんだよ」

紫様を捜す時に外したつきり、全然見あたらない。

「居間は探しました？」

「いや、置いた覚えがないからな」

「■と話してる時に、気付かない内に落ちたのでは？」

「ああ、それも考えられるな」

なんだかんだ言って、結構あたふたしたからな。

何かの拍子に落ちていても仕方があるまい。

「最近の橙は凄いな。これなら八雲の名を貰うのも時間の問題だな」

「へへえ」

蕩けるような顔になる橙。

その笑顔を見ると、私も蕩けそうになってしまう。

「いや、いかんいかん。橙、居間を調べてくれないか？」
「了解です」

橙はダッシュで居間に向かった。

その速さや判断能力に、本当に優秀になったと実感する。
感慨に耽っていると、橙が戻ってきた。

「藍しゃま！ 床に落ちてました！」

「そうか。ありがとう、橙」

「どういたしまして、藍しゃま」

輝くような笑顔を見せる橙。

そして、居間に戻っていった。

私は我慢していた鼻血が出そうになるのを堪えて、受け取ったケースを確認する。

「まったく、何の拍子で落ちたんだか……」

ケースを取り出し中身を確認する。

そして、違和感を感じた。

カードの並び順が狂っており、スペルカードが三枚欠けているのだ。

「……橙、橙！」

私の声を再度呼び出す。

「お呼びでしようか藍しゃま」

「台所に■■■は入ったか!？」

「いえ、彼はトイレに行ったくらいで詳しい動きは……」

「目を離したんだな!？」

「え、ごめんなさい……」

居間に落ちていたのは、そういう事だったのか!

■の奴、スペルカードを盗んでいった!

「……だからどうしたんだ?」

正直、カードは宣言する合図の様なものだから技だけはすぐにも出せる。

(本物の彼なら、ルーミアぐらい簡単に屈服させられる力はあるはずよ?)

紫様の言葉を思い出す。

「……まさかな」

何度も何度も使ったスペルカードだ。

名残が残っていても不思議は無い……。

「……助けに行く、橙は待ってろ」

「夜符『ナイトバード』」

「式神『仙狐思念』」

激しい弾幕同士のぶつかりあい。

それにしてもスペルカードが体力を消耗させるとは思わなかった。
ただのアイテムだと思っていたのに。

「……本当、藍さんには悪い事してるなあ……」

後でたっぷり怒られよう。

そのためにも。

「こいつを倒さなくちゃな」

もう一枚のスペルカードを宣言する。

「式弾『アルティメットブディスト』」

俺を中心に現れる卍のレーザー。

「ほらほらあ！ 回れ回れ回れえ！」

大声で挑発する。

でも体力は結構限界だ。

声でも出してないと、何時倒れるかわからない。

「ハハハア！ 潰れろお！」

冷静に見るとけっこう凶悪だな俺。
こんなキャラじゃないのに。

……俺のキャラって何だ？

俺は自分のキャラを知ってるような奴か？

「月符『ムーンライトレイ』」

「……っ！　しまっ！」

弾幕の薄い場所にルーミアのピンポイントな攻撃が迫る。
避け……きれないっ！

「……っ!？」

周囲の地面に無数の穴ぼこが出来上がる。

が、俺には、一発も被弾していない。

（何だ、今の感覚……）

避けきれないと感じたはずなのに、身体が勝手に動いて避けてくれた。

ほとんど操られて動かされたのと同じだ。

（まあ、助かったからいいか）

そんな事を考えていると、更に弾幕が振ってくる。
真っ赤で真っ黒で、禍々しい。

それすらも、勝手に身体が避けてくれる。

（いまスペルカードを発動すれば……！）

俺はこれを好機と考え、最後のスペルカードを準備する。
しかし、それがまずかった。

「……ガハッ！」

血を吐き出す。

霊力の無茶な酷使で、早くも限界が訪れたようだ。

「闇符『ダークサイドオブムーン』」

そんな俺に対して、ルーミアは容赦なく新しいスペルカードを放つ。

「幻神……『飯綱権現降臨』」

無い筈の力を振り絞って宣言する。

俺の持ってる、最後の一枚。泣いても笑ってもこれが最後。
勝負が、決まる。

「……終わらせるぜ、ルーミア」

「あれは……？」

人里と博麗神社を結ぶ道の真ん中。
そこには見覚えのある弾幕が輝いていた。
あれは飯綱権現降臨。

「大丈夫と言った癖に……！」

既に、手遅れかもしれない。

「間に合ってくれ……！」

「くっ……耐えろ、耐えてくれ」

弾幕同士のぶつかり合い。

こちらの体力はもう限界を越えている。

それでも弾幕の維持が出来るのは本来の持ち主の強さのおかげだろう。

だがルーミアのそれは確実に迫ってきている。

弾幕の美しさで決める勝負のはずなのに、既にそれは殺し合いの領域だった。

鬼気迫る闇が、今まさに俺の命を刈り取ろうとする。

「……………」

ルーミアは何も言わず、ただただ凄惨な笑みを向けるだけ。

「あと少し、耐えて……」

無茶な行動を起こした罰なのか。

もしかしたら雷に打たれた時点で、罰は始まっていたのかもしれない。

生きたいという虚しい願いは叶わず。

俺の弾幕が、途切れ……

「■！ 逃げろ！」

藍さんの声が聞こえた気がした。

……ごめん、間に合わないよ。

説教が聞けなくて、ご免な。

闇の弾幕は、今にも頭を貫こうとしていた。

……時間が止まったようだ。

目前に迫った弾幕の動きが鈍く感じる。

俺自身の動きも、何もかも。

「名も無き哀れな者よ」

急に響く声。

誰の声かはわからない。

お前は、誰だ？

「一つ問おう」

こちらの心境など無視して、話を進める何か。

「お前は今、どうしたいんだ？」

どうしたいか。

そんなもの、決まっている。
生きたい。

「それだけか？」

もう一度問いかけられる。

「お前はただ生きたいだけのか？」

……そうだ。

ただ生きるんじゃない。

自分^{……}の力で、生きたいんだ。

「自分でやる……。その重みを理解しているのか？」

「言われなくても、だ」

だからさ、雷神様よ。

ちょっと力を貸してくれないか？

「その意気や良し」

そう聞こえたが最後、何かが見えた気がした。

「「!?!」」

助けに来てくれた藍さんも、未だ弾幕を放つルーミアも、驚いていた。

俺はルーミアの弾幕を焼き焦がし、スペルブレイクをしたのだ。

深緑の髪の毛は逆立ち、身体のアちこちがパチパチと言っている。

「……………」

俺は無言で立ち上がり、ルーミアを睨む。
恐怖はもう、無くなっている。

「「雷は神々の為せる技」」

誰かの声とシンクロするように呟く俺。
言葉を発する度に、力が膨れあがる感覚。

俺の言葉と共に、周囲に雷雲が立ちこめる。

「「古より語られる轟音と閃光」」

その雷雲から、雷が放たれる。

俺は一枚の白紙のカードを取り出す。
藍さんのケースにあった、予備のスペルカード。

俺はそれを天に掲げ、大声で叫んだ。

「今ここに、かつての雷神の威光を再現する！」

その言葉と共に、スペルカードに雷が落ちる。

その雷はスペルカードに刻印を刻んだ。

「行くぞルーミア！これが俺の本当の弾幕だ！」

たった今作られたスペルカードを宣言する。

これで、決める。

「雷符『天鳴万雷』！」

ルーミアとその周囲に、超特大の雷が何回も落ちた。

そこに美しさは欠片もなく、ただ自然の驚異しか無かった。

緑は焼け焦げ、空は暗い色に染まっている。

そして、勝負は終わった。

「これで終わりかよ……もう少し、楽しませろ……よ……」

強気な口調で言った俺は、地面に屈し、意識を手放した。

「こういう事なのだ……」

彼はいきなり雷を呼び出し、即興で作ったスペルをルーミアに当てた。

■は、ルーミアと相打ちまで持ち込んだ。

これが、彼の本当の力？

「あら？ 意外と早かったわね」

突如声が聞こえる。この声は、我が主の物。

「紫様！ これは一体どういう事です！」

先ほどのまでの状況が理解出来ない。

一体何故、■はいきなり強くなった？

「私はきっかけを与えただけ。あの電撃は彼の物よ」

「きっかけ……。ルーミアの封印を解いたのは紫様でしたか」
「そうよ」

悪びれずに言う。

よくもまあ人間を強くする為とはいえそんな事をするもんだ。
封印を解いたルーミアは十分な驚異だというのに。

「でもまあ、観察が必要かしら……。戻るわよ、藍」

「え？ それはどういう……」

「橙が待ってるわ。話は後よ」

紫様は■を抱え、スキマに消えていった。

「……………」

やはり、何が起ったのか解らない。
今考えても、仕方がないのかもしれない。

「……私も行くか」

私は開けっ放しのスキマに入り、紫様の後を追った。

第四幕：程度の能力（後書き）

ベタベタの伏線を張るしか、出来ませんのお……。。

第五幕：君の名前

目が覚めると、一度だけ見た事のある天井だった。

「……どこまでが夢なんだ」

ルーミアと戦って、能力に目覚めたのは……。

「……夢？」

そう言った瞬間、

「■、起きてるか？」

と、どこか懐かしい声が後ろから聞こえた。
俺は後ろを振り向く。

「藍さん」

俺は後ろにいた彼女に、声をかけた。

「その様子じゃ回復したようだな」

俺の顔を見て、藍さんは微笑んだ。

「じゃあ、ちょっとお話聞かせてもらえるかな？」

ただし、背景に般若を抱えながら。

……思い当たる節が一つあるな。
なるほど、全部現実だったか。

「畜生……」

藍さんの拳骨によってたんこぶを十二個くらい作った俺は、橙様に連れられ居間に向かった。
なんでも、紫さんが呼んでるらしい。

「あら、起きたのね」

紫さんは動かしていた鉛筆を止め、こちらに振り向いた。
書いていた紙を見ると、色の名前がずらっと書いてある。
何故か、赤系統と青系統の色の名前が無い。

「……何かご用でしょうか？」

「ちよっとお話がね。」

まあ慌てないでそこに座りなさい。お茶でも飲む？」

お茶と聞いて腹の虫が少し動いたので、俺は頷いた。

「じゃあ藍、持って来て」

「わかりました」

藍さんが立ち上がり、台所へと向かう。

……なんだこのほのぼの家族。
緊張感が抜けるぜ。

「じゃあ、全員揃うまで雑談しましょ？」

「え？ ああ、はい」

微笑む紫さん。

そこに威厳のようなものは感じられない。

俺は思わず頷いた。

なるほど、これが素か。

俺は雑談を始める。内容は、先ほどの戦いの事。

「それにしてもよく頑張ったわね。全力のルーミア相手に引き分けなんて」

「引き分けじゃ意味ないですよ。あの後助けられてなかったら別の妖怪に喰われてたんですから」

「能力に目覚めたじゃない。それで見返りとしては十分よ。

でもまさかあんな苦戦するとはね、予想が少し外れちゃったわ。

ルーミアじゃなくて、チルノとか大妖精を差し向ければ良かったかしら」

「……なに？」

差し向ける？

不穏な台詞に髪の毛が逆立つ。所謂、電撃の準備。

ルーミアを倒したあの電撃。

自然と扱える事に、身体が違和感を感じない。

「あら、知らなかったの？ 全部計算通りよ？」

弾幕ごっこで戦う為にスペルカードを盗む事も。

私の胡散臭さを嫌悪して無理して人里へ向かう事も。
ルーミアと戦えば能力が目覚める事も。

「全ては私の手の上よ」

その発言には、ただただ脱帽するしかなかった。
逆立った髪が収まる。

まあ能力を覚えたし、良しとしよう。

「紫様、お茶菓子を持ってきました」
「ましたー」

丁度いいタイミングで藍さんと橙様がお茶菓子を持って現れる。
さっきの一触即発の状態で来たら、
また藍さんに半殺しにされるところだった。

「丁度いいタイミングね。橙、貴女にも話があるのよ」
「え？ 何ですか？」

面食らった表情で橙様が訪ねる。

「あなたも結構結界の修復が出来るようになってきたわね」
「は、はい」

萎縮しながらも応対する橙様。

「妖力も強くなってきたし、そろそろ八雲の名をあげようかと思う
のだけね」

「「ほ、本当ですか！！」」

橙と藍さんが身を乗り出す。

八雲って名前に何かあるのか？

「状況がわかってないようね、■」

「ええ、まあ……」

二人がこれほど喜ぶ理由がわからない。

藍さんは油揚げを目の前にした狐みたいだし。

橙はマタタビを目の前にした猫のようだし。

……「八雲の名」というお菓子か？

「あ、その顔変な事考えてるでしょ」

「滅相もない」

危ない危ない。思考が変になってしまった。

それを見破る紫さんも凄いが。

「式にとって主人の名を貰う事は、実力を認められるのと同義なの」

「ははあ」

よくわからん。

「で、話を戻すけど……ちょっと藍聞してるの？」

「え！？ ああはい！」

おい、絶対聞いてないだろ！

そんな眼を輝かせて橙様をナデナデして言っても信憑性に欠けるわ！

「八雲の名をあげてもいいんだけど条件があるの」

「条件？ それは私にですか？ それとも橙にですか？」

真剣な顔で聞く藍さん。

すぐわかりましたとは言わずに条件を聞くあたり、頭がいい人だなと思う。

「橙に」

「……どんな条件です？」

紫さんは少し溜めてこう言った。

「■■■■を橙の式神にしなさい」

「「「……………は？」」」

紫さん以外の全員が声をそろえた。

「それと、彼に仮の名を。まあこれは考えてあるけどね」

紫さんが何か言ってるが、耳に入ってこない。

入ってきてはいるのだろうけど、入った瞬間に言葉が出て行ってしまふ感じがた。

「わかりました、紫様。八雲の名に恥じぬよう精一杯頑張ります！」
「ちえ、ちえええええええん！！！」

八雲橙は少し頼もしく思え、その分藍さんが情けなく見えた。

「■■■。いや、緑」

紫さんが——紫様がこちらを向く。
その口から出る言葉は、

「緑^{ろく}、それが今日からのあなたよ」

俺に家に帰ったような安心感をもたらした。

幻想郷の暮らしが始まる。

負の第二幕：観察結果

おや、彼は名前を貰った様だね。

八雲の皆さんに名前で縛られちゃったけど、これで僕の名前を聞く機会は減るかな？

彼が……緑が僕の名前を認識して、僕が表面に出るのは避けたいからね。

それにしても、僕を気絶まで追い込んだあの雷。

今となって思い出せば随分と高い神力を持っていたよ。

まさか無能力の緑を、能力持ちにしてしまうなんて。

いや、貸し与えただけなのかな？

「電気を操る程度の能力」なんて、幻想郷じゃ御法度でしょ。

雷だったら良かったのに、電気じゃねえ。

炎を使う人がいたけど、彼女も能力で炎を扱ってる訳じゃないし、どうにもこの場所には幻想を否定する要素は無いらしいね。

まあそんな事はどうでもいいや。

名前と能力を手に入れた彼なら、これから僕的能力を勝手に使われる事はないだろう。

右腕の治癒に使ったから百歩譲って許すけど、他の事に使ってたら消してた所だよ。

まあ、これで本当に僕は眠れるのかな？

緑ってあまりにも無防備で無気力なんだもの。

僕の身体に傷が付かないか心配だったけど、八雲の皆さんがいるな

ら大丈夫そうだね。

じゃあ緑、彼女達との絆が強まるまで、精々頑張っ
てね。極力壊し甲斐のある物を作ってくれよ。

じゃあ、お休みなさい。

第六幕…それぞれの常識

俺の朝は、藍様に起こされる事から始まる。

「橙！ 緑！ ご飯だぞ！」

ここは八雲紫様の家、マヨヒガ。

迷い家とも言うが幻想郷ではマヨヒガの愛称が普通だ。

「ファ……ファファ……」

藍様が（橙様の式になったので全員様付け）起こしに来てくれたが、一向に起きようとしないう俺。

朝はいつも眠い。

好物でも無い限り、俺は起きられないぜ。

「今日のご飯はパンだぞ！」

「っはいしたぁー！」

布団を吹き飛ばして覚醒。

久しぶりの洋食だ！

「橙様！ 起きてください！ 今日も素晴らしい朝ですよ！」

「さっきまでファファファ言ってた奴の言う台詞じゃないな」

「それとこれとは話が別次元です！」

だって洋食だぜ！？

どう歪んで見ても和食しか作れなさそうなマヨヒガに洋食だぜ！？

「むにゃにゃ……ふう……」

依然橙様は起きない。

子供らしい愛くるしい寝顔を見せるだけだ。

……隣で藍様が鼻血を我慢してるように見えるのは気のせいだろう。

「今起きてくれたらマタタビを買いに行きましょう」

俺は魔法の言葉を唱える。

「ウニャ！」

こちらも覚醒。

似たもの師弟である。

あれ？ 俺一応高校生だった気がする……。

「まあ、その……私達実年齢は君より確実に上だし、その……。
大丈夫なんじゃないか？」

藍さんの軽い慰め。

「ならいいか」

そう考えて、俺は同意した。

「いや、そこは同意するなよ……」

「うん……可笑的と思う」

「え？」

違うの？

俺が一番年下だからOKじゃないの？

「……まあいい。着替え終わったら居間に来てくれ」
「はい」

藍様の言葉に応えて、俺と橙様は着替え始める。

橙様はいつもの中国風の服に。

俺は学生服に。

朝食後、俺は自分の鍛錬をしていた。

今の俺では、八雲家の人々に守られるだけの存在だ。

それは男としてちょっと頼りないと感じたので、修行中だ。

一応能力の暴走の可能性もあるので、橙様が監視している。

「電気を使えるなら、応用が広いからな！」

近くの木々に片っ端から放電を放つ。

瞬間、目を閉じてしまう程の閃光が俺を襲う。

目が見えるようになって真っ先に見たのは、焼き焦げた木と、無傷の木。

「くそっ……全然力が制御出来ない……！」

そのばらつきは、俺を不快にさせた。

その様子を一部始終見ていた橙様は

「緑、ちょっと付き合いなさい」

と言った。

「付き合うって……修行ですか？」

「そうよ。簡単な弾幕ごっこをしてほしいの」

真剣な目でこちらを見る橙様。

橙様の意図は読めないが、その迫力に圧されて俺は頷いた。

「では行きますよ、橙様」

「かかってきなさい、緑」

両者構えの体勢。

「凶兆の黒猫、八雲橙」

橙様の宣言。

「狐と猫と隙間の式、緑」

俺の宣言。

今まさに戦いの火ぶたが切り落とされようとしている。

「「いざ参るッ！」」

弾幕ごっこが始まった。

ここでひとつ、俺の能力を説明しよう。

『電気を操る程度能力』

これは紫様や藍様によると、結構応用が利くらしい。

「だからって戦闘中にそんな応用なんて出来ないよな……！」

「余所見しない！」

橙様の声。

お互いの弾が当たり、弾け、砕け散る。

近くからじゃわからないけど、遠くから見ればさぞかし綺麗な光景だろう。

お互いがある程度力を使ったところで橙様が距離を取り、ひととき強い弾幕を放つ。

「仙符『屍解永遠』」

一瞬見蕩れてしまうような弾幕に、思考が奪われる。

「……ってうおお！ 危なっ！」

反射的に電撃を放って弾幕の一部を相殺する。

その際の爆風を利用して、俺は一気に距離を引き離す。

「なかなかやるじゃない！」

「そいつはどうも……っ！」

畜生、スペルカードを宣言されたら勝てないな。

俺のスペルカードは……駄目だ、あれを使うのはちょっと怖い。

……そうだ、宣言させなければいいんだ。

俺はそう思いながら、弾幕を避けきる。

橙様は続けざまに、スペルカードを宣言しようとした。

「させるか！」

が、俺は電撃を橙様の手に発射する事によって、スペルカード宣言を阻止した。

その雷は橙様の手のスペルカードを焼き焦がす。

『悪い目は早く詰む』

それが、今俺に出来る最大の戦略。

「弾幕はスピードだあ！」

俺は更に、電撃による追い撃ちをする。

「ちょ……！ スペルカードを狙うのは反則だって！」

「真剣勝負にそんな事関係あるかあ！」

俺はそう叫び、弾幕の濃さを強くする。

「方符『奇門遁甲』！」

橙様がまたスペルカードを宣言する。

しかし、弾幕が発射されるまで若干のタイムラグが発生する。

「!」

そこを俺は、見逃さない。

密度の濃い弾幕を放ち、橙様が吹き飛ぶ。

「はあ、終わったか……」

力を抜く。

あ、吹き飛んでいった橙様を助けられないとな……。

空に向けて飛ばしたから、途中空を飛んで復帰するかもしれないが

「油断するんじゃないわよ」

万が一橙様が気絶していたら藍様に……

「へ？」

馬鹿な。

確かに弾は当たった、手応えがあったんだ。

なのに何故、橙様は俺の真後ろにいる？

「身代わりの術を使わせるほど強くなったのは嬉しいけど」

疑問を解決させる台詞。

同時に、俺の背中に悪寒が走った。

橙様は手を掲げる。

「敵の撃墜を確認しないうちに気を抜くなんて、まだまだよ」

俺の心臓に向けて橙様が妖力の弾を放つ。

たった一発だが、勝負を終わらせるには十分過ぎる威力だった。

「ま、負けたあ……」

服を泥だらけにしてしまった……。

そろそろ新しい服を買わなければ……。

「怪我は少ないね。まあ合格点かな？」

橙様の言うとおり、体に傷が少ないのがせめてもの救いだ。

これ以上汚したら全裸生活だった。

「いや、その発想は可笑しいでしょ……それにね、緑？」

橙様がキツとこちらを睨み、

「さっき貴方が行ったスペル宣言の阻止、あれ、反則だから」

そう言った。

「いや、真剣勝負だったから……」

「弾幕ごっこは遊びよ」

反論しようにも、橙様がそれを遮る。

「真剣に遊べて言葉もあるけど、それでも遊びなの。命の削り合
いじゃないの」

「……………」

知っている。

紫様から聞かされている。

だのに、俺の何処かで『生きる為に手段は選ぶな』という声が聞こ
えてくるような気がするんだ。

本能に刻まれ、それを何度も心に言い聞かせてきたような。

そんな感覚が、遊^{戦ってる}んでる最中ずっと有った。

「今の内にその認識、緑の持つてる常識を幻想郷に合わせて。じゃ
ないと、紫様に消されちゃう」

橙様は、どこか懇願するような雰囲気を書き加えてそう言った。

第七幕：表と裏

「緑く、橙く、ちよつと来てく」

昼頃、紫様が俺達を呼んだ。

先ほど橙様と行った弾幕ごつこのおかげで体の節々が痛いのを堪え、声の聞こえた玄関の方まで行く。

「なんでしょう？」

見れば、藍様と何処かへ行く最中のようだった。
何か忘れ物だろうか。

「はいこれ」

紫様が二枚のスペルカードを俺達に差し出す。
見れば、同じ絵柄が描いてある。

「……なんすか、これ？」

当然、疑問に思うので聞いてみる。

「プレゼントよ。それには私の能力を術式で再現してるから、一回につき一つだけスキマを開けるわ」

「っ！？ マジで！？」

「いいんですか！？」

俺はあまりの喜びで敬語じゃなくなってしまった。
失礼とは解っているが、俺にとってはそれほどの代物なんだ。

「大マジよ。何回でも使えるから気兼ねなく使ってね」

扇子で顔を隠す紫様。

いい事をしてるのに、恥ずかしがってるのだろう。
ちよっと可愛いです。

「あ、連絡にも使うから無くさないでちょうだい」
「わかりました。ありがとうございます」

俺はお礼を言って、笑顔を作った。

紫様はそんな俺の顔を見て、一瞬だけ目を細めた。

「じゃあ、行ってくるから。お留守番よろしく」

「「はい」」

「……ここでいいかしらね」

「紫様、話って何でしょうか？」

そこはスキマの中。

八雲紫は、スキマ越しに新しい式を見ていた。

「緑……いえ、むどうみなと夢道湊についてよ」

「!?!」

紫は彼の危険性を知っている。だから、藍に彼を保護させた。

「吹き飛ばされた腕を一瞬で治し、博麗大結界を通り抜けられ、人格を創造する……。」

これが一人の人間の能力かしら？」

「……………」

どんな能力かは湊本人しか知らない。

でも、その力が及ぼす影響は理解出来る。

少なくとも、ここを守る立場である紫には。

「だから、橙に伝えて。緑に何か異変があったら迷わず……殺しなさい」

「これ宣言の必要があるけど、スペルカードなんですか？」

「いや、ただの通信用御札だと思うよ？」

紫様と藍様が何処かへ行った直後、俺と橙様は貰ったスペルカードについて調べていた。

ある程度解析が終わったので、試しに使う事にする。

「『借物』『隙間の恩恵』」

二人で揃えて宣言すると、目の前に二つのスキマが開かれた。

「あれ？」

ただし、俺の目の前に開かれたスキマは何故か歪な形をしており、例えるなら割れた窓ガラスだった。

「あ、これ妖力用じゃん」

「え？　じゃあ俺使えないの？」

折角のプレゼントが……。

紫様ちゃんと調整してよ……。

「うーん、移動や通信に支障は無さそうだけど、出入りが辛いかな……」

「と言うと？」

「多分、スキマが刺さる」

「……どういう事ですか？」

「境界線が色濃く歪に顕現してるからちょっとした刃物の様になつて……」

まあ、入れば解ると思うよ？」

入れば解る、か。

説明聞いても全く理解出来なかったから、それはありがたい。

「あ、そうだ。ついでに買い物に行きたいんですが……」

「いいよ。何処？」

「学ランがそろそろ破けそうだから、服が欲しいんですよ」

「ああー、なるほど」

正直弾幕ごっこの為に着る物じゃないと思う。
いや、そもそも運動系全般に適していない。

「じゃあ行こうか。えっとお金は……ん？」

橙様が家の財布を確認しようとしたところで、いきなり橙様の動きが止まった。

「あ、紫様から通信だ」

あ、早速通信が来たのか。

俺の所に来なかったのは……やっぱり霊力と妖力の違いかな？

「はい、わかりました……緑、先に行つてて」

「え？」

「これがお金ね。移動場所は魔法の森の入り口に座標を指定してね」

「え、ちょ、橙様？」

何？ 何があったの？

気になってソワソワする俺を見て、

「……ごめん」

橙様は俺をスキマに突き飛ばした。

スキマに触った箇所が、切り刻まれる。

「痛ってえ！　なんだこのスキマ!？」

「後で行くからー!」

「アッー!」

変な断末魔を叫びながら、俺の身体は完全にスキマに入った。
スキマの中は不気味な浮遊感が有った。

「くっ……かはっ……！」

投げ捨てられたように地面に着地する。
スキマから出る際、また身体に切り傷を負ってしまった。

「痛過ぎだろ……」

起き上がり、痛む箇所を見る。
左足は泥と血だらけ、両肩も赤く染まっていた。

「畜生、今度から自力で調整するか……」

折角新しく服を買っても、これではすぐに傷が付いてしまうだろう。

「さて、ここは……」

見たところ、薄暗い森の入り口の様だった。
入り口には、こじやれた店が一軒ある。

「ここかな？」

ゆっくりと近付き、中の様子を見る。

外から見た店の中には、食品の他に日本刀、自転車、た○ごつち、
iP○d、ガ○プラ、ダイヤモンド、
洋服、DVD、野球ボール、広○苑、抱き枕、グランドピアノ、シ
ヤーペンシル、何かのリモコン、

ハエトリソウ、可愛らしいフィギュア、鉄パイプ、○S3のコントローラー、etc、etc……。

一言で言うと、節操がない。

「この店はなんだ、ガラクタ置き場か」

失礼な事を思いながらも店の中に入る。

「すみませーん、誰かいますかー？」

三秒間待つ。

特に返事は無い。

「誰もいないのか？」

「残念だったね、一人いるよ」

不意に、入り口の方から気配が感じられる。

振り向けば、白髪的眼鏡をかけた男性がそこにいた。

「昨日は咲夜で今日は見知らぬ男性か……。

営業時間……それ以前に定休日を知らないのかい？」

「それはすいません……ところで定休日はいつですか？」

「僕の気まぐれで決まる」

わかるわけないだろ。

「趣味と実益ってやつさ。この店は僕の趣味でやっている」

噛み合ってるようで噛み合わない会話。

その中で掴んだ彼の個性。

この人は……変人だ。

「おっと、自己紹介が遅れたね。僕の名前は森近霖之助、この香霖堂の店主さ」

彼……？霖之助さんはそう名乗った。

「それで、君の用事は何なのかな？ 冷やかしたら帰ってもらおうよ」

そう言いながら彼は店の奥にある机に座り、こちらを見た。

俺は用件を言う。

「……服を買いに来たんだ」

「へえ、いいタイミングだね。丁度昨日新しく拾ってきたばっかなんだ」

霖之助さんは立ち上がり、近くにあった洋筆笥の引き出しを開ける。

「こんなのはどうだい？」

彼が取り出したのは、紺のジーンパン柄、緑のチェック柄のTシャツにオレンジのパーカーだった。

うん、良いんじゃないか？

「試着は可能ですか？」

「勿論だよ。ここで着替えて構わないさ」

それを聞いて、俺は学ランを脱ぐ。

あ、そういえば大怪我して出血中だったな。

「すみません、この服預かって貰えます？」

「……いや、まず怪我の治療を頼むんじゃないかな？」

あれ？

霖之助さんは本来なら商品であつたはずの救急箱を使用して、俺の傷を塞いでくれた。

応急処置だが、血が漏れなくなったのはありがたい。

「本当なら店には行つて真っ先に治療を進めるべきだったんだけど、君があまりにも平氣そうな顔してるから忘れちゃったよ」
「そ、そうですか……」

自覚無いな。

「まあ、これで試着が出来るね」

「そうですね、では」

俺は緑の服に袖を通す。

「似合いますかね？」

「いいんじゃないかな？」

次は紺のズボンを履く。

「ところで今の考えでは、その服は買う事になってるのかな？」

「半々ですかね、姿見を見て決めますよ」

最後に俺は、オレンジのパーカーを羽織った。

「……意外と動きやすいな」

軽く腕を振ってみる。

抵抗は少ない。

「はい、姿見」

霖之助さんがわざわざ姿見を持ってきてくれた。
俺は自分の姿を凝視する。

「買った」

「毎度ありがとうございます」

眈々とした買い物が終わり、現在俺は店の中を見て回っていた。

「しかし、本当にいろいろあるな」

改めて見回すと、何でも屋の名に恥じない量の品物がある。

「あ？　なんだあれ？」

ふと霖之助さんの座ってる場所の奥を見ると、ひととき異彩を放つ物があった。

「霖之助さん、何で店の奥に鉄パイプ？」

「ん？ ああ、あれは魔法具、マジックアイテムだよ」

「マジックアイテム？」

妙にそそられるネーミングじゃないか。

「マジックアイテムって何なんだ？」

「普通の道具ではなし得ない事が出来る道具……僕らの言う能力の道具版さ」

能力の道具版、か。

「なるほどねえ……じゃあ、その鉄パイプはどんな特殊効果があるんだ？」

「これかい？」

霖之助さんはそれを取り出し、中心を持つ。

「これは通常時は特にたいした特徴もない、ただの鉄パイプだよ。でもね？ よっと」

突然鉄パイプの端を持ち、大きく振るう霖之助さん。

すると、何処からか半透明な刃が現れた。

無機質な鉄パイプは、存在感を大きく示す大剣となったのだ。

「こんな風に靈力によって構成された刃が発生する。

発生の方は人それぞれで、剣にも槍にもなってしまう。

僕はこれを、『無角棒^{むかくぼう}』と呼称してるんだ」

霖之助さんはその無角棒を仕舞い、椅子に座り直す。

「……その武器、いくらで買えますか？」

「無料でいいよ。これ、失敗作だし」

その言葉を聞き、すかさず八角棒を手取る。

「少しは遠慮してくれてもいいんじゃないかな？」

「……何が？」

「……いや、もういいよ」

霖之助さんは何が言いたいんだろう……。

まあ、考えても無駄かな？

その後俺は、店を出てマヨヒガに帰った。

「あ、緑……その……お帰り」

橙様が迎えてくれたが、笑顔がぎこちなく感じた。

……あれか。スキマに突き飛ばした事か。

「先ほどの事なら気にしないでください。

俺には聞かせられないような内容だったんでしょう？」

まだ完全には信頼されてない事くらい、俺にも理解出来る。
特に藍様からは結構厳しい事も言われているからな。

「え？ ああ……うん、そうなの、ごめんね？」

「だから大丈夫ですって」

「うん……」

泣きそうな顔で頷く橙様。

うう、何もしてないのに罪悪感が……。

「ほら、ご飯を作りましょう？」

俺は話題を逸らす。

しかし、まだ橙様は俯いたままだ。

「お、俺先に台所に行きますね！」

俺はとうとう耐えきれなくなり、台所へと逃げ出した。

だからなのだろうか。

「……本当にごめんね」

橙様が小さく呟いた謝罪の本当の意味を、理解出来なかったのは。

第八幕…スペルカード

見渡す限り真っ白で、
上も下も右も左も前も後ろもわからない場所。

——ここは精神世界。

己に疑問を持つ者の訪れる場所。

「なあ、雷神様よ」

「なんだ」

緑は、そこで己の能力に問いかける。

「『電気を操る能力』……これは俺の力なのか？」

「そうだ」

雷電の化身、雷神様に。

「本当にあんたの力じゃ無いのか？」

「……何が言いたい」

「俺は自分の力で生きようと願ったんだ。雷神様の力を借りてちや意味がないだろ」

「なんだ、そんなことか」

雷神様は嘲笑する。

「これは確かに俺の能力だ。しかし、使役するのは貴様自身だ」
「……何が目的だ？」

緑は恩人に対して、怪訝そうな顔をする。

「今はまだ知らなくていいだろう。その力、まだまだ強くなる」

雷神様は、緑に対してこう言った。

「貴様は何も考えるな、ただ強くなれ」

雷神様はそう言って、白い空間に溶けていった。

「つたく、なんだっての……」

日も上がっていない時刻、俺は目が覚めてしまった。

目覚めは、前の時のように最悪だ。

「ただ強くなれって言われてもな……」

目的も無しに、強くなれる訳がない。

八雲家の皆の力を借りずとも、今の俺なら自力で生きられる状況である。

既に目的は、達している。

「……自主修行するか」

それでも、腕を上げておくにこした事はないだろう。

単に言いなりになるのが嫌なだけで、修行が嫌いな訳じゃない。

「……俺は誰に言い訳してるんだろうな」

自分でわかっているのに、あえて自分に聞いてみた。

「……ははっ、答えなんて返ってこないよな」

布団を畳んで、香霖堂で買った私服に着替えた。
紫様は、まだ帰ってきてない。

「……よし、出来た」

結論だけ述べると、今日の修行で自分で紙に書いた術式が発動するようになった。

つまり、作りかけだったスペルカードを完成させたのだ。

ここで補足しておく、本来ならスペルカードはこういう物ではない。

宣言用に適当な紙があればそれで事足りる。

だが、俺は記憶力と集中力が高い方ではないので同じ技を使う事が非常に難しい。

そこで簡単なパターンを術式として描き、何度でも同じ技を使う事が出来るようにしたのだ。

それでも多少集中力はあるが、威力と密度くらいしか影響しないだろう。

「橙様に試してもらおうかなあ」

時計を横目で見る。

「……まだ時間も早いし、自分で試すか」

不備があつたら橙様に迷惑をかけるな。

それにまた前みたいに泣かれても困るし。

俺は立ち上がり、外に出る。

「お、妖精がいるな」

結構力の強そうな妖怪が三匹いた。

見れば、悪戯の準備をしているようだった。

「……警告する。この場で悪戯をするのなら、容赦なく貴様等に弾幕を浴びせる」

「「!?!」」

三匹の妖精は、驚いたようにこちらを見る。

「ちょっと! こんな時間に人がいるなんて聞いてないよ!」

「どうする? 退却する?」

「そんな訳無いでしょ! こうなればあの弱そうな奴をボコボコにして続行するわよ!」

妖精達の会話が聞こえてくる。

どうやら、悪戯を止める気はさらさら無いらしい。

……うん、悪い目は早く摘もうか。

「電符『ライティングブレス』」

スペルカードを宣言する。

「え、ちょ!」

すると、俺の前方に向けて大弾がランダムに発射される。前面に対処するような弾幕だ。

「こっちはまだ準備もしてないよ!?!」

いきなりの弾幕で、三匹の妖精は戸惑っている。

「……初めてにしては良好だな」

その大玉はある程度進むと急に止まった。弾に囲まれる体勢になった妖精達。

「……流れろっ!」

俺のかけ声を合図に、弾と弾の間に電流が一瞬で走る。

「キャアアア!」

「「サ、サニー!?!」」

その電流は、サニーと呼ばれた妖精を丸焦げにした。

「……威力調整に失敗したかな?」

自身のスペルカードを手にも、術式を書き換える俺。

「お、覚えてなさい!」

「仮は必ず返したりするんだから！」

残りの妖精が、丸焦げの妖精を担いで逃げ出した。

「……………」

俺はその様子を、術式を書き換えながら眺めていた。

「緑く、買い物行ってきて」

あれから数時間、橙様がご飯を作りながら俺を呼んだ。
太陽は既に西に傾いている。

「わかった。何を買えば」

「はにゃ！」

俺が台所に入ると、橙様は吹きこぼれた鍋の対処に慌てていた。

「……………」

最近、藍様が鼻血の弾幕を出す理由がわかってきた気がする。

「……何買えばいいんです？」

橙様はお鍋を抑えながら言う。

「お醤油とみりん、お魚を適当に四匹！」

「は〜い」

気の抜けた返事をし、
紫様からのプレゼントを取り出す。

「借物『隙間の恩恵』」

そしてそのまま、人里へ向かった。

「よいしょ……いててて」

スキマを抜けて人里の手前に降りる。
それにしても、いつ使っても出入りが痛いなあ……。

「クッションでも持ち歩こうかなあ」

なんて間抜けな事を考えていると、

「キャアアアア！」

女性の悲鳴が聞こえた様な気がした。

「……気のせいかな？」

「誰か、誰か助けて！」

……気のせいじゃないな。

俺は悲鳴の聞こえた方に向けて走りだした。

悲鳴があつた場所は、人里に近いとも遠いとも言えない草原地帯。駆けつければ、妖怪が可愛い女の子を襲っていた。

他にも、防具を着た大人の死体があるところ転がっているのが見えた。

少女と妖怪の距離、約30センチ。

「おりゃ」

走りじゃ間に合わないと悟り、すぐさま電撃を放つ。

それは見事に、妖怪の顔に命中した。

相手が怯んでる隙に、妖怪と少女の間に入る。

「間に合ったな、お嬢さん。早く俺の後ろに」

「え……？ あなたは？」

「緑。ただの非凡な式神さ」

適当に対応しながら、妖怪の方を向く。

「ぐおおおおお！」

視界が急に暗くなる。

とっさに少女を抱えて跳ぶと、元いた場所にクレーターが出来た。

俺は妖怪に話しかける。

「まったく……人里付近での捕食行為は禁止って知らないのか？」

妖怪は顔をしかめたまま俺の問いに答える。

「知った事か。この牛鬼が海を捨ててまで来ているのだ。」

邪魔立てするなら、貴様も食らう!」

そんな台詞を言い放ち、妖怪牛鬼が真っ直ぐ俺を襲いに來た。

「お前の事情なんてどうでもいいよ。とりあえず消えろ」

俺はスペルカードを構える。

折角の機会だから活用しないとね。

「電符『ライティングブレス』」

動きを制限するような弾幕から、致死量を遙かに超える電流が流れた。

「ただいまあ」

「お帰りなさい」

時刻は六時。

割と早く帰ってこれたな。

「よいしょ……いててて」

俺は痛みを堪えて居間に降り立つ。

蛇足だが、靴は脱いでおいてある。

ついさつき玄関に投げ捨てておいた。

「はい、醤油にみりん。魚は全部切り身だから」

「……丸々一匹がよかったな」

「売ってなかったよ、そんな大きいの」

嘘だ。

本当は高すぎて買えなかったただけだ。
ていうかこっちの方が調理は楽だ。

「仕方ないなあ、ご飯にしよう？」

「うん」

俺は二人分のご飯を茶碗に盛る。

「そういえば橙様」

俺は今日助けた女の子について話す事にした。
橙様の手には、味噌汁が掴まれている。

「なに？」

橙様なら知ってるかと思い、俺は少女の名前を問う。

「稗田阿求って知ってる？」

第九幕…人里の相談所

「稗田阿求……なんで緑が知ってるの？」

橙様が味噌汁をちゃぶ台に置きながら喋る。

「え？ 何？ そんなに有名？」

「有名過ぎる有名人。お金持ちで歴史の本書いてて転生者」
「なんだその属性過多」

お金持ちは護衛がいたから納得。

歴史の本ってのは……賢そうだから無くはないな。
でも、転生者？

「転生って……閻魔様に媚び売る感じ？」

あんな可愛い顔して結構狡猾なんだな

「いや、だいぶ違うから」
「？」

……違うの？

「だからその思考回路を直して……ああもういいや。
で、その阿求さんがどうしたの？」

「今日人里まで行ったら、その人が襲われてたんですよ。」

それで明日、お礼を貰いに人里に行くんですけど……駄目ですか？」

俺は橙様の顔を見る。

「……いいよ」

橙様は、快く了承してくれた。

そして現在。

「ここが稗田さんのお宅か」

目の前には、日本風のお屋敷がある。
ここが稗田さんのお宅だ。

囲いを見る限り、かなりの大豪邸だというのがわかる。

「すいませーん」

玄関をノックしてみる。

しかし、返事はない。

「こう言うところは不便だよな……」

インターホンのありがたさを身に染みて実感した。

しばらくすると、声が聞こえた。

「誰だ、玄関で謝ってるのは」
「違う」

あ、でも幻想郷じゃすいませんとは言わないのかな？
改めて玄関をノックする。

「ごめんくださいーい」

「それなら家を出て右の所に売ってるよ」

「……おめんください？」

「……………」

いつの時代のギャグだよ。

「で、何のご用でしょうか？」

用件を言う俺。

「稗田阿求さんいますか？」

「あ、阿求様のお客様でしたか。どうぞこちらへ」

俺はその人に連れられ、屋敷の中へと入っていった。

応接間で待つ事十数分。

綺麗な着物を着た少女が訪れた。

「先日はお助けいただきありがとうございます。」

私は稗田阿求と申します」

清楚な印象が強い稗田家の当主。

少し、顔色が悪い気がするのには気のせいだろうか？

「先日は有り難う御座いました」

「いえ、私はたいした事などしてませんし……」

慌てて首を横に振る俺。

口や動作では否定しているが、内心とても嬉しい。

「それで、お礼と言うのは……」

「あ、はい。何でも言うてください。可能な限りお答えします」

「は、はあ……」

何も要らない……は無しだな。

拒否したとしても、向こうの気持ちを無下にする事になる。

だったら最初から望みを考えていた方がいいだろう。

それにしても、望みか……。

俺が欲しいのは力とか知識だからなあ……。

稗田さんがどうこう出来る問題じゃないからな……。

ん？ 知識？

そういえば橙様が彼女は歴史の本を書いているって言ってたな。

「……稗田さんは歴史書を書いているそうですね」

「あ、はい。幻想郷縁起と言うものを書いています」

よし、決めた。

「それを見せてください」

「なるほど……紅魔異変ね」

助けたお礼として俺が望んだのは、

幻想郷の歴史書、『幻想郷縁起』を全部読ませてもらうことだ。

俺はここに来ただけで全くもって幻想郷について知識がない。

紫様の式の式の式だと言うのに、そのくらい覚えておかないと彼女達が笑われてしまうかもしれない。

それに、この本は歴史書だけでなく人妖についても書かれているので、

これからの行動においてトラブルを起こさない様に出来るであろう。

なるほど、俺がくる前に異変が5回もあったのか。

一度異変を生で見てみたいなあ。

「まあ、そんなこと望んだら怒られるな」

幻想郷縁起をめくる音が部屋に響く。

ふーん、月が欠けた永夜異変なんてのもあるのか。

なになに……首謀者は八意永琳。

現在は迷いの竹林にて薬屋を営業か……。

今度行ってみるかな。

「ん？ 人間も書いてあるのか」

人名と容姿の写真、能力から所在地まで事細かに書いてある。

「たまたま人外な能力を持った人がいますから、書いておく必要があるんです」

「へえー、便利だなこの本」

歴史書っていうより、ガイドブックな気もしなくもない。

「蓬莱人、藤原妹紅……蓬莱人ってなんだ？」

「簡単に説明しますと、不老不死の元人間です」

稗田さんのありがたいタイミングでの解説。

「不老不死って……そんなのになれるんですか？」

不老不死なんてもの、人類の永遠の夢だろうに。

いや、幻想郷だからあり……なのか？

「材料さえ用意すれば、八意さんが作ってくださいますよ？」

「果たして用意すべき材料を知っている人が人里に何人いるのだから」

誰も頼めないんじゃないか？

それにつけても八意さんすげえな。

ますます会いたくなってきたぜ。

「それにしても女性しかいないな。もっと男性で強い奴がいても……お？」

幻想郷の人物紹介欄に、男性が三人書かれていた。

よかった。男尊女卑ならぬ女尊男卑な社会なのかと錯覚するところだった。

ページをめくる。

「なんだ、霖之助さんじゃないか」

ふんどしで仁王立ちした写真だ。
……何があった。

更にページをめくる。

「魂魄妖忌、現在行方不明……なんだ会えないのか」

腰に刀を二本差したロマンスグレーなお爺ちゃんの写真だ。
半人半霊らしい。

「この方のお孫さんが探すのに手伝ってくれと言われたので、こうして載せてるんです」

「へえ、そうなんですか、見つかるといいですね」

俺は解説を聞き流し、更にページをめくった。

「こいつで最後か……名前は南昌なんしょうあんご暗吾か」

首から上が毛玉を被ったような人間の写真が描かれている。

「持ち前の能力を生かし、相談所を営業？」

「彼、見た目の割に頼りになるって評判なんですよ？」

「ふーん、帰りに会ってみるか」

そう言いながら、俺は見落としたページがないか確認して稗田さんに幻想郷縁起を渡した。

「ありがとうございました」

「いえ、どういたしまして。あ、昼ご飯食べていきますか？」

「大丈夫です、それでは」

俺は稗田さんに挨拶をして、例の相談所に向かう準備をする。
去り際に、橙様が八雲姓を貰った事も伝えておいた。

賑やかな商店街。

人妖入り交じっても、ここは平和だ。

「ここか……」

とある店の看板を見る。

「学校の近くにカウンセラーか、考えてるな」

寺子屋の向かい、南昌相談所はそこにあった。

スクールカウンセラーも兼ねているのだろうか。

相談所のドアを開ける。

「おや、いらっ、しゃい」

部屋の中は全体的に薄暗く、椅子と机と

一心不乱にルービックキューブを弄る毛玉しかなかった。

「何の、用、か、な、？」

その毛玉——南昌暗吾は問いかける。

毛玉と思われたものは髪の毛で、口元しか見えない程に放置された
ボサボサの髪だった。

そして白黒の縞々という、不気味な髪の色。

服装は所々継ぎ接ぎがされている袴。

赤や青など派手な色から、灰色や茶色といった落ち着いた色の布で縫われている。

「ちょっと人生相談を」

俺は嫌悪感を隠しながら、来客用の椅子に座る。

「君……いや、なんでも、ない、よ」

暗吾さんは一瞬動揺したような口調になったが、すぐに落ち着いた口調に戻る。

俺は口を開き、暗吾さんに相談をした。

「強くなりたいんです」

「何、故？」

「紫様や藍様……自分の主を守りたいからです」

「うん、知って、る」

暗吾さんは、俺の顔を見ながらそう呟いた。

「知ってる？」

「そう、知って、る」

言葉の意味を反芻するように喋る暗吾さん。

「……一体何なんだ、お前は」

「南昌、暗吾。相談、所、を、営んで、る、ただ、の、外来、人、

さ」

暗吾さんは見据える様な視線を向けて言う。
その眼は、こちらからは見えない。

「君、は、確か、に、強く、なり、たい、と、望んで、い、る。
それ、も、自分、の、主、に、極力、迷惑、を、かけ、ない、よ
う、に」

的確に俺の考えを言い当てる暗吾さん。

「雷神、様、の、意図、が、読め、ない、から、
恩人、の、力を、借り、る、の、が、怖い、と、思って、い、る、
ん、だ、君、は」

暗吾さんは更に、雷神様の事についても言い当てる。

「幻想郷、縁起、を、見て、ここ、に、来た、よう、だけ、ど……
なる、ほど、ね。

見ず、知ら、ず、の、他人、に、は、迷惑、を、かけて、いい、
と、思って、る、ん、だ。

いや、はや、見た目、だけ、じゃ、なく、中身、も、そっくり、
か」

終いには、俺が知らない事についても言い当てた。

「……それがあんたの『人を知る程度の能力』か」

「正解。よく、出来、ました」

ルービックキューブを動かしながら、呟くように言う暗吾さん。

「私の、能力、は、人、を、知る、程度、の、能力。
君、の、過去、や、思考、性格、更に、表面、心理、や、深層、
心理、本来の、性格、も、全部、理解、出来、る」

暗吾さんはゆっくりと諭すように話す。
その口調が、俺を大きく苛つかせる。

「強く、なり、たい、なら、私、じゃ、ない、別、の、赤、の、他
人、を、紹介、しよ、う。」

で、も、君、に、は、八雲、橙、と、いう、師匠、が、いる、ん、
だろ、う？」

「……橙様には迷惑をかけたくない」

「だよ、ね、知って、る」

暗吾さんは一面も揃わないルービックキューブを投げ捨て、こう答えた。

「結論、か、ら、言う、と、君、は、永遠、亭、の、薬、師を、師
匠、に、する、と、良い。」

彼女、は、頭が、良い、し、人も、出来、て、いる。

電氣、を、扱う、君、が、力、を、つける、に、は、もって、こ
い、さ。

どう、せ、挨拶、に、行こ、うと、して、るん、だ、ろ、う？」

どうにも、俺の行動は見透かされやすいようだ。

いや、これはただ単に暗吾さんが俺を知っているだけなのだろう。

相談を受け終えた時には、もう日が暮れていた。
橙様が心配してると思い、俺は素早くマヨヒガに帰る。

「お風呂沸いてるから入ってもいいよ」

橙様は特に気にした様子でもなく、俺に風呂へ入るよう促した。

「わかりました」

俺はすぐに風呂に向かい、疲れを取る事にした。

「修行か……」

マヨヒガで俺しか使わない風呂場。

水音が、虚しく響く。

今日は、いろいろとあった。

八雲の式として、こんな俺では彼女たちの恥だ。

「南昌、暗吾か……」

不意にあの変人の事を思い出す。

……不思議だ。

どうしようもないくらい不気味で、不快感を加速させる喋り方だといふのに。

「南昌暗吾……何処かで会ったっけ？」

どうにも嫌いにはなれないのだ。
まるで、夢の中で会ったかの様な。

「……それはないな」

夢でも精神世界でも、彼に会った事は一度もない。
彼みたいな髪の色なら、絶対に気付く。

「……気のせいだな」

俺はそう結論付けて、風呂から出る。
目の前は湯気のせいではやけていた。

第十幕：身勝手な行動（前書き）

今回はオリジナル展開有ります

第十幕：身勝手な行動

夢を見た。

それはとても単純な内容で、最低な内容だった。

夕日が差し込む教室の中、男が女の顔を殴り続ける夢。

何度も何度も、相手の顔面が痣だらけになろうと血まみれになろうと。

憎しみと快感をぶつけ続ける一人の外道の夢。

それを俺は何度も何度も見せられた。

どうして俺がそんな夢を見るのかは解らない。

理解出来ないし、したくもない。

ただ一つ言える事。

その女性を殴り続ける外道は、俺に似ているという事だけだった。

俺が幻想郷に来てから二ヶ月が過ぎようとしていた。

外には雪が降り、夜空に浮かぶ月は綺麗な丸を写している。

「……また、あの夢か」

そんな中、俺は眠りから目覚める。

「……何時まで寝ていたんだ？」

重いまぶたを開けて時計を見ると、針は十時を指していた。

未だ微妙に覚醒していない頭を揺さぶり、身体を起こす。
ふらつきが収まったところで、俺は布団を畳み始めた。

「ん？」

敷き布団に手をかけると、一枚の紙が存在しているのに気付いた。

「……橙様？」

どうやら、俺に対しての置き手紙らしい。

緑へ

藍様と一緒に宴会へ行ってきます。
お留守番お願いね。

八雲橙より

PS、ついでに紫様と藍様と一緒に月に行きます。

「どう考えても追伸の方が重要だろ!？」

眠気が一気に吹き飛びました。
ていうかしっかりと八雲姓強調してるなあ……。

「……待てよ？ 今なら永遠亭に行っても大丈夫じゃないか？」

手を顎に当てて思案する。

大丈夫……かな？

「借物『隙間の恩恵』」

ここにおいても自主修行しかする事がないので、師に頼る事にした。
この好意が怒られるとしたら、その時はその時だ。

「今考えたって、無駄だしな」

俺はスキマの中に入っていった。

「紫様、緑が人里の相談所に向かいました」

「そう、わかったわ……」

紫のスキマの中、彼女たちは緑の監視をしていた。

「このままでは奴の復活も早まりますかね……」。

人の中身が無尽蔵に見通す読心能力、南昌とかいう人間も余計な事を……」

藍はスキマ越しに緑を睨み、会ってもいない暗吾に対して悪態をついた。

「……知っててやってるのかも」

突然、ポツリと橙が呟く。

「え？ どういう事だ橙？」

「……いえ、何でもないです」

しかしその発言は、本人によって打ち消される。
紫だけが、橙の真意を読み取っていた。

スキマを抜けた先は、相談所の入り口前だった。

「あれ？ おっかしいなあ……」

中に入るつもりでスキマを開いたんだけどな……。
まだ上手く扱い切れてないのか？

まあいいや。中に入ろう。

「おい、暗吾さん！ お客様ですよー！」

ドアをノックしながら叫ぶ。
すると中から、毛玉が現れた。

「……君、は、営業、時間、を、知ら、ない、の、か、い？
それ、より、も、大声、で、叫ば、ない。近所、迷、惑、だ、ろ
う？」

暗吾さんはそう言いながらも中へ入れてくれた。

「気まぐれに定休日を変える人を知ってるんでね。生憎参考にしてないんだよ」

俺はそれに対して皮肉で返す。

ただし、皮肉相手は暗吾さんじゃない。

「だか、ら、それ、より、も、大声、で、叫んだ、事、に、対し、て、謝罪、を、しろ、と、言っ、て、るん、だ、が？」

「近所の人にだろ？ ここにいない相手にどう謝れと？」

「……謝る、意志、は、ある、ん、だ。意外、だ、よ」

なんだその台詞。

まるで俺が全く人に謝らない性格みたいじゃないか。
どんなDQNだ。

「……スペル、カード、ルール、に、違反、し、て、反論、し、た、奴、の、台詞、じゃ、ない、ね。

相、も、変わらず、不安定、な、思念、だ、よ、君は」

俺に悪態をつきながら、暗吾さんは知恵の輪を弄り始める。

……そこまで言われると

「返す、言葉、も、無、い？」

暗吾さんは俺の思考に合わせるように喋った。

ああ、やっぱり常に読まれてるのか。

「私、は、ね、『読まれる』って、表現、が、好き、じゃ、無い、んだ。

表現、する、なら、『知ってるだけ』だ、と、言っ、て、ほし、い、ね」

「同じだそんな物」

「っ！かどうでもいい。心底どうでもいい。

「君、も、そう、言う、の、か……変、な、ところ、で、同じ、なん、だ、か、ら、な、あ……。」

「……おや、永遠、亭、に、行く、つもり、なん、だ。今、更、決、め、る、と、は、優、柔、不、断、の、極、み、だ、ね」

「また読んだ……いや、知ったのか。ああそうだよ。

「こちとら紫様達に黙って動くのは一大決心なんだ。そう易々と決められるか」

「そ、う、か、い」

興味の薄そうな返事。

そのうち暗吾さんは、知恵の輪を俺に向けて投げ捨てた。

「準備、が、出来、た、なら、行、こ、う、か。

「向、こ、う、は、無、限、の、時、間、が、あ、る、け、れ、ど、こ、ち、ら、は、限、ら、れ、た、時、間、し、か、な、い、か、ら、ね」

暗吾さんの不老不死を意識した発言。正直全然上手くない。

「心も体も明日の着替えも、全部準備出来てるよ。行こうぜ」
「そ、う、か、い」

暗吾さんは。

やはり、興味の薄そうな返事だった。

迷いの竹林。その中に永遠亭はある。

幻想郷随一の医療センターであるそこは、救急患者には迷惑な立地だった。

「道、に、迷っ、た……」

「……ここ、出入り口だよな」

入った場所に戻ってくると言うのは、迷いの竹林のせいなのだろうか。

はたまた隣の継ぎ接ぎ野郎のせいなのか。

「案内は任せてとか言ってたくせに、この方向音痴」

「違、う、よ、迷い、の、竹林、の、せい、さ。」

それと、君、は、もう、少し、他人、に、遠慮、しな、さい」

「知った事か……ん？」

本日三回目の出入り口に、目の前に白いワンピースの女の子がいた。ただし、頭にウサミミが生えている。

「確かあいつは……因幡てあ？」

幻想郷縁起には人を幸運にする兎詐欺って書いてあったな。

……兎詐欺？

「あ、彼女、な、ら、永遠、亭の、場所、を、知って、る、ね」

「捕獲するか？」

「……まあ、いいん、じゃ、ない？」

そうか……なら。

「兎狩りじゃー！」

「うさ!？」

俺は無角棒を構えながら突撃した。

「……やっぱり、止める、べき、だった、か、な」

後ろの暗吾さんの声は聞こえない事にした。

「幸運だなあ」

「そう、だね。幸運、だ、ね」

「てゐを拉致っても許されちゃうんだもんなあ」

「幸運、だね」

悪戯兎詐欺を連行して強制的に道案内をさせた俺達。
今は、永琳さんから差し出されたお茶を飲んでいる。

「じゃ、あ、改め、て、自己、紹介、を、しよう。

私、は、南昌、暗吾。永夜、異変、直後、に、幻想、入り、し、
た、人間、さ」

「八意永琳よ。よろしく、毛玉さん」

「はは、正、面、から、言われ、た、の、は、初めて、だ」

言って快活に笑う暗吾。

でも他人から見たら気味の悪い笑い方にしか聞こえない。
本人はちゃんと笑ってるつもりなんだろうけど……。

「で？ あなたは？」

永琳さんがこちらに聞く。

「八雲橙の式、緑です」

「……ふーん、八雲のねえ」

永琳さんは怪訝そうな顔でこちらを見る。

「あの、うちの主が何か粗相を……？」

「……何でもないわ、貴方知らなそうなもの」

お茶菓子を食べる永琳さん。

異変解決時のやりとりで何かあったのだろうか？

「それで、用件なんですけど……」

隣でいきなり眠り始めた暗吾氏をよそに、

俺は自分の願望を伝える。

強くなりたい、と。

「あの……いいでしょうか……？」

俺は粗相の無いよう返答を待す。そんな俺をジッと見る永琳さん。
その視線は、何かを待っているようにも見えた。

しばらく黙っている永琳さん。

「……そろそろね」

なにがそろそろなのかはわからないが、永琳さんの答えは

「条件があるわ」

まあまあ嬉しい答えだった。

「その条件とは……？」

俺は永琳さんに聞く。

バタッ

「……え？ 暗吾さん？」

しかし、答えを聞く前に暗吾さんが突然倒れた。
俺は急いで脈を測る。

「……息はあるな。寝てるだけ……ゴパア！」

安心したのもつかの間、今度は俺の身体に異変が起きる。

「な、何が……！」

「条件を説明してあげるわ」

永琳さんが口を開く。

その口調から焦りなどは全く感じられない。

どうやら俺達は、謀られたらしい。

「そのお茶の葉に耐え切れたらね」

気絶する間際、朱色の髪のお姉さんが手招きしてるのが見えた。

第十幕：身勝手な行動（後書き）

原作では橙は月に行ってません。
気になる方は原作を買ってください。

第十一幕…永遠亭

「不幸だなあ」

「そう、だね。不幸、だ、ね」

「てゐを拉致って許されるわけないもんなあ」

「不幸、だね」

身から出たサビなんて言葉は知らない。

自業自得も知らない。

悪戯兎詐欺の名で通る因幡てゐを連行し、強制的に道案内をさせた俺と暗吾（連帯責任）。

俺達は薬師、八意永琳の能力で制裁を受けていた。

「薬師だからって毒薬盛るとか……」

「君、の、は、トリ、カブト、だ、から、ね……」

暗吾さんの冷静な台詞に思わず血の気が引く。
トリカブトって……猛毒の代名詞じゃないか！

「逆になんで俺死んで無いんだ……？」

「そこは私の腕の見せ所よ」

倒れ込む二人の前で素晴らしいドヤ顔を見せる永琳さん。
うぜえ。

誰だ、この人を良識のある奴と言ったのは。

自分を棚に上げた発言だった。

俺がこんな状態でなければ間違はなくブッパしている。

「まあ、意識はあるようだし、正式に戦術を教えてあげるわ」
「これで却下されたら真空放電が炸裂するぞ……」

まあ、結果オーライという事で割り切ろう。

「あ、せめてもう一眠りさせてください……！」

胃の中がグルグルしてるから。

やば、また戻しそう……！

許可が取れたと思ったらすぐに暗吾さんは帰っていった。
実に薄情である。

そして翌日。

「TVの前のみんな〜！ えーりんのパーフェクト化学教室、始まるよ〜♪」

「何とち狂った事言ってるのよ、てる」

何だろうそのフレーズ、歌い出したくなってくる。

「はいはい、お喋りはここまでにして。緑君に電気のあるこれを教えるわよ」

「「はい」」

というわけで。

永琳さんの授業が始まった。

ここでひとつ、永琳さんの紹介をしよう。

八意永琳。（下二桁↑ここ重要） 17歳。

月の頭脳と呼ばれたほどの天才。元月の住民で輝夜姫の従者。永遠亭でのヒエラルキーはトップ。

彼女は授業内容を話した。

「まず、何が出来るか確認しましょうか。うどんげ、彼と弾幕ごっこをしてちょうだい」

「わかりました」

ウサミミブレザーが返事をする。

この人も紹介するか。

彼女の名は鈴仙・優曇華院・イナバ。皆からは鈴仙。イナバ。うどんげ。

果てには何故か座薬と呼ばれている。……本当に何故？

永遠亭でのヒエラルキーは低め。

本人曰く、言う事聞かない兎詐欺のせいで実質最下位らしい。

「鈴仙☆MA☆KE☆RO！ 鈴仙☆MA☆KE☆RO！」

隣でボンボンを持ちながらはしゃいでる兎詐欺が一匹。

この兎も一応紹介しておこう。

このロリ兎詐欺は因幡てゐる。人を騙するのが好きな兎詐欺だ。彼女の賽銭箱にお金を入れると本当に運が良くなる。

どうせ入れるなら博麗よりこっちに入れよう。

え？ 兎詐欺の文字が違うって？

幻想郷じゃこれがデフォルトなんですよ。

それにしても弾幕ごっこか……。

スペルカード二枚しかないんだよなあ……。

借物は移動用だし。

「てゐは緑に幸運が行かないようにここから出て行って」

「わかりま……せん♪」

てゐが永琳さんに逆らう。

永琳さんが薄くイライラしてるのが見て取れた。

そんなに鈴仙を負かせたいか。

因みに鈴仙の呼称だが、俺とてゐは鈴仙、永琳さんはうどんげ、輝

夜姫はイナバと呼んでいる。

ぶっちゃけ輝夜姫は兎全員をイナバと呼んでいるらしい。

……名前ぐらい覚えてやれよ。

程なくしてそんな会話も終わり、いよいよ本格的な修行に入った。

永琳さんが示した勝利条件は、鈴仙を五秒足止め出来れば勝ちというもの。

俺としては、相手に電流を流せば十秒くらい確実に
体の自由を奪う事が出来る自負が会ったので正直舐めてるのかと感じた。

「じゃあ、始めようぜ。鈴仙！」

「来なさい。ケチヨンケチヨンにしてあげる！」

それが思い上がりを知るのは、ほんの数秒後。

「狐と猫と隙間の式……いやさ、神隠しの共犯、緑！」

「狂気の月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ！」

冷たい風が吹く竹林の中、弾幕ごっこが始まった。

「雷符『天鳴万雷』！」

始まった瞬間、俺はスペルカードを宣言する。
周囲が真空放電を起こし、雷雲が立ちこめる。

「早速くたばれえ！」

そして鈴仙に向けて落雷を放つ。
実にワイルドな弾幕だ。

対して、鈴仙は

「……視えた！」

そう言って目を赤に染めた。

その瞬間、落雷の軌道が大幅に逸れる。
余波で竹が焼け焦げ、何本かは折れて倒れた。

「なっ……！　どうなってんだよ！？」

「波長を操作したのよ。あんたの攻撃は私には届かないわ！
さあ、今度はこっちの番よ！」

鈴仙がスペルカードを取り出す。
潰しは……そうだ、反則だ。

俺は大きく後退して宣言を待つ。

「狂符『ビジュアルリチューニング幻視調律』！」

宣言された瞬間、鈴仙と俺の間に魔方陣が展開される。
その魔方陣は横に移動しながら弾幕を放った。

「……はっ！　この程度なら！」

簡単に避けられる。

そかし、それは愚かな勘違いだった。

「消え、た？」

突如、全ての妖力弾が消えたのだ。

驚いて立ち止まっていると、今度は目の前に妖力弾が迫っていた。

「なっ！　……くそったれがあ！」

俺はギリギリの所で無角棒を取り出し、周辺の妖力弾を叩き消し始める。

しかしその内叩き落とせる弾幕の量が減っていき、徐々に身体に傷

が出来始める。

防戦一方。

そう言い表すしかなかった。

「いい加減に……しやがれ！」

俺は今度は自分を基点にして球状の真空放電を放ち、周囲の弾幕全てを一気に相殺する。

「はぁ……はぁ……」

ある程度の弾幕は消せたが、まだスペルブレイクはしていない。

鈴仙は俺の様子を見て、顔を綻ばせる。

「ふん、もうお終いなのか？　ならこれでトドメよ！」

その言葉と共に、また全ての妖力弾が消える。

「またか……！」

落ち着け、冷静になるんだ俺！

ヒントはあるんだ、打開策だって思いつくはずだ！

俺は再び実体化した弾幕を無角棒で叩き潰す。

「……そうだ、接近戦！」

無角棒なら、攻撃は可能だ。

弾幕ごっこで接近戦は禁止なんてルールは無かった筈。

「……電気の応用、か……」

そしてもう一つ、思いつく戦法。

可能と言えば可能だが、初めての試みだ。

下手をすれば二度と足が動かなくなるかもしれない。

しかし、不思議と恐怖は無い。

俺は迷わず、足に電気を纏わせた。

「電気による肉体強化……！」

鈴仙が弾幕を強くする。

それを見て尚、俺は立ち止まらずに走る。

無角棒で弾幕を防ぎ、紙一重で躲し、時には体当たりして真っ直ぐ進む。

「な、何て無謀なの……？」

鈴仙が驚愕と呆れの声を上げる。

その時、僅かに隙が出来る。

俺は無角棒に全力で霊力を込めた。

無骨な一本の棒は、禍々しい形の鎌となった。

「これが、俺の性質……」

希望通りの結果（細身の長剣）じゃなくてガツカリしたが、隙を作

ってしまうのは避けた。

俺は腕に電気を纏い、振り上げる力を強くする。

その時だった。

「そこまで。もう十分だわ」

永琳さんの制止の声が聞こえたのだ。

「十分緑君の底が解ったわ。これで強化プランが練れるわ。

優曇華、今日はもういいから明日にしましょう」

「わかりました、師匠」

鈴仙は構えを解く。

それに合わせて、俺も無角棒を仕舞う。

その時だった。

「すまん……ちょっと疲れ……た……」

俺の視界が急激に揺らいだのだ。

極度に疲弊していたつもりはなかったが、身体はそう思っていないらしい。

俺は地面に倒れ込んだ。

負の第三幕…予定変更

まさか緑がすぐにあいつに会うなんてねえ。

もう少し後かと思ってたけど、なかなかどうして都合良くいかないじゃないか。

これは思った以上に早く動く必要があるね。

さて、どう策を練った物か……。

能力を使えば全てが上手くいくだろうけど、それでは面白くない。

最初から最強の状態で遊ぶRPGに何の魅力があるのか。
適度な難易度があるから遊びは面白いというのに。

人生の最初からチートだった僕だからこそその価値観だ。
凡人には絶対解らないよね。

おっと、そんな事はどうでも良かったね。

それにしても策が浮かばない。

八雲紫を出し抜き、南昌暗吾を屈服させ、最後に緑を消し去る方法。

そうだな……あいつもここに呼べばいいのかな？

僕としてはあいつに会いたくないけど、僕の手足になってくれるのも事実だし。

いやはや、僕は神様に愛されてるねえ。

こんな素晴らしい能力を授けてくれたんだから。

チートにも、攻略本にも、リセットボタンにもなるこの能力。
それでは久しぶりに使うとしますか。

??? 『メメがここにくればいいのに』

第十二幕：お伽噺の姫

鈴仙と修行して一日が経過した。

その時の疲労から来た意識喪失による後遺症はまったくない。話を聞くと、あ後は部屋に運んで適当に寝かせたらしい。

診察はしてないとの事だった。

そして全回復した今日、俺は身体を動かす修行ではなく、頭を働かせる修行をしていた。

が。

「緑君、なんでこの程度の問題が出来ないの？」

ただいま難航しています。

駄目だ。記憶喪失の弊害がここにも。

ていうかここまできると記憶の欠落に人為的な悪意を錯覚する。つまり、狙ってるだろと言いたい。

「あなたの能力なら電気による肉体強化、鉄さえあれば電磁石を簡単に作れるのよ」

「簡単に言いますけどね、能力なんてこっちからしてみれば魔術であって化学とは別なんですよ？」

何でも出来るあなたとは違うんです」

天才に凡人の気持ちかわかる訳無い。

電気による肉体強化はなんとか感覚的に出来たけど、電磁誘導とか絶対理解出来ない。

「まあ、電磁石は習うより実践の方がいいから。ちょっとどこかで鉄の杭でも貰ってきて」

「貰ってきてって……」

うーん、鉄か……。香霖堂かな？

「借物『隙間の恩恵』」

俺はスキマを開く。

「少々お待ちください」

香霖堂に行ってみたものの、霖之助さんはいなかった。仕方ないので店の中を適当に漁って鉄の塊を持ってきて事を済ませておいた。

「いや、ちゃんとお金を払いなさいよ」

永琳さんの突っ込み。

言うまでもないが、ただ盗むのは気が引けたのでたまたま服の中に入ってたお金を出しておいた。

橙様に頼まれたお使いのお駄賃だったかな？

足りるかどうかは解らないけど、無いよりマシでしょう。

「で？　これをどうするんですか？」

俺は話題を変えて質問をする。

「打ち出すのよ」

「打ち出す？」

話題転換には成功したが、転換する話題をミスしたらしい。

「緑君、手をチョキに出来るかしら？」

「こうですか？」

俺は手を上げてチョキを作る。

「今度はそれに電気を纏わせて。電位差が出来るようにしてくれると嬉しいわ」

俺は言われるがままに電気を発生させる。

その様子を見た永琳さんは、俺の指の間に鉄の杭を差し込んだ。

その瞬間である。

床に細い深々とした穴が開かれた。

「電位差のある二本の電気伝導体製のレールの間に、電流を通す電気伝導体を弾体として挟み、

この弾体上の電流とレールの電流に発生する磁場の相互作用によって、弾体を加速して発射する」

それが、レールガンの原理の概要よ。

永琳さんは涼しげなドヤ顔でそう言った。

「……でもこれ、狙うのがえらく難しいじゃないですか」

「そこは個人でレッスンしてよ。私は緑君じゃないから君にあったスタイルを教えるのは不可能よ」

……そこをなんとかするのが師匠じゃないのか？

俺はなんとなく腑に落ちない物を感じた。

「電磁『レールガン』」

スペルカードを宣言する。

これは今までのと違い、ただの宣言用の紙である。

頭の中に作業が色濃く残っているから術式の必要が無いのだ。

まず鉄の杭を取り出し、人差し指と中指で挟む。後は電気を流して完成。

「……でもまだ稀に失敗するんだよなあ」

目の前には、小指に深々と刺さった鉄の杭があった。尋常じゃないほど痛いけど、悶絶するほどではない。

「あらあら、随分と楽しそうな事してるじゃない」

後ろから声が聞こえる。

振り向くと、そこには輝夜姫がいた。

「ど、どうも」

俺はぎこちない口調で応答する。

「ねえ、弾幕ごっこしましょうよ」

「え？」

そして間拔けな声で聞き返す。

「暇だから修行に手伝うだけよ？ あんたみたいな凡人が私の相手を出来るのだからありがたく思いなさい」

……むかつく。俺の一番嫌いなタイプだ。
なんかこう、高飛車な奴。

勿論修行に付き合ってくれるのは感謝だが、それを差し引いてもむかつく。

「じゃあ、本気で行かせて貰います」

だから、弾幕ごっこに乗じていたぶる事にしよう。

「きなさい、完全勝利で幕を閉じてあげる」

双方、準備良しの構え。

「神隠しの共犯、緑」

「永遠と須臾の罪人、蓬萊山輝夜」

今日もまた、弾幕ごっこが始まる。

「「いざ参るっ!!」」

「電磁『レールガン』!」

そう言った瞬間、鉄の杭が輝夜姫目掛けて飛んでいった。

「!?!」

輝夜姫が顔を歪ませる。

四肢に付いた切り傷に驚いてるようだ。

「ビギナーズラックか……まさか全弾命中なんてな!」

「馬鹿言うんじゃないわよ。全部掠ってるだけよ」

歪んだ顔を見られたくないのか、輝夜姫は俯いてそう言った。
その様子を見た俺は、喜びに満ちた顔になる。

高飛車な奴が屈服させられている光景は、実に心地良い。

「それでも掠っただけでこの威力か……」

俺は感情を漏らさないように喋る。

ブチ切れられて反撃されるのはよろしくない。

「速すぎて見えないだろうなあ……実に哀れだよ!」

それでも感情の制御が聞かず、俺は更に五本取り出して発射する。

幸い輝夜姫は、俯いたままだ。

「ええ、本当に哀れね——」

輝夜姫が顔を上げる。

「——貴方が」

その顔は、不遜な態度を表していた。

「なっ!？」

突如残りの杭の動きが止まり、輝夜姫の手で払われる。

馬鹿な。このスペルカードの弾速は、計算上天狗をも落とすというのに。

何故不老不死だけの人間の手に払われる？

「最初は早すぎて当たっちゃったけど、能力を使えば楽勝ね」

……思い出した、彼女の能力だ。

確か、名前は『永遠と須臾を操る程度の能力』。

聞くだけじゃ理解出来ないが、早い話が時間操作の能力だ。

「……くそっ」

鈴仙の波長操作といい輝夜姫の時間操作といい、永遠亭の住人の能力との相性が悪すぎる。

折角の新技がこれでは全然栄えない。

「なら、こっちはどうです!」

体に電気を纏い、身体能力を上昇させる。

レールガンが対処させられてしまったら、別のスペルカードを使うまで。

その為に、接近する必要がある。

「接近戦に持ち込むつもりでしょう? バレバレよ!」

輝夜姫がスペルカードを取り出す。

「おっと! 電符『ライトニングブレス』!」

それに反応し、俺は小さな雷球を一斉にばらまく。

「くっ……止まれ!」

輝夜姫は弾幕を停止させ、対処した。

しかし、俺としては弾幕に注意を向けさせただけで十分だった。
既・に・俺・は・最・高・速・度・に・達・し・て・い・る・。

「……消えた!?!」

竹林にぶつかっては跳び、ぶつかっては跳び。

さながら室内でスーパースポーツを全力で投げたような挙動。

「俺は消えてないぜえ! てめえが目で追えてないんじゃないかあ
!」

破壊された竹林だけが、俺の存在を認識させる手がかり。

肉体向上の、究極的な成果。

「オラオラオラオラア！」

竹林を飛び跳ねつつ、少しずつ距離を詰める俺。

時間を止めてこないには、狙いが定まっていなからだろう。

……好都合だ！

「電符『閃光斬』！」

無角棒を構え、宣言する。

閃光斬は近接スペルカード。

無角棒自体が、スペルカードの役割。

だから、紙は無い。

つまり何が言いたいかと言えば、確実に不意打ちが出来たはずと言う事。

だのに。

「後ろよ」

さっきまで目の前にいた筈の輝夜姫が、真後ろにいるなんて事は有り得ないんだ。

ここでもう一つ説明をしよう。

閃光斬はただ無角棒を振るんじゃない。電気を纏わせて放つ技だ。その際に強力な磁力が発生し、無角棒を振るう速度を向上させる事が出来る。

簡単にまとめると、構造的にはレールガンと同じだ。

そんな速さで、尚かつ不意打ちだった筈なのに。

蓬萊山輝夜は、俺の真後ろに存在している。

「お姫様舐めるんじゃないわよ」

その一言と一緒に放たれた弾幕で、

「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」

俺の敗北は確定した。

第十三幕：月の支配者

俺はその時。

確かな殺意を覚えた。

「この扇子は森を一瞬で素粒子レベルで浄化する風を起こす」

扇子を構える女性。

その顔に写る笑みは、紫様を馬鹿にしたような笑い。

「そんな月の最新兵器相手に貴方は何が出来る？」

時は冒頭から数分遡る。

輝夜姫に敗北した俺は、人里までパシリにされている。

帰る頃には夜空の明かりが竹林を照らし、月が空を支配していた。

「それにしても月が綺麗だ。外の世界じゃお目にかかれなくらい」

幻想郷は自然も美しい。

いや、外の世界の自然が無いだけか。

あるいは忘れ去られたか。

「化学は身を滅ぼす、か」

誰かがそんな事言ってたな。

今となってはその通りと頷くしかない。

しかし。夜だな。

「迷った……」

迷いの竹林で道に迷わないのは永遠亭の住人と一部の空を飛べる者のみ。

俺は高くジャンプする事は出来るが、浮遊は一切出来ない所以必然的に迷う事となった。

隙間の恩恵？ 永遠亭の座標調べ損ねてたから直接永遠亭に開かないんだよ。

「……永遠亭は何処だ？」

高くジャンプする。

ああ、ギリギリ竹林の外に出られない……。

「ん？ あれは……」

竹林の隙間から、なにやら不穏な空気が伝わってきた。

「……紫様？」

なんとなく伝わってきた気配が気になり、俺はその場所へ向かった。

そして時は冒頭に戻る。

「この扇子は森を一瞬で素粒子レベルで浄化する風を起こす」

とてつもなく不穏な台詞。

それを平然と言い放つ、一人の女性。

「そんな月の最新兵器相手に貴方は何が出来る？」

彼女の言葉に、沈黙する紫様。

慌てふためく藍様。

鈴仙に似たような兎に捕らわれた橙様。

俺はそれを、竹林の影から観察していた。

彼女らは月の住人なのだろう。

扇子の女性の台詞と隣にいるウサミミの女の子がその証拠だ。

いくら紫様でも、そんなものを向けられては絶対に勝てない。

それは俺であっても、博麗の巫女であっても。

幻想は化学に、敵わない。

「あーはっはっ！」

突然笑い出す紫様。

「もう降参降参！ 戦う気なんてないわ。最初からまともに戦った
ら勝ち目がないんだから」

その顔は、泣いている。

「紫様……」

藍様が心配そうな声で紫様に声をかける。

「囃作戦がバレた時点で私達に勝ち目はなかったのよ」

どうやら紫様は俺に隠して月に攻め込んだらしい。

誰かを囃として。

紫様が月に攻め込んだ事は確かに悪い。それに関しては責められない。
い。

でも。

俺は、紫様達が悪いとは思いたくない。

「いやに聞き分けがいいわね」

女性が怪訝そうに喋る。

扇子はまだ構えたままだ。

「敗れた側がこんなことを言うのもおかしいかも知れないが…
…」

そう言って、紫様は地面に膝を付け始めた。

「すべては愚かな一妖怪の所行。地上に住む生き物に罪はない」

……やめろ。

やめてくれ紫様。

「どうかその扇子で無に帰すのは勘弁願えないだろうか」

俺は。

胡散臭くて。

賢くて。

誰よりも優しい。

貴女が。

土下座する所なんて。

見たくないんだ。

「ここに住む生き物に罪がないはずがありません」

扇子を構えた彼女はそう言い放つ。

体に力が溜まっていく。

痛み、悲しみ、恨み。

あの女性に対する、怒り。

ふざけるな。

お前なんか、お前らなんかに。

月に住み着く穢れ無き蛮人に、何がわかる。

「地上に住む」

幻想郷の素晴らしさが。

「生きる」

一生懸命に明日を生きる人妖の輝きが。

「死ぬ」

未練と無念の入り交じったこの地の穢れが。

「それだけで罪なのです」

罪な訳、無いだろ。

「電磁『レールガン』」

「!？」

気がつけば、動いていた。

「な!？ 扇子が!」

鉄の杭は見事女性の手にあたり、持っていた扇子を手放させた。

「よつと」

すぐさま体に電気を込め、扇子を奪い取る。

奪った扇子は隙間の恩恵に放り込み、

続けざまに橙様に当たらないように兎の少女をミョルニルで吹き飛ばす。

「電符『閃光斬』」

引き離れた所でスペルカードを宣言し、渾身の力を込める。
言うべき言葉はただひとつ。

「消え去れ！」

兎の少女は受け身も出来ず、竹林をなぎ倒しながら飛んでいった。

「レイセン！」

兎の少女……レイセンと言うのか。
名前も鈴仙と似ているのか……。
まあどうでもいい。今はこいつだ。

「動くな」

俺は隙だらけだった女性に急接近して、彼女の首をわしづかみにした。

彼女は苦しそうに呻いている。

「不審な動き一つしてしろ。てめえの脳みそ焼いてやる」

すぐさま真空放電を放てる準備し、手に力を込める。
憎々しそうに俺を見る女性。

「い、いきなりなんですか。あなたには関係」

「関係ないってか？」

あるよ。

あるに決まってる。

「てめえは家族に手を出したんだ。動かない訳無いだろ。お前だつて月の為に今動いている」

そこにどんな違いがある。

——そう、違いなどない。

「それなのに俺を責めようなんてお門違いだ」

苦しみと恨みの視線の中、女性の手が不審な動きをしているように見えた。

「……その手の動きは何だ？」

答えも聞かず、俺はスペルを宣言した。

第十四幕：食い違い

「雷符『アークサンダー』」

乱暴に。

清々しいほど愚直に。

「あっ……」

スペルカードとは名ばかりで、弾幕なんて物ではなく。

「あああああああああああああああああ！！」

自分すら焦がすような金色の光を、俺は発した。

竹林に鳴り響く女性の悲鳴と、家族の青ざめる顔。

そんな事をお構いなしに、目の前の敵を殺しにかかる俺。

「あああああっ！ あ、あああああああああああ！！」

苦しそうに叫ぶ女性。

酷く、耳障りだ。

「うるさいよ」

更に力を込め、電流と電圧を高くする。

死ね。

死ね。

死んでしまえ。

「てめえは、死んで」

「やめて！ 緑！」

気がつけば。

紫様が泣きながら俺に抱きついていた。

「何を……？」

電撃を止め、首から手を離す。

白目を向き、泡を吐いた女性が地面に倒れ込む。

「もういいの」

電撃で苦しいはずの紫様は。

「もう、いいの」

そう言っただけで俺を抱きしめた。

最初は監視のつもりだった。

むしろ、幻想郷に仇なすとみなせば、いつでも殺すつもりだった。

けど、緑が私達に対して言ってくれた言葉が私の心を動かした。

「てめえは家族に手を出したんだ。動かない訳無いだろ」

私は嬉しかったのだ。

妖怪である私を、家族と言ってくれて。

私は嬉しかったのだ。

ピンチに駆けつけてくれた事が。

私の心を、満たしたのだ。

「紫様、これは貴方が……？」

豊姫の首を握り締める緑を見て、怯えた表情で藍が問う。

「……私じゃないわ、全部偶然。緑は計算に入れてないもの」

そう、本当に計算外。

「緑……」

拘束から開放された橙も、その様子を見守っている。

「紫様！ 紫様！」

藍が私を呼ぶ。

「あれ以上放ってたらあの女が死んでしまいます！
そうになったら月は本気で幻想郷を！」

「！？」

そう言われればそうだ。

あのままじゃ、緑は豊姫を殺すだろう。

「緑！ やめなさい！」

私は声を荒げて緑に訴える。

でも、緑はこちらを見向きもせずに豊姫の首を絞め続ける。

真空放電はその勢いを増し、緑は今にも豊姫を殺そうとしていた。

「……っ！」

「紫様！？」

私は無我夢中で走り出し、緑にしがみついた。

「やめて！ 緑！」

電気に耐えながら緑にしがみつく。

緑は私に気付いて、攻撃を止めた。

「何を……？」

戸惑いの表情を浮かべる緑を私は、力強く、優しく抱きしめた。

「もういいの」

壊れる程の愛情を持った緑を、

「もう、いいの」

壊さないように、抱きしめた。

俺が暴走していた間の事を、紫様は話してくれた。

本当に、どうかしてると思えない。

俺の行為は下手をすれば幻想郷が滅びる可能性もあったのだ。
家族を守りたいとか考えておきながら、俺は家族の大事な物ごと壊
してしまふところだったのだ。

自分でしておきながら笑えないし、浅はかで短絡的だ。

「申し訳ありません……」

俺は地面に膝を付け、土下座をした。

「いいのよ、結果オーライよ」

そんな俺を、紫様は許してくれた。

……紫様が怒らないなんて珍しい。

「良かったね、緑。これからは気を付けてね？」

橙様も許してくれている。

……何か裏があるな。

「まったく、許される訳がないだろう。
考えもせずに行動しては私達に迷惑をかけて……」

普通だったら藍様みたいな反応だろうに……。
……今考えても俺にはわからないか。

あ、もしかしたら家族愛的な物かもしれない。
……いや、無いか。この気持ちはあくまで俺の一方的な物だし。

「わかりました。それと、紫様。こいつらはどうすれば……」

俺は自分が殺しかけた相手、綿月豊姫とレイセンを見る。
回復の術式で体調は万全の状態まで整っているが、未だに彼女らは
目覚めていない、

「これから記憶を弄るから、放っておいて大丈夫よ。
あなたが来たところからの記憶だけなら簡単に弄れるわ」

記憶が古くなればなるほど記憶操作は難しい。境界が曖昧になっ
てしまうから。

と、これは藍様の言葉。

「藍、橙、演算の補助を。緑はもう戻りなさい」

「はあ……戻れとは？」

「永遠亭によ」

ああなるほど。

そろそろ帰らないと蓬萊ニートに怒られるな。
やばい、早く帰らないと……ん？

「……何で知ってるんですか？」

「「「えっ？」」」

「俺が、永琳さんの所にいるの」

俺が彼女たちの所に行ったのは紫様達は何処かへ言った時。
俺が修行に言ったのは、紫様達が知っているはずもない。

「……ごめん、緑。あたし達ちよくちよく緑の事覗いてた」

橙様の弁解。ああ、スキマで見えていたのか。
なんだ、心配してくれていたのか……。

「そ、そうなのよ。ごめんなさいね、緑？」

紫様もそれに頷く。

忙しかった筈なのに、見ていてくれたのか。

……嬉しいな。

「じゃあ、行ってきます」

俺は照れ臭さから逃げるように、永遠亭へと向かおうとした。

「あ、待って」

しかし、俺が高速移動をしようとする直前に、紫様は俺を呼び止めた。

「私達を守ろうとしてくれて、ありがとう」

そしていままで見た事もないような笑顔で。
紫様は、そう言った。

「でも、あんまりやり過ぎないでね」

「……肝に命じておきます」

そうして俺は、今度こそこの場を後にした。

あやややや……眩しい光に釣られてきたら、随分と酷い事になってるじゃないですか。

「これは調べる必要がありますね……」

さて、彼は永遠亭に向かった様だし、先回りしようかな？

第十五幕：不安定（前書き）

第七幕、修正しました

第十五幕…不安定

私は射命丸文。

妖怪の山に住み、趣味で新聞記者をやっている天狗だ。

今日はネタがないかと迷いの竹林に足を運んだところ、随分と面白い光景を見た。

「あやややや……これは酷いですね」

私の目の前には、腹部から血を流した化け兎がいた。
何故か、電気を帯びている。

しばらくその兎を観察していると、何処からか八雲の化け猫が現れた。

私は見つからないように空を飛んで、その様子を見守る。

化け猫は化け兎を背負い、元来た場所に戻る様に歩いて行った。

私は続けて追跡する。

たどり着いた先には、幻想郷の賢者とその式達が緑色の男と話をしていた。

その側には、先ほどの化け兎と金髪の見知らぬ女性が倒れていた。

「一体何があったのでしょうか……」

神社に霊夢がない事と関与しているような気がします。
所謂、記者の勘というものです。

しばらくすると、緑色の男はその場から離脱していった。

「緑も乱暴ですね、あそこまでしなくてもいいというのに……」

その途端、会話が聞こえてくる。

九尾が愚痴を語りかけながらスキマ妖怪に話しかけている様だ。

なるほど、あの男は緑と言うのですか。

早速メモをしますか……。

「直接取材してみますか……」

私はこの場を放れ、緑という人が歩いて行った方向を追った。

永遠亭にたどり着いた頃には、日付が変わっていた。

途中でてゐるに会ってなかったらもっと迷っていた事だろう。

俺はてゐると一緒に永遠亭の玄関を開ける。

「あら、お帰り」

玄関前には、永琳さんに見慣れない妖怪がいた。
どうやら何か聞いているようだ。

「ん……？ あ、やっと来ましたね！」

烏天狗の少女が俺に気付く。

「どうも、清く正しい射命丸文です」

「はぁ……どうも。何してるんですか？」

「私が書いている新聞の取材をしに来たんです」

射命丸さんが笑顔を作る。

「あ、貴方にも聞きたい事……取材があるんです」

「はい、何でしょう？」

俺はその時、

「えっとですね」

彼女の台詞を、

「昨日ここ周辺であつた」

最後まで聞けなかった。

「月面兎暴行事件の詳細を語っていただけませんか？」

きつと永琳さんは知ってしまったんだろう。

射命丸さんの取材から、俺が月の支配者を殺しかけた事を。

きつと射命丸さんは見ていたんだろう。

何処かから、俺が怒りの限りに力を振るっていた所を。

「はぁ……はぁ……」

俺はその場から逃げ出すしかなかった。

雷で目を眩ませ、スキマを使って逃げ出した。

永琳さんに何をされるかわからなかったから。

いや、違う。

そんなんじゃない。

自分が何をするか、わからなかったからだ。

「普通じゃ、なかったのかよ……」

俺は普通じゃ、なかったのかよ。

自分がわからない。自分の過去がわからない。

■■■■の事がわからない。

「本来の、自分……」

本来の自分を、俺は知らない。

「……行こう」

俺はスキマで蹲るのをやめ、人里に向かう事にした。

「君、は、相、変わらず、相当、世渡、り、が、下手、だね。人を、敵に、回、す、天才、だ」

人里の相談所。

南昌暗吾はルービックキューブをしながら俺を笑った。
今日は、三面ほど揃っている。

「一体、君、は、いつ、まで、敵を、作り、続け、る、の、かな？」
「……あんたは、何を知ってるんだ」

俺を、知ってるのか？

「勿論。いや、正確、に、は、君、じゃあ、ない、な。君、は、浅すぎ、る」

「浅すぎる？」

「……いや、こっち、の、話、さ」

暗吾さんは四面揃えあげて満足したのか、こちらを向き直す。

「ねえ、緑君」

「なんですか」

「ちよつと、ここ、で、働い、て、みな、い？」

……働く？

「働いてみない……って、何ですか？」

俺の問いかけに、暗吾氏はこう答えた。

「君は、人を。他人を、理解、して、いない」

さっきまでとは打って変わって、真面目な口調で語る暗吾さん。

「職業柄、私、は、友好、関係、が、広い。変、人、が、多い、けど、ね」

「……それと俺が働く事に何の関係が」

「関係、ある、よ。何故、なら」

暗吾氏は俺の台詞を最後まで聞かず、睨むような視線で答えた。

「君に、友達、は、いない」

友達がいない。

暗吾さんはそれを本気で思っているのだろう。

実際、腹が立つ。

「友達……そのくらい」

「いると、言え、る、の？」

俺の反論を暗吾さんは全く聞かない。自分の言いたい事だけを喋り続ける。

言うべき事だけを、喋り続ける。

「八雲家、の、方、々、は、恩人、で、あり、家族、だ。これ、は、君、と、彼女達、との、共通、認識、だ、よ、よかった、ね。

でも、友達、では、ない。君は、彼女ら、に、とって、守るべき、対象、で、あって、守り合う、友達、では、ないん、だよ。

霖之助、さん、や、私？ 商売、相手、で、あって、友達、とは、思っ、て、いな、い、よ。

彼は、気さく、で、ドライ、な、だけ、だ。勿論、私、も、ね。
永琳、さん、達、は……その、様子、じゃ、言わなく、ても、わ
か、る、よね。

阿求さん、だって、図々しい、恩人、と、しか、思っ、て、ない、
だ、ろう。

それ、とも、君、は、彼女、に、お礼、は、いいですよ、何、て、
言、っ、た、かい？」

暗吾さんの台詞が、深々と胸に突き刺さる。

紫様や橙様は守るべき対象であって守り合う友達ではない。

暗吾氏やこーりんだってこれからの商売をより良くする為のもの。

永遠亭の人たちだって、月に仇なした俺と仲良くするはずがない。

阿求さんを助けたけど、お礼はいいなんて言っ、て、ない。

貰わないと相手に無礼だなんて言、い、訳、だ。俺は貰、っ、て、正、当、だ、と、思、っ、
て、い、た、ん、だ。

全部が全部。一から十まで。

完璧に、読、ま、れ、て、い、る。

「最後、に、もう、一つ」

暗吾さんは俺にトドメを刺した。

「君は、タメ口、で、話、せ、ば、す、ぐ、に、仲、良、く、な、る、な、ん、て、
滑、稽、な、勘、違、い、を、し、て、る、ん、じ、ゃ、な、い、か？」

「……………」

俺は反論しようとしたが、何も言えなかった。

……これが相談屋。人を知る程度の能力。

「……理解、した、よう、だ、ね」

戦意も何もかも喪失した俺に対し、
暗吾氏は最後までマイペースに話を続ける。
この人は、似てる。

「で、結論、を、聞かせ、て、貰って、ない、け、ど」

胡散臭さが、紫様に。

厳しさが、藍様に。

優しさが、橙様に。

纏う空気が、俺に。

「働く、の、かい？」

俺は、二つ返事で答えるしか出来なかった。

第十六幕…相談者

俺は自分の欠点を直すため、暗吾さんの仕事を手伝う事になった。

相談所なんて普通なら客の話を聞くだけの簡単な仕事なのだが、幻想郷の相談者は一癖も百癖もありすぎる。

例えば今日の相談者はだな……。

「バカな妖精の場合」

「どうしたら最強になりますか？」

「霖之助、さん、の、所に、行って、合体剣、貰って、来な、さい」

「結論早っ！」

「ありがとうございます暗吾！」

「蟲使いの男の娘の場合」

「どうして皆僕を男扱いするんですか？」

「胸、は、諦め、て、髪を、伸ば、し、なさ、い」

「だから結論早いつて！」

「ありがとうございます……」

「寺子屋の教師の場合」

「どうしたら妹紅と愛し合う事が出来るだろう？」

「おい守護者」

「……少し、ずつ、洗脳、する、と、いいね」

「結論がおかしーし。そして何故泣いてる？」

「あと媚薬は蓬莱人に効くか？」

「永遠、亭、の、薬師の、所、に、行って、お願い、しな、さい。
蓬莱人、への、対応、は、彼女が、一番、良く、知って、いる」

「わかった」

「わかつちゃ駄目だろ！？」

「いつも子供達がすまないな。では、行ってくるよ」

〳図書館の司書の場合〵

「名前ください」

「小、悪魔、だか、ら、こあ」

「適当なくせに可愛い！？」

「あ、ありがとうございます！」

〳姉妹の神様の場合〵

「「秋以外でも活躍したいです」」

「博麗、か、守矢、に、分社を、建て、ると、いい、よ」

「まともだな……裏がありそうだ」

「ありがとうございます」

「早速頼んでみますね！」

「あの、巫女、達を、力で、ねじ、伏せる、んだ」

「「……………」」

「酷な事を…………」

く辻斬りが趣味の庭師の場合く

「お爺様を超えられません」

「毎日の、訓練、し、か、ない、よ」

「見捨てやがった……」

く苦労人の閻魔の場合く

「部下が仕事してくれません」

「待て、なんで閻魔がこんな所にいる」

「いけませんか？」

「プライド無しかよ……」

「部下、の、サボ、りを、直す、なら、監視、用、に、誰か、を、雇う、といい、よ」

く大食いの亡霊の場合く

「庭の桜を満開にさせたいわ」

「我慢、して、くだ、さ、い」

「相談ですらない!？」

「いけずう」

く館の主人の場合く

「カリスマをアップさせたいのだが……どうすればいい?」

「昔、の、口調、と、か、どう、です、か？」

「カリスマか……？」

「真、に、カリスマ、を、持って、いる、な、ら、この、くらい、は、こなす、で、しょう」

「ふむ……そうだな。恩に着るぞ！ 人間！」

「……誤魔化されてないか？」

〵とある三女の場合〵

「目立ちたい」

「巫女、コス、すれ、ば？」

「お前本当はやる気無いだろ！」

……とまあこんな感じだ。

「今日、は、これ、で、店、じまい、か、な。お疲れ、様」

「カオスだった……」

人気ありすぎだろ。

何であんな適当な結論でこんなに人がくるんだ。
ていうか守護者と閻魔自重しろ。特に後者。

「緑、君」

暗吾さんは椅子から立ち上がり、こう言った。

「大事、なの、は、アドバイス、する、事じゃ、ない、よ。一緒に、悩む、事、なの、さ」

そう言って彼は、寝室に向かって行った。

「……………」

その台詞はかっこいいけど、
今日の様子を見る限り悩んでる風には見えなかったぞ。

「……まあ、いつもの事か」

俺は相談室を軽く掃除して、ソファーに横になったぞ。

第十七幕…風祝

相談所の朝は遅い。

正確には、暗吾さんの朝は遅い。

「いいかげん起きてくださいよ。もう十時だぞ」

「……後、五日」

「そこは嘘でも五分と言え」

五日も寝れるか。

俺は暗吾さんの布団を引っぺがそうとする。

「……ああ!？」

しかし、出来なかった。予想外に重過ぎる。

これ布団か!？

……よく見たら四隅に釘が何本も打たれていた。

1、2、3……20本。

「ああもう！これ以上お客を待たせるな！」

「先、に、言っ、て、よ」

お客という単語が聞こえた時点で、暗吾さんは跳ね起きた。
事実、布団が裂けている。

「いや、釘抜けよ」

「非力な、私、に、なに、を、望んで、るん、だ、君は」

「それは布団を裂いた奴の台詞じゃ無い」

それなりに力あるだろ、暗吾さん。
意外と相当な霊力あるし。

「だいたい何で布団に釘刺してんだよ」

「私は、寝相、が、悪い、の、さ」

「だからって釘は」

「朝、目、が、覚めた、ら、玄関、に、全裸、で、逆立ち、して
いた、事、が、ある、ん、だ」

「玄関って家の中だよな!？」 家の中なんだよな!？」

至極どうでもいい会話だった。

おっといけない、お客さん待たせてるんだった。

「ほら、お客さんだぞ」

「誰、だ、い？」

ええと、確か……。

「守矢の風祝だって言ってたぞ」

「失礼、です、が、貴女、の、お名前、を、教えて、いただけ、ま
せん、か？」

「は、はい……」

暗吾氏の問いかけに、緑の女性は頷く。

彼女は東風谷早苗。

一番新しい異変、ええと何だっけ。

なんとか異変の関係者。

確か妖怪の山に外の世界の神社が引っ越してきたという異変だ。

……異変っていいのか？

容姿は幻想郷名物の腋巫女服。

髪は俺より明るい緑色。その髪に蛙と蛇の髪飾りをしている。

そして育ちの良い身体つき。

しかし、八雲家の面々には到底敵わないがな！

「緑君、君、失礼な、事、考えて、ない？」

「滅相も無い」

大嘘ついて誤魔化す。

嘘をつく時は堂々とするのがポイントだ。

「で、悩み、とは？」

暗吾さんが説明を促す。

「ええと、実は……」

風祝説明中……

「神様、の、内、一人、が、元気、無い、と。

そう、いう、事、だ、ね？」

早苗さんの悩みを、暗吾さんは要約する。

守矢神社の神様の内一人、八坂神奈子が元気が無いそうだ。
一日だけならまだしも、ここ一週間も鬱オーラを放たれてはこっち
の精神衛生上よろしくない。

そこで、人里で腕のいい相談相手の暗吾さんの助けを借りに来たの
だ。

その話を聞いた暗吾さんの結論は

「本人、に、会い、に、行こ、う」

「「は？」」

大胆不敵なものだった。

「正気か？」

「会って、も、いない、の、に、助言、が、出来る、わ、け、ない」

それはそうだが……。

「相手は神様だぞ？」

「だか、ら？」

駄目だ。

もう暗吾さんの中では守矢神社に行く事が確定している。

「早苗、さん、を、見る、限り、悪い、神、様、じゃ、なさそう、
だ」

「……わかったよ、あんたの能力信じるよ」

結局、こちらが折れてしまった。

遠くまで歩きたくない……。

「早苗さん」

「何ですか？」

「今日いきなりは無礼だし、明日にしてくれないか？ こっちも準備があるからさ」

主に暗吾さんの髪型とか服装とか。こんな格好は無礼だろうし。そうだ、俺も学ランの準備をしないと。

「わかりました。では、明日の昼頃」
「了解」

失礼しました、と。

早苗さんは帰っていった。

「……緑君」

「何ですか」

「君、全然、理解、してない、ね」

……何が言いたい。
そう言いかけた。

「今、みたい、な、口調、が、災い、の、元、なの、さ。流し雛、の、格好、の、餌食、だ、よ」

そう言って暗吾さんは俺をしっかりと睨んだ。

……結局、俺はまだ理解してないらしい。
何を理解出来てないかすら。

その日の夜は眠れなかった。
暗吾さんの言葉が、ずっと頭に残っている。

「何が悪いんだ……」

口調か。

態度か。

本質か。

「どうすればいいんだよ……」

問いかけても、教えてくれる人はいなかった。

「橙様……藍様……紫様……」

俺は珍しく、涙を流した。

「こんにちは、緑さん」

「あ、早苗さん……」

昼頃、早苗さんが俺たちを迎えに来た。

天気は曇り。

気のせいかな雨も降っている。

「ごめんなさい」

「え？」

俺の唐突な謝罪に、早苗さんは面食らった表情をする。

「昨日はさすがに馴れ馴れしすぎた、反省しています」

「あつ、いえ、そんな事……」

俺には心の底から謝る事しか出来ない。

それしか、知らない。

「本当に、ごめんなさい」

「……なら、ちゃんと神奈子様を元気にしてくださいね。それで許してあげます」

早苗さんは笑ってそう言った。

優しい人だ。

「ところで、暗吾さんは？」

「ああ、その……まだ準備が……」

「出来、て、る、よ」

遅かったか……。

あの原色継ぎ接ぎの袴じゃ神様に会うのに無礼だと言ったのに……。

「緑、君、相手、が、神様、だから、って、こちら、が、着飾って、も、意味、が、無い。

本心、を、ぶつけ、合わな、きゃ、意味が、無いんだ、よ」

「俺にはわからないな」

「そこ、だよ」

暗吾さんがここぞとばかりに俺を指差す。

「君、の、本心、が、わから、ない、ん、だ、よ」

「……は？」

脈絡もなくなんだよ。

「あ、それわかります。なんていうんでしょう……。
本当だと思って嘘をついているような……」

早苗さんまで……。

なんだそりゃ？

いつだって俺は思った通りの事をそのまま口に出してるつもりだが
……。

「それ、も、それ、で、良く、ない、けど、ね」

「ホイホイ考えを読むな」

実質さとり妖怪じゃないか、暗吾さん。

「私、や、さとり、妖怪、相手、な、ら、いい、けど、普通、の、
人、から、すれ、ば、どう、思う、だろう、ね。

本心、が、読め、ない、いや、本心が、感じ、られ、ない、と、
いう、の、は、さ」

はっきり言って、気持ち悪いよ。

暗吾さんはそう続けて、この話を打ち切った。

「じゃ、守矢、神社、に、行こう、か」

「遠い……寒い……」

現在、俺と暗吾氏と早苗さんは歩きで守矢神社に向かっていた。
天気はパラパラと降っていた雨から、土砂降りへと変貌している。

「緑さん、もう少しですから頑張ってください」

早苗さんはそう言って正面を指差した。

「……守矢神社って、妖怪の山の何処にあるんですか？」

「はい、山頂に守矢神社があります」

「……………」

どうして幻想郷の神社はどれもこれも参拝客に優しくない立地条件
をしてるんだ。

かたや幻想郷の一番端っこ。かたや河童と天狗の縄張り。
信仰消えるぞ。

「この雨の中山登りか……」

「我慢してください。元はといえば空を飛べない人のせいなんです
から」

早苗さん結構毒舌だな！

手厳しいお言葉に、俺の心の天気も雨になった。

「ん？」

不意に空を見上げると、見覚えのある奴がこちらに向かっているのがわかった。

可愛らしい顔、慇懃無礼な態度、立派な黒い翼。
忌々しい、烏天狗。

「あやややや？ 緑さんではないですか。奇遇ですね」
「暗吾さん、早苗さん、先に行ってください。こいつボコつてくるから」

俺は二人の返答も聞かずに射命丸の首根っこを掴み、山の中腹まで高速で駆けた。

「なっ！？ 誘拐ですか！？」

「黙ってるパパラッチ！ お前のせいで俺がどれだけ辛い目にあつた事か！

恨み晴らさでおくべきかあ！」

ある程度進んだ所で、俺は射命丸を放り投げた。
射命丸は空中で受け身をし、こちらを見る。

「な、何するんですか！」

「自分の心に聞いてみる！」

俺は無角棒を取り出し、天に掲げる。
するとしだいに雷が集まっていき、一つの刃を形作った。

「貴様のせいでー！」

そして俺はその刃を、射命丸に向かって投げつけた。

「お、落ち着いてください！ 話せばわかりますから！」
「問答無用！」

更に俺は先ほどと同じ物を生成して投げつける。

二つの雷の刃が、射命丸を追いかける。

「くっ……意外と速い……ってキャア！」

全力で避ける射命丸に対して、牽制に全力全壊な落雷を放つ。
しかし、雷の刃も落雷も全く当たらない。

「危ないじゃないですか！」

「危なくしてるんだよ！」

俺は落雷の勢いを激しくする。
それでも、一発も当たらない。

「おのれちょこまかと……！ ならば！」

俺は鉄の杭を持てる限りに持つ。

「電磁『レールガン』！」

そしてそれをマシンガンの様に撃つ。

最初こそ避けられたが、七発目以降からは当たり始めた。

「痛い痛い痛い！ 貴方は鬼ですか！？」

「鉄の杭が刺さって痛いので済んでるお前の方が鬼だよ！」

電符『ライトニングブレス』！」

更にスペルカードを宣言する。

休む暇はさっきから与えていない。ダメージは着実に蓄積しているはず。

「本当に落ち着いてください！ 何で私を攻撃するんですか！」

何故という射命丸の制止の声に、身体が止まる。
すると、頭が冷えていくのが感じられた。

「……理由、か」

落ち着いて考えてみる。

「そうです、落ち着いて考えてみてください。」

私、貴方に攻撃した覚えなんて有りませんよ？」

諭されるような台詞に、頭の中が更に落ち着いていく。

「うん、そうだな……」

深呼吸をする。

「雷符『天鳴万雷』！」

「何で！？」

スペルカードを宣言する。

超特大の雷が、射命丸に落ちた。

射命丸は、目を回して動かなくなっている。
俺はその様子を見て、呟いた。

「元はと言えばあの事をあんたに見られたからだっただよ」

そして俺は、山頂に駆け足で向かった。

第十八幕：ドッペルゲンガー（前書き）

三人称実験。

ところである作品とコラボしてもらったんですけど、
改定前の時系列なのでネタバレが酷いです。

時期が来たら紹介します。

第十八幕…ドッペルゲンガー

「ねえ〜ねえ〜神奈子〜いいかげん元気になってよ〜」

目玉のある帽子を被った幼女が、項垂れた長身の女性の身体を揺さぶる。

「諏訪子……頼むから放っておいてくれ……」

対して彼女は、無気力にそう言った。

「文明が恋しいくらいならここに来なければ良かったのに……」

彼女達は守矢神社にいる二柱の神々。

八坂神奈子。洩矢諏訪子。

外の世界の文明を知ってる彼女達にとって、文化レベルが低い幻想郷はいささか不便な場所だった。

自分の存在も大事だが、楽な暮らしというのも存外大切な物だ。

「ほら、雷が鳴るほど天気悪くなってるじゃんか〜、止めてよ〜」

「わかったよ……あれ、雷だけ止まらないぞ？」

彼女は外の天気を能力によって良くした。

が、晴れになっても雷だけが鳴り止まない。

「……しかもあの雷、なんか一箇所集中してない？」

その事実、その雷が人為的な物だと理解するのに十分な根拠だった。

東風谷早苗と南昌暗吾は、緑と別れた後に守矢神社へと続く道を歩いていた。

神社は既に目と鼻の先である。

「派手、に、やって、る、ねえ。おや、雨、が、止んだ」

暗吾は遠くで聞こえる落雷に耳を傾け、繰り広げられている惨劇を想像する。

「どうかしましたか？」

早苗はそんな暗吾の台詞が聞き取れず、質問をした。

「いや、なん、でも」

しかし、心ここにあらずといった表情で返答される。

そんなやりとりをしている内に、彼らは神社の敷地までたどり着いた。

「あ、着きました……たよ……」

早苗は絶句した。

彼らが真っ先に聞いたのは、暴走した八坂神奈子の声だったのだ。よくよく耳をすませば、洩矢諏訪子の制止の声も聞こえてくる。

「落ち着いてよ神奈子！」

「これが落ち着いていられるか諏訪子！　今すぐあそこへ行くぞ！」

内容を察するに、彼女はどうかやら雷の鳴る方角へ向かおうとしているらしい。

「……早苗、さん、彼女、達、は……」

暗吾が早苗に問いかける。

その声は、少し呆れてるように感じられた。

「……うちの神様です……」

早苗は俯きながらそう答えた。

その頬は真っ赤に染まっている。

「な、なんだあの特大な雷は！？　諏訪子、調査に行くから放せ！」

遠くで緑が射命丸文に対して最後の攻撃をしている。

その光景は、こちらからもしっかりと把握出来た。

「……彼、は、何、して、るん、だ、ろう、ね」

暗吾は大きく溜息をつく。

早苗といい暗吾といい、今日は溜息の多く出る日のようだ。

「ただいま戻りましたあゝ？」

不意に後ろから彼らにとって聞き覚えのある声が聞こえる。

「おや、噂、を、すれ、ば、何と、やら」

どうやら緑が戻ってきたようだ。

「やあ、遅、かった、ね。緑」

暗吾が緑に話しかける。

「ハア？ お前頭悪過ぎだろ？ こんなに早く着いたつてのによお」

それに対し、緑はとんでもなく苛つく態度で返した。

暗吾はその口調に、強烈な違和感を覚える。

「……君、は、誰、だい？」

「……え？」

暗吾が緑の偽物に問いかける。

状況の読めていない早苗は、惚けた声で返した。

「わあー流石暗吾さん一発で気付きましたかー凄いなーさすがだなー」

偽物は神経を逆撫でる口調で、あっさりと認めた。

その態度からは、相手を見下しているのがはっきりと理解出来る。

「誤魔、化す、な、よ？ 君、は、誰だ、と、聞いて、い、る」

「誰だと聞かれたらこう答えるしかないね、『変身』」
メタモルフォーゼ

偽者は緑の姿から一変し、暗吾の姿へと変わった。

「ドッペルゲンガー!？」

「ポンピーン! そこの緑色大正解!」

暗吾の声ではしゃぐ偽者。

二人はその光景に、違和感を覚える。

「メメはドッペルゲンガーのメメ。夢道湊に作られた、由緒正しい妖怪だよ」

「……っ!」

夢道湊という名前に、暗吾が反応する。

「早速だけど、暗吾さん? 邪魔なんで消えてちょーだい?」

メメはそう言ったかと思うと、腕を刃に変えて急接近してきた。

暗吾はメメの狙いを『知った』が、動きが鈍いために回避が遅れる。

「暗吾さん! こっちへ!」

「……すま、ない!」

「お礼は後に!」

早苗は暗吾の手を引き、メメの魔の手から離脱させる。

そしてそのまま、スペルカードを宣言した。

「奇跡『ミラクルフルーツ』!」

早苗が宣言すると、彼女の周囲に花火のような弾幕が放たれた。

その規則正しく美しい弾幕に、暗吾は命の危険も忘れて見蕩れてしまふ。

「無駄だよ？　馬鹿なの？」

メメはそう言って、弾幕に怯む事なく距離を詰める。
近付くにつれ弾幕の濃さは増していき、とうとうメメは被弾した。

土埃が暗吾と早苗の視界を覆う。

「やられたと思った？　残念、メメでした！」

土埃が晴れる前に、メメが突進をしてきた。
体には、無数の刃が生成されている。

「なっ、何で!？」

早苗は驚愕した。

傍目から見れば確かに貫通したし、何よりメメは回避運動をしていない。

でも、メメにはかすり傷一つ付いていない。

「ケラケラケラケラ！　無駄無駄無駄ア！」

無情にも、距離はドンドン詰められていく。

「早苗、さん！　奴、は、『身体を自在に変化させる程度の能力』
を、持って、い、ます！」

小、さい、弾、を、いくら、放とう、と、奴、は、全て、素通り、
させ、て、し、まう！」

突然、暗吾が叫ぶ。

どうやら今まで能力を使用して先程のトリックを解明していたようだ。

「対処法は？ どうすれば！」

早苗も大声で質問する。

「一、対、一、じゃ、勝ち、目、は、無い！ 二柱、の、助力、が、不可欠、です！」

暗吾の神のチカラを借りるという発言に対し、真っ先に動いたのは意外な事にメメだった。

「あららあ？ そんな事されたら勝ち目が無いですねえ？」

立ち止まり、やる気のなさそうな顔で言う。

「仕方ない、撤退しますか。」

次はそのルイージも殺してあげるからね」

メメはそう言ったかと思うと、水と化して地面の中に消えていった。

神社を沈黙が支配する。

「……暗吾さん、怪我は？」

沈黙を最初に破ったのは早苗だった。

「いえ、特に……」

「そうですか、良かったです」

極力何事もなかった様に振る舞う早苗。
その額には、血管が浮き出ている。

「また何かくるかもしれません。神社に入りましょう」

早苗はそう言って、神社へと駆けていった。

暗吾は放心したように立ち止まっている。

「……近々、大き、な、異変、が、起こる、かも、しれ、ま、せん、
ね」

歩き出した暗吾の呟きは、誰にも聞かれる事はなかった。

第十八幕…ドッペルゲンガー（後書き）

展開が早いけど、後悔しない！

第十九幕：橙の心

俺が守矢神社に着いた時には、何故か宴会が始まっていた。
宴会とはいっても大人数がいるわけではなく、守矢家三人と暗吾が
仲良くお酒を飲んでいただけだが。

「……暗吾さん？ 何があったんだ？」

「私、の、ストレス、発散、に、付き、合って、もら、って、る」
「何でだよ！？」

お前神様慰めに来たんじゃないのかよ！
何逆に慰めてもらってんだよ！

「殺され、かけ、た、と、言った、ら？」

「……は？ ここで？」

ここって博麗神社みたいに何か出てくるのか？

「暗吾さん、ドッペルゲンガーに殺されかけたんですよ」

「ドッペル……ゲンガー？」

……何故だろう。

凄く懐かしい単語だ。

「……まあ。そろ、そろ、宴会、も、その、意味、を、変え、る」

「そうですね。緑さんが来ましたし……あ、丁度いい所に」

早苗さんの視線を追うと、参拝道に水色の服の女の子が歩いている
のが確認出来た。

あのリュックサックは……河童か？

「お〜い、持ってきたよ〜！」

河童が笑顔でこちらに手を振る。

「遅、かった、ね。例、の、物は？」

彼女を呼んだのは暗吾さんらしく、口元だけの笑みを浮かべて話す。

「バックに入ってる。組み立てるだけだよ」

「わ、かった。そこ、の、人間、が、電気、を、大量、に、入れる、けど、どれ、くらい、の、許容、量、が、入る、ん、だい？」

「計算上、原子力発電三つの発電量に耐えられるよ」

河童の発言に、暗吾さんは驚く。

「……意外と、私、が、地霊殿、の、発端、だった、り、する？」
「「は？」」

河童と俺の台詞が被る。

何だよ、地霊殿って。

「いや、こっち、の、話。そんな、事、よ、り、早く、組み、立て、て、くれ、ない、か？」

「わかった」

暗吾さんに促されて、河童は機械を組み立てる。

「は、早いな……」

「幻想郷、では、河童、の、技術、力、が、抜きん、出て、る、から、ね。」

光学、迷彩、も、彼女、河城、にとり、が、作った、の、さ」

そう言えば橙様から聞いた事がある。

たまに外の世界以上に便利な発明をするから、人間が強くならないように極力人里に河童の発明品を入れない様にしているとかなんとか。

「さあ、完成、し、た、よ。早、く、電気、を、入れ、た、まえ」
「あ、ああ」

俺は完成した機器に触れ、電気を送る。

「そのメーターを基準にしてくれよ、盟友」
「了解」

ちやくちやくと電気が機器に溜められていく。
メーターの針はもう少しで振り切れそうだ。

「そろ、そろ、だ、ね。早速、何、か、の、電化、製品、に、繋い、で、みよ、う、よ」

「あ、じゃあこのテレビに……」

早苗さんが居間にあったTVを指さした。

河童の河城さんは、それをケーブルに繋ぐ。

なんとなく、緊張した空気が流れる。

「こ、これは……!」

「念願の……！」

洩矢神と早苗さんの声。

ザーッ……。

「電気キタ——（?▽?）——！！」

画面に映った砂嵐を見た瞬間、八坂神が両腕を上げて咆哮した。

「さあ今日はお祝いだ！ どんどん酒を飲め！」

「わかりました、神奈子様！」

「酒の肴は私の裸踊りだぁー！」

「それは勘弁してください！」

先ほどまでの沈黙は何処へやら。

一気に騒がしく暴れる八坂神。

「緑君、今回、は、君、の、おかげ、で、八坂、神奈子、は、
元気、に、なった、ん、だ。これ、は、大、快挙、だ、よ？」

「本当かよ？ 俺は河童が組み立てた装置に電気を入れただけだぜ
？」

俺は脱衣を始めた八坂神をジト目で見る。

洩矢神と早苗さんが必死で彼女の脱衣を妨害していた。

「それ、だけ、だけど、それ、以上、だよ」

暗吾さんはそうって、一升瓶を丸呑みした。

「さあ、飲み、た、まえ」

暗吾さんが俺に酌を入れる。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

それからの記憶はまったく無い。

目が覚めたら、マヨヒガに搬送されていた。

隣には、橙様がいる。

「あ、起きた？」

橙様が話しかける。

「ええ、たった今……」

俺は鳴り響くような頭痛を堪え、起き上がる。

「辛いならまだ寝てた方がいいよ？」

「いえ、大丈夫……ウエップ」

少し吐き戻しそうになる。

「ほら、やっぱり駄目じゃん」

「……すみません」

「謝るのは後でいいから、とにかく寝なさい」

橙様の手を借り、俺はもう一度横たわった。

「お水持って来るね」

そう言って、彼女は離れていった。

「……あれから幾ら経ったんだろう」

時計を見る。

最後に見た時から五時間は確実に進んでいた。

「……一日寝込んでる可能性もあるな」

そうになると、暗吾さんに迷惑かけてるな……。

一刻も早く体調を治さないと。

「持って来たよ」

橙様が水を持って戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

水を受け取り、一息に飲む。

すると、体が癒されていくような感覚が訪れた。
体を動かすのに気だるさが無い。

「……おいしい水ですね」

「どういたしまして」

橙様が微笑む。

「そういえば、紫様と藍様は？」

「結界の修復作業してる。まだ私達には難しいところ」

なるほど。

「まったく、紫様も藍様も心配してたよ？ いきなり運ばれて来るんだもん」

「……いつですか？」

「ざっと七時間前……だと思う」

となると、そろそろ日を跨ぐな。

暗吾さんへのお礼は明日にするか。

「今日はもう寝ます。もう看護は大丈夫です」

「そう？ 緑がそう言うなら私は自分の事するけど……」

「どうぞどうぞ。俺なんかに構わずに、やるべき事とかやりたい事をしてください」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

橙様が立ち上がり、部屋を出ようとする。

「じゃ、お休み」

「お休みなさい」

橙様が襖に手をかける。

「……ねえ、緑」

後一步で部屋から出ようという所で、橙様が俺に質問をしてきたのだ。

「もしも……もしもだよ？ 緑が誰かの偽者だったり、今まで信じていた事が全て嘘だったら……緑は、どう思う？」

唐突で不思議な質問。

「私達が嘘を付いてたら、緑はどう思う？」
「……………」

と思う、か。

橙様がいきなり言い出した理由はわからない。

何かの本で読んで不安になったのかもしれないし、本当にそうなのかもしれない。

真相は、解らない。

「……もし本当にそうだとしても、俺は橙様を、八雲家の人に失望したりしません」

でも、俺は喋り出す。

「あの日、橙様と藍様が助けてくれたから、今の俺がいる」

橙様は驚いたような顔でこちらを向いた。

俺はそれを無視して、喋り続ける。

「貴女方に忠誠を誓う理由には、十分過ぎます」

とても恥ずかしいが、俺の偽らざる本音。

八雲家の方々は命の恩人。

だから、俺は精一杯恩返しをしたいと思う。

「……ありがと。ちょっと嬉しいよ」

橙様は微笑み、今度こそ部屋から出ようとする。

「お休み、緑」

そう言い残して、彼女は襖を閉めた。

負の第四幕…奇麗事

まったく、何で緑はあんな台詞が言えるんだろうね？
寒々しすぎて風邪を引いちゃうよ。

『八雲家の人に失望したりしません？』

嘘吐きの妖怪達相手に本当によく言えたものだよ。

そんな奇麗事で上手くいく話じゃないのにさ。

それに今まで見てきて思ったけど、何なんだろうね？
自分さえ良ければそれで良いを体現したような振る舞い。

吐き気がするよ。

空っぽの器の分際で、随分と偉そうに。

それが許されるのは僕だけなのに。

結局心だとか精神とかなんて、人間だろうが妖怪だろうが、
嘘と裏切りを重ねる下らなくて醜いものなのになさ。
そんな薄っぺらい言葉を信用するだけ無駄なのになさ。

でもまあ、そんな薄っぺらいものでも壊しがいがあるのは事実だし？
そこだけは緑に感謝しておきますか。

さあ、舞台はそろった。後はタイミングを計るだけ。

楽しみにしてますよ。

第二十幕：災厄の覚醒（前書き）

やっとオリキャラ揃ったー！

第二十幕：災厄の覚醒

翌日。

俺は相談所に行った。

「やっと、戻って、来、た、か」

暗吾さんがお馴染みのルービックキューブを片手に語りかけてくる。

「君、有り、得ない、程、酒、に、弱い、ん、だね」

「……俺、お猪口一杯で沈んだのか？」

「そう、だよ？」

何でもない様に言う暗吾さん。

……俺、そんなにアルコールに弱いのか？

「肝臓、が、悪い、わけ、じゃ、ない、ん、だけ、ど、ね。何処、が、悪い、ん、だ、か」

暗吾さんがルービックキューブを完成させ、机の上に置いた。

「あ、そう、そう、緑君。八坂、神奈子、が、呼んで、た、よ？」

思い出したように言う暗吾さん。

実際、今思い出したのだろうか。

「急ぎ、の、用事、らし、い、から、早く、行った、ら？」

「わかりました、そうさせていただきます」

俺はスペルカードを取り出す。

そして宣言し、俺は歪なスキマを開いた。

「……緑、君、一つ、質問、を、して、いい、かな？」

スキマに入ろうとした時、暗吾さんが突然尋ねてきた。

「君、は、自分、を、理解、して、い、る、かい？」

「……どういう意味ですか？」

「君、を、構成、する、気持ち、を、理解、して、い、る、の、かと、聞いて、い、る、んだ、よ」

暗吾さんが続ける。

「自分、が、卑怯で、卑屈で、最低だ、と、いう、事、を、理解、してる、の、かい？」

「……それは、紫様達の為を思って」

「他人、に、理由、を、求める、な、よ、腑抜け」

俺の否定の言葉を、暗吾さんは聞かずに切り捨てた。

「それ、を、理解、し、乗り、越えて、みて、よ。きっと、今、より、強く、な、る」

「……ご忠告どうも」

俺は暗吾さんの言葉を聞き流し、守矢神社に向かった。

「遅かったじゃないの」

俺が守矢神社に着いて最初に迎えたのは八坂神だった。

「お待たせしました」

「いいや、そんなに待ってないさ。早速で悪いけど、本題に入るよ？」

八坂神は唇を上げ、俺に用件を言った。

「ちょっと産業革命起こしてみないかい？」

「……何だと？」

八坂神の提案に耳を疑う。

「私はね、技術革新とかが好きなんだよ」

「それと俺に何の関係があるんだよ」

少々電気を発生させ、威嚇する。

神様はまったく怯まない。

「あんたは無限の電源だ。後は電気を溜めておける物を私達が作れば、幻想郷全体が住みやすくなる」

今の守矢神社のようにね、と。

八坂神は得意げに言った。

……馬鹿か、この神様は。

「そうして人間は化学と情報を信じて、妖怪や神を畏れなくなったんじゃないか？」

永琳さんの文明は、太古の昔それで戦争になった。
人間と妖怪の殺し合いに発展した。

「そこまでいく前に止めるさ」

「協力する気はないね」

「神を信じられないのかい？」

「可能性がある時点でアウトなんだよ」

お互い構える。

「なら力でねじ伏せて信仰させるしか無いね」

人間でも。

「他の信者が減るぞ」

妖怪でも。

「信者は増えるさ、私が勝つからな！」

神様でも。

幻想郷で己を通したければ、遊んで戦うしか無い。

「食らえ！」

電気エネルギーの塊を八坂神にぶつける。

爆風があがっても、八坂神の身体にはかすり傷一つ無い。

「どうした？ 小手調べのつもりか！？」

「……最初から俺は、本気だよ！」

俺はスペルカードを宣言した。

「雷符『天命万雷』！」

周囲に雷雲が集まり、轟音が鳴り響く。

雷雨は次第に勢いを増し、その内の一発が八坂神に当たった。

八坂神が立ち止まり、こちらを見据える。

「戯れで私を倒す事が出来るなど思うな！」

被弾したとは思えない速さで動く八坂神。

くそっ……やはり雷に耐性があったか。

乾を創造する程度の能力……その能力は空を支配下に置くと言う。空を支配下に置くという事は、天候も操れるという事。

そしてそれは結果的に、俺の扱う雷にも干渉出来る事を意味する。

畜生……なんて相性の悪い能力なんだ！

「まだだ！ 電符『ライトニングブレス』！」

ランダムにばらまかれる大弾は、雷を帯びて八坂神に迫る。

停滞しては、弾幕の隙間を埋めるように放電する。

どうか隙を作れば……。

「ふんっ！」

八坂神は避けもせず、浮かした御柱を盾に真正面から突っ込んで来た。

……そんなもの平気ですよってか。巫山戯やがって！

俺は無角棒を取り出し、迎撃態勢に入る。

「電符『閃光斬』！」

接近してきた八坂神の顔めがけて、無角棒を振り下ろす。

八坂神は防御しようとするが、御柱が俺と八坂神の間に入らず、顔に命中してしまう。

しかし八坂神は痛み顔に顔を歪ませる事はなく、むしろ不敵に笑って佇んでいた。

「力が……こもってないぞ！」

一瞬で放たれた蹴りで無角棒が弾かれてしまう。

無角棒は回転しながら空を舞い、境内に深々と突き刺さった。

「くっ……雷符『アークサンダー』！」

休める事も無く攻め続ける八坂神に距離を取らせるべく、周囲に真空放電を起こす。

「……威勢がいいのは口だけかい？」

しかし、八坂神は怯む事無く攻撃をする。

「期待して損したよ！」

八坂神は浮かばせた御柱を発射し、それに合わせて急接近してきた。

「神祭『エクспанデット・オンバシラ』！」

牽制に投げた御柱が動きの邪魔をして、まともな回避が出来ない。
強力なエネルギーの流れが、俺を包み込む。

「……っあ……！ くっ……！」

全てが終わった後には、俺はもう立ち上がれなかった。

「やれやれ、とんだ茶番だったよ」
「……………」

動けない。

「じゃあ、約束通り言う事を聞いてもらうよ」
「……………」

動けない。

俺は、動けない。

また俺は、死ぬのか。
大勢に迷惑かけて、死んでいくのか。

「勝手に死なないでもらえませんか？」

誰だ？

雷神様じゃ、無いな。

お前は、誰だ？

「僕は僕で、君は僕さ」

……どう言う意味だ？

「でも、僕は君じゃない」

意味不明な事を言い、俺に瓜二つのそいつは苛立ちを持った笑顔でこう言った。

「いい加減身体返してくださいよ」

第二十一幕：本当の外道

「平和ですねえ……」

私達は今、マヨヒガでくつろいでいた。

緑は、相談所に行っている。

「ここ最近神経張りっぱなしだったから、肩が凝っちゃったわ」

紫様が微笑みながら煎餅をかじっている。

だらけた姿勢からは、普段の威厳は感じられない。

「……緑が来てから、いろいろありましたね」

橙がお茶を飲みながら、物思いに耽る。

思えば橙に八雲姓を付けられて約半年、威厳が出てきて凛々しく見えてきた。

「そうね……いろいろあったわね」

紫様は目を閉じて微笑む。

「それにしても紫様」

「何かしら？」

「本当に監視を解いていいのですか？」

監視。

緑が夢道湊として覚醒した時に早急な対処が可能なように、私達はスキマを使用した監視をずっと行ってきた。

今日から、その監視を停止する事にしたのだ。

「きっと大丈夫よ、半年経ってまだ動きが無いんだもの。
緑を信じましょう？」

紫様の発言に、橙が驚いた表情になる。
信じる、ですか……。

「紫様から信じるなんて言葉が出るなんて、意外です」

橙も私と同じ事を思ったらしい。
紫様に率直な感想を言う。

「信じるね、確かに珍しいわ。だって……」

紫様は少し溜め、私達でも見蕩れるような笑顔をした。

「私を護ろうとしてくれる、唯一の人だもの」

……紫様、こんなに初心だったのか。

確かに綿月豊姫に迫い詰められた時に駆けつけた緑は不覚ながらか
っこいいと思ってしまった。

後先の考えない姿勢には、少々呆れてしまったが。

まあそれで好感度が変わるの、私はおかしいとは思わない。

誰だって、護ろうとしてくれる人に好意的な印象を持つのは当然だ。

あゝ若い頃を思い出しちゃったな。

「そっか……緑がお父さんになるのか……」

吹き出した。

私も、紫様も。

「ち、橙！」

「何言ってるのよ！」

橙はすつとぼけた表情で首を傾げる。

「あ、ちょっと飛躍しすぎましたね」

「おいおい、勘弁してくれよ」

「えへへ、申し訳ありませ……！」

台詞の途中、いきなり顔が青ざめる橙。
その顔に恐怖が映る。

「どうした？」

「緑……が……」

「緑がどうしたの!？」

緊迫した空気が流れる。

あいつに何が……。

「緑の式が、剥がれた……」

橙の言葉のすぐ後に、紫様は消えていた。

（やり過ぎたかな……）

自信満々の態度から期待してしまったが、やはり人間が軍神に敵う訳無いな。

戦い方が全くなっていない。

（ま、勝ちも勝ちだし）

私は緑を見下ろし、勝ち誇った顔になる。

「じゃあ、約束通り言う事聞いてもらうよ」

この時、私は気が付かなかった。

禍々しいほどの霊力。そして殺意の空気に。

いや、正確に言えばそれらには気付いていた。

わからなかったのは。

それらが何処から溢れているかだった。

私が勝利を確信している時に、突然緑が立ち上がった。

「ほお、まだやる気かい？」

私はまだ戦いを楽しもうとしている。

思えば、この時にやめておけばよかったのだ。

「ふう……やつと身体の主導権を取り返せましたか」

緑が独り言を囁く。

主導権？ おかしな事を言う奴だ。

緑がこちらに向く。

「いい迷惑ですよ、そういませんか？」

いや、違う。緑じゃ無い。

目の色が違う。

鮮やかな黄緑じゃない、濁った茶色だ。

髪の色が違う。

落ちて着いた深緑じゃない、何処までも純粋な黒だ。

気配が違う。

手段を選ばない程の必死さじゃない、全てを弄ぶような空気だ。

何もかもが、一瞬で変わっていた。

「……お前は誰だ？ 緑なのか？」

「緑じゃないですよ。彼は僕じゃない」

奴は爽やかな笑みを向け、私を小馬鹿にするように喋る。

「僕は僕だ」

「はぐらかしてるんじゃないよ。緑をどうしたと聞いているんだ」
「それは貴方の所為ですよ、八坂神奈子」

相手はそう言って、爽やかなで、且つ吐き気のこみ上げる笑みを向ける。

「僕は悪くない」

その言葉からは、嫌悪感しか感じられない。

「……お前の名は？」

「夢道湊、どこにでもいるような、人間の高校生です」

境内を沈黙が支配する。

嫌な汗が私の体全体を伝う。

「ところで、僕は今まで随分と暇を持て余し続けてたんですけど」

沈黙を破り、敬意の無い敬語で喋り始める湊。

「貴女は僕を楽しませてくれますか？」

「……断る」

私は嫌な予感を感じ取り、湊の願いを拒否する。
既にどうしようもない程手遅れだというのに。

「そうですか、では」

私が返答すると、すぐにこの神社から出ようとする湊。
でも、ここで帰られては困る。

「……立ち塞がって、なんのつもりですか？」

「まだ私の用事が済んでないよ。あんた、緑をどうした？」

私の質問に、首を傾げる湊。

「緑……あんな不安定な思念に何の用が？」

「私は電気が、文明が欲しいのさ。勝負で緑に勝ったんだから、あんたは少し大人しくしてくれ」

「……随分と身勝手な女なことだ。ああ、愚かしい愚かしい」

湊はわざとらしく頭を抱え、こう言った。

「やっと元に戻れると思ったらすぐこれだ。貴女、とっても邪魔です」

手をこちらにかざし。

「いなくなってください」

超弩級の熱線を放った。

「なっ……！」

予想すら出来なかった。

博麗の巫女と一緒にいた魔法使いの一撃のような熱線。

そんなものを、媒体も持ってないただの人間が撃てるはずも無い。

そう考えて、油断した。

「適当なイメージでも、十分な威力ですね」

湊は微笑みを浮かべながらさながら値踏みするかのように喋る。

火傷だらけの私など、眼中に無い。

「では、もう一発」

先ほどと同じ、いや、それ以上の熱線を放つ湊。私は痛む体を抑えて回避行動をとった。

「そんなものに、二度も直撃するわけが！」

「いいんですか？ 避けちゃって」

湊が呟く。

「神社がどうなっても知りませんよ？」

……しまった！

このままでは、中の早苗や諏訪子が！

気付いた時には避けてしまっていて、今更庇いに行くには遅かった。

「早苗！ 諏訪子！」

助ける努力も出来ず、思わず目を閉じてしまう。

……静寂が支配する。

「……これはどういう事でしょう？」

湊が不思議そうに呟く。

目の前にはあったのは無傷の本殿と、大きく開いたスキマだった。

「……随分と派手に遊んでるじゃないの」

何処からともなく聞こえてくる妖艶な声。

「おいたが過ぎるわ」

私は、この声の主を知っている。

「……助けにきてくれたのかい？」

「勘違いしないで。私は緑を助けに来たのよ」

緊迫した空気の中、八雲紫が現れた。

第二十二幕：狂気（前書き）

復活でござんす。

第二十二幕：狂気

「まったく、監視をやめた瞬間に現れるなんて、狙ってたわね？」

湊と私の間に立つ八雲紫。

その声からは、憤怒が感じられる。

「当然じゃないですか。監視するなら一生する覚悟がないと僕を出し抜けないですよ？」

「そうね、はっきりとわかったわ」

紫は一步前が出る。

その顔から、一筋の雫が垂れるのがわかる。

「どうします？　ここで戦います？」

対して湊は、この世の負を全て積み込んだ様な笑みを浮かべつつ前に出る。

「……スキマの中にしてくれるかしら？」

「へえ、守矢神社が心配なんだ。いや、幻想郷の為にな？」

自分の大切な物を失いたくないのはよくわかるよ」

紫の提案を、湊は簡単に受け入れた。

相手の実力を知らないのか、はたまた自信の表れか。

「じゃあ僕は早速行くよ。準備運動は済んでるからさ」

湊はそういうと、自分からスキマを開いて入っていった。

「……そんなに緑が大事かい」

私は紫に聞いてみる。

「大事に決まってるわよ。そんな大事な式を傷付けた貴女を許さないわ」

紫はそう即答し、自分の目の前にスキマを開いた。

「おお怖い。どうしたら許してくれるのかねえ」

軽口を叩いてはいるが罪悪感はある。

緑が消えた原因は、私にあるのだから。

「二度と私の家族に手を出さないで」

八雲紫はそう言って、スキマの中に消えていった。

「やあ、待ちくたびれたよ。ざっと三十秒ほどね」

湊が挑発するように喋る。

私はそれを軽く聞き流し、戦闘態勢を整える。

「僕は君の実力なんか知らないからね。とっても楽しみだ」

まあ、勝つのは僕だけど。
湊はそう言って目をつぶった。

「……一つ聞きたいわ」

「どうぞ？」

「貴方の能力は？」

前々から疑問に思っていた湊の能力。

彼の能力は誰がどう見ても危険すぎる能力だが、その実私はその本質を知らない。

緑の切り取られた腕を修復し、外の世界にいた自分の駒を結界に關与させずに呼び出し、

更には自分の身体に人格を創造し、私の能力を何の苦もなく使った。

全て、何の共通点もないのだから。

「あらあら、理解出来てなかったんですか。実際に見ておきながら理解出来ないなんて、頭が悪いんですね」

湊は目をつぶりながら笑う。

どうやら私が見ていた事を知っているようだった。

「今まで僕がしてきた事は、どれもこれも全部僕には出来ない事。想像の域を超えない下らない妄想？？？幻想だよ」

湊は瞑った目を開き、何も無い場所に手を伸ばした。
その瞬間、彼の手に巨大な刀が創造される。

「ほら、この刀がここにあるのも幻想。本来ならね」

身の丈ほどある刀を振り回し、適当に喋る湊。

「僕的能力は『幻想を現実に変える程度能力』」

湊は。

「ただそれだけで、なんでもない能力です」

そこで始めて、真剣な表情をした。

「……なるほどね、得心がいったわ」

表情から放たれる威圧感に耐えつつも、また一歩前へ出る。

「対抗策がゼロって訳じゃないのね」

少なくとも、私はこいつと戦える。

その事実だけでも、心が安らいでいく。

勝とう。

「果たして僕に勝てるかな？ 老いぼれの分際で」

醜く、凄惨で、狂氣的でも。

「私にそれを言って生き残った奴は誰もいないわ」

幻想郷の為に。

「じゃあ、僕は死んだ後に生き返りますか」

そしてなにより。

「そうね、生き返りなさい。そして緑に主導権を渡しなさい」

緑の為に。

「幻想『ライティングブレス』」

最初に仕掛けてきたのは湊だった。

彼は緑のスペルカードを使い、着々と紫を追い詰めていく。

「私に緑のスペルカードを使うなんて、貴方馬鹿にしてるの!？」
「今更お気づきですか。やはり老いばれと脳みその動きが悪くなるのですね」

湊は軽口を叩きつつ、弾幕の密度を濃くしていく。

「移動を制限するスペルカード……僕の分身らしいね」
「……っ！ 緑を貴方なんかと一緒にしないで！」

紫は声を荒げ、スペルカードを宣言した。

「罔両『禪寺に棲む妖蝶』！」

宣言の直後、紫を中心に卅を象ったレーザーが二つ現れる。
紅色と碧色の弾幕が、花火のような弾幕を形作っていく。

「……へえ、そこまでするんだ」

湊はほくそ笑み、手を正面に掲げる。

「幻想『マスタースパーク』」

そして、超弩級の熱線を放った。
馬鹿馬鹿しい程のレーザーが、質量すら持って紫に襲いかかる。

「その熱線、跳ね返してあげる！」

紫は怯むことなく、マスタースパークがすっぱりと収まるほどのスキマを開いた。

「行きなさい！」

そして、湊にマスタースパークが向かうようにスキマを開く。
自身もスペルカードを発動中だというのに、
これ程までに高度な作業を一瞬で為すのはさすが幻想郷の賢者と言える。

「幻想『大嘘憑き』
オールフイクション」

が、湊はその努力を容易く踏みにじった。
自らに跳ね返ってきたマスタースパークを無かった事にして、自身の被害を防いだのだ。

『やっぱり、既存の作品の技だとイメージしやすいなあ。ジャンプに感謝しないとね』

何かに似せたような口調で喋る湊。

異空間の不快感は、更に加速していくばかりだ。

「くっ……！」

タイミング悪く、紫のスペルカードも時間切れになる。

湊はそれを見ると同時に、幻想を現実に変えた。

「幻想『ミールストーム』」

瞬間、紫の周囲に大型の竜巻がいくつも発生する。

そこから小さな弾が発射され、紫に迫っていく。

「目障りよ！ 消えなさい！」

紫は傘で弾幕を叩き落としつつ、竜巻ごとスキマに仕舞っていく。
端から見れば正体不明の大きな口が竜巻を食らうという、大胆で豪快な光景が紫の周囲で繰り広げられていた。

「大きく動きながらそれだけの事が出来るのは凄いね。羨ましいよ」

湊はその光景を見ながら、そう呟いた。

「まったく、狙いが定まらないよ」

その手には、無数の鉄の杭が掴まれている。

「まあいいか。全部放てば全部当たるでしょ」

そう言って、鉄の杭を紫に向かって投げつけた。

「幻想『レールガン』」

その全てが、高速で紫に迫る。

「え？ キャア！」

さすがの紫も高速で動く無数の杭には対処しきれず、あらゆる箇所にながら芸術作品のように鉄の杭が突き刺さってしまった。

「この……程度、で……！」

紫は鉄の杭を何本か抜き、湊を見据える。

「……へえ、まだ動けるんだ」

湊は感心したような声で呟く。

その顔からは、苛つきがヒシヒシと伝わってくる。

「どいつもこいつも無駄に頑丈で。邪魔すぎますよ本当に」

悪意を隠しもせず、紫に言い放つ。

その口調からは、理性も人格もとうの昔に崩壊している印象を受ける。

「そんなに頑丈なら、どれほど頑丈か試してあげますよ！」

湊は無角棒を取り出し、先端に雷を溜めていく。次第にそれは刃の形を成し、轟音を放つ。

「緑はこの技に名前を付けてなかったね。なら、僕が名付けますか」

湊は無角棒を振り下ろし、宣言した。

「幻想『ライトブリンガー』！」

雷の刃が、紫に迫る。

「……っ！」

紫が目を見開いて驚いた。

雷の刃が目の前で大爆発を起こしたのだ。

結果、先ほどまで身体に刺さっていた鉄の杭が全て吹き飛ばされた。そして紫は、地に伏してしまう。

「どう？　驚きました？」

どうやら湊はわざとそうしたらしく、紫に向けてからかうような笑みを向けた。

「……何処までも馬鹿にして！」

紫は一瞬で自身に治癒術を施し、湊に向き直る。

しかし心は、既に折れかけている。

立ち上がる気力は、既に無い。

「フフツ……アッハハハハハハ！」

楽しそうに笑う湊。酷く耳障りな声が、紫の心を削っていく。

「それだよ！　そういう憎しみと無力さに駆られた目！　それが僕は見たかったのさ！」

茶色の瞳を輝かせ、恍惚の笑みを魅せる湊。

「……狂ってる、貴方、狂ってるわ！」

「今更？」

紫の叫びに、湊はさも当然と言わないばかりに答える。

「泣き叫ぶ姿、逃げ惑う姿、間違う姿、負ける姿、道を踏み外す姿、壊される姿、情けない姿、落ち込む姿、諦める姿、哀れな姿、殺される姿、怒り狂う姿、それら全てを見て尚何も出来ない、無力な姿」

湊は語りながらゆっくりと紫に近付く。

「この世に存在する負の姿は、どれもこれも、醜くて美しい」

そう言って、紫のすぐ側までたどり着いた湊。

手の中にある無角棒を構え、それに自身の霊力を纏わせた。

「八雲紫、君はどんな姿を見せてくれるんだい？」

湊は無角棒を振り下ろした。

第二十三幕：抵抗

湊が無角棒を振り下ろす。

それは間違いなく紫の顔に当たろうとしていた。

だが。

「……？」

無角棒は突然勢いを失い、先端が紫の肌に触れるだけという結果になった。

「まさか……」

紫が目を見開く。

彼女の目に映るのは、見慣れた緑色が髪の色として表れた湊だった。

「紫様に……手は……出させねえ！」

緑は、湊の右腕を使い己の両目を潰す。

赤い雫が、両目から垂れていく。

「くっ、あああああああああ！」

重なる悲鳴が、スキマの中を支配する。

「今です……紫様！　俺とこいつの境界を！」

緑は苦しみつつも、自分の主に指示をする。

「そんなの、この場しのぎにしか！」

「何もしないよりマシだ！」

仕えるべき相手に、必死の形相で叫ぶ緑。

その声からは、何処か忠誠の意志が感じられる。

「でも……でも……！」

しかし、紫は未だ戸惑っている。

それを見かねた緑は、先ほどより大きな声で叱責した。

「あんたはクズの欠片と幻想郷、どっちが大切なんだ！」

緑はそう叫ぶものの、湊によって防がれる。

「僕を……差し、置いて……話を進めるなあ！」

「てめえは……引っ込んでろ！」

二つの人格が、同じ身体を傷つけていく。

「紫様、早く！」

「……っ！」

緑の必死さに、ついに紫は決心を固める。

彼女は緑と湊の境界を曖昧のまま固定、そのまま意識を削り取っていく。

「かっ……この、僕が……」

「……それで、いいんです……紫様……」

もはや身体を動かす事も出来ず、小さな断末魔と共に倒れる身体。
どこまでも醜い光景に、終止符が打たれたのだ。

「緑、何で、何でなのよ……!!」

今更自分のやった事に後悔する紫。

その目線には、黒と緑の縞模様の髪型の誰でもない器が倒れている。

このまま放置すれば、湊は緑と一緒に覚醒しないだろう。

幻想郷の為には、それが一番の選択だ。

「なんで、こんな気持ちになっちゃうのよ……!!」

でも、その選択を選ぶ気にはなれなかった。

紫は好きになっていた。

自分たちに尽くしてくれる緑が。

家族と言ってくれた緑が。

自分の為に己を犠牲にした緑が。

今まで人間と妖怪の共存という使命だけで生きてきた紫にとって、
それは紛れもなく初恋であった。

「……とにかく、今は緑を避難させないと」

紫は緑を抱え、マヨヒガへと向かった。

「紫様、一体どうなされたのです!？」

マヨヒガに来るなり、藍が慌てて話しかけた。

「藍、何処でもいいから緑を寝かせて」

私は緑を藍に渡して、とりあえず床に座った。
疲労から少し回復されるが、未だ気は抜けない。

「わ、わかりました……橙！」

藍が橙を呼び、緑を運ばせる。

一瞬だけ見えた橙の瞳が、濡れているように見えた。

「紫様、私に詳しくお聞かせください。一体何があったのでしょうか？ 緑の式……監視の術式も剥がれてますし」

「……湊が、覚醒したのよ」

「!？」

藍が驚愕する。

「藍、橙と一緒に緑の監視をしてて。私は解決策を探してくる」

私は立ち上がり、マヨヒガから出ようとする。

「お待ちください」

それを藍が止めた。

振り向くと、困惑した表情の藍がいる。

「何故緑を殺すという選択肢はないのですか？」

私はそれを聞いた瞬間、藍の右頬を叩いた。

「な、なにを……？」

動揺を隠さず、ただこちらを見つめる藍。

藍にとってはそれは最善の策だと考えてるのかもしれない。

事実、幻想郷の為だったらそれが一番手っ取り早い事もわかってる。

でも。

「私は緑を殺さない」

私は自分に決意するように言う。

「家族の一人守れなくて、幻想郷が守れる訳無いじゃない」

そうだ。

そうなんだ。

身近の物を護れずに、どうして世界を護れようか。

無闇に犠牲を払って護った幻想郷を、どうして私は好きでいられるのか。

「……前の紫様なら、私や橙を犠牲にしても幻想郷を守る事を優先してましたね」

藍が呟く。

「わかりました、私は紫様の命に従います」

どうやら私の式は、納得してくれたらしい。

「しかし紫様。最後に選ぶべき選択は、間違えなideくください」

幻想郷が無くなったら、全員が路頭に迷う事になるのですよ。
そういつて藍は、橙の元へ向かっていった。

「……わかってるわよ」

私はそう呟いて、空へ向かった。

負の第五幕…混沌

認めない。

この僕があんな思念に抵抗された？
八雲紫に封印された？

「巫山戯るなよ！」

あんな格下が、僕の上を行った？
あんな思念が、僕の目を潰した？

「認めない！ 僕は君なんか認めない！」

僕から生まれた、中途半端な欠片の分際で！

「そうだろう！ 緑！」

僕は後ろに佇む緑を睨み、叫びを叩きつけた。

「……知らねえよ」

「知らないじゃない！ 僕をこんなにも不快にさせておいて！」

我慢出来ない。

どうしてこんなにも無責任なんだ！

「僕は何一つ悪くないのに！」

「……何一つ悪くない？」

緑が一気に激昂する。

「そっちこそ巫山戯るなよ！ 紫様を傷つけておいて！」

そして僕と似たような口調で、叫び返す。

僕と似た、それでいて緑そのものの反応。

お互いがお互いに、思考が乱れている。

境界が、混ざり合っている。

「勝手に僕の世界を犯して！ それで堂々としてる？ 認めない認めない認めない！」

その事実が、一気に僕の不快感を膨れ上げさせる。

「いい加減にしろ！ てめえみたいな自己中心的な野郎は！」

「黙れ！ 君みたいな迷惑にしなければならない奴なんて！」

僕が！

「「殺してやる！」」

第二十四幕…傍観者

妖怪の山に彼女達が来てからもう一年が過ぎようとしていた。それは同時に、彼が来てから一年が経過した事も意味する。

「そういえば、半年以上見かけないなあ……」

私は緑色の髪のを思い浮かべる。

「覚醒したのにここにこないのは……まさかね」

不意に空を見上げる。

天気は相変わらず不安定だ。

「……緋想天、か」

もう比那名居天子は動いてるのだろうか。

博麗神社は崩壊したのだろうか。

「まあ、私はただ見守るだけだがね」

作られた歴史通りに、幻想郷が動いていく様を。

しかし、そこで私は一つ忘れていた事に気がついた。

「……歴史通りに、動いてくれればいいんだけどね」

そう、この幻想郷には四人のイレギュラーがいるのだ。

湊が来た事により、八雲紫の心境に大きな変革をもたらした。

メメと呼ばれるドッペルゲンガーがいる事で、少なからず幻想郷の治安が乱れている。

縁がマヨヒガにいる事で、橙に八雲姓が付けられてしまった。

どれもこれも、歴史から逸脱している。

では、私をもたらす不和は？

「……相変わらずわからないな」

自分の事が、わからない。

何一つ、視えてこない。

「……私も動きますか」

私は自身の営む相談所の扉を開け、寺子屋へと向かった。

「あ、相談所のおじさんだあ！」

「暗吾お兄ちゃん！」

寺子屋に入るなり、年端もいかない子供達が私に駆け寄ってくる。

「こら、こら、危、ない、ぞ？」

私はそれを優しく遮り、彼女の元へ向かう。

「慧音、先、生、は、いる、かな？」

「一番奥の部屋にいるよ！」

一番奥……職員室っぽい所か。

「いつもの男の人と一緒に話してる！」

「……男？」

へえ……男ですか。

それは露払いしないといけませんね……。

「あ、暗吾兄ちゃん？」

「顔が怖いよ？」

子供達に諭され、自分が少し病んでいるのに気が付く。

「ああ、ごめん、ごめん」

無理矢理笑顔を作り、職員室へ歩を進めた。

「案内、頼め、る？」

「うん！」

私がそう言うと、一人の子供が率先して案内してくれた。

ほほう、思いやりの心も教育されてるのか。

さすが慧音さんだ。

「妹紅、今日こそ一緒に寝てもらうぞ」

「だから私にそういう趣味は……」

職員室の扉を開けると、上白沢慧音と藤原妹紅がそんな会話をしていた。

なるほど、男とは妹紅さんの事でしたか。

確かにボーイッシュな振る舞い方は、小さい子供から見れば男性に見えなくもないだろう。

ちよっとホッとしましたよ。

「……お邪魔、でし、た、か？」

「お、おい！ 勘違いをしないでくれ！」

妹紅さんが大慌てで弁解する。

いや、私はちゃんと誤解無く理解してますけどね？

「おお、暗吾。君からも説得してくれないか？」

ようやくこちらに気付いた慧音さんが、私に対してそう言う。

……貴女を慕う私に対し妹紅さんを説得してくれ、ですか。

まあ、妹紅さんが相手なら仕方ない。私が勝てる訳ないですからね。

「慧音……お前意外と鈍感だな」

「何がだ？」

「……別にいいけどさ」

「？」

妹紅さんは哀れんだ視線でこちらを見る。

出来ればそう言う視線は止めてほしい所だ。

「それで？ 暗吾は何の用でここに来たんだ？」

慧音さんがこちらに用件を言うように促す。

妹紅さんと二人きりを邪魔したし、早急に用件を済ませましょう。

「香霖堂、に、行き、たい、の、です、が、護衛、を、して、もら
い、たく、て、です、ね」

「そうか……では、妹紅を護衛に付けよう。それでいいな？」

……やはりそうか。

人里の守護という役目もあるし、当然と言えば当然だが。

「……おい慧音、勝手に決めるなよ」

「ん？ 珍しいな、妹紅が依頼を断るなんて。もしかして暗吾が嫌
いなのか？」

……何度も感じているが、妹紅さんには負けたな。

まあ、彼に負けるよりかはマシでしょう。

「いや……だからな？」

「……妹紅、さん、優しく、しないで」

「え？ ああ、ごめん」

妹紅さんがこちらに哀れみの視線を向ける。

お願いですからその視線をやめてください……。

「じゃあ、妹紅、さん、頼め、ま、す？」

「お前がいいならそれでいいけど……」

妹紅さんは退室しようと動き出す。

私はそれを見て、慧音さんにこう言った。

「では、貴女、の、妹紅、さん、お借り、しま、す、ね」

「ああ。なるべく早く返してくださいよ」

「私は慧音の物じゃねー!」

職員室に、魂の叫びがこだました。

「お前さ、何で慧音の事が好きなんだ?」

香霖堂に向かう道中、妹紅さんが不意に話しかけてきた。

「生憎、そう、いう、話題、は、苦手、で、して……」

「そうなのか? それは悪かったな」

「一目惚れ、でし、た、ね」

「結局言うのかよ!」

私のボケを的確に突っ込む妹紅さん。

「何、か?」

「いや……相変わらず変な奴だなと思ってさ」

変わってる、か。

わたしの考え方は生まれた時から変わっていませんしね。

「よく、言われ、ます、よ」

私は適当に相槌を打つ。

「それにしても、何で一目惚れなんだ?

男なんてもつところ……蓬萊ニートのペットとかの方がいいんじゃないか？」

「……ニート、と、新参、ホイホイ、は、共通、認識、か」

二次設定中にも本当の物もあるんですね……。

まああくまでそれは『この幻想郷』での話ですがね。

「慧音、さん、が、好き、な、理由、です、か……」

改めて言われると反応に困る質問です。

うーん、そうですね……。

「やはり、一番、大、きい、要因、は、容姿、で、しょう、か、ね。整った、顔、立ち、に、凛々しい、笑み、意思、の、強い、瞳、と、薄紅、の、唇」

「……おい？ 暗吾？」

「そして、性格。彼女は、とても、優しい。

私、みたい、な、見る、だけ、で、不快、に、なる、容姿、の、人間、に、も、

分け、隔て、無く、接し、て、くれ、る。それ、も、裏表、無く。

人、を、知る、事、の、出来、る、私、から、すれ、ば、それ、は、とても、素晴らしい、事、だ」

「いや、その……もういいから、な？」

「ん？ 何、か？」

「……何でもない、疲れただけだ」

……私の慧音さんへの愛を聞いて疲れたのか。
なるほど、理解しましたよ。

「すみ、ま、せん。どう、に、も、止まら、なく、て」

「いや、いい事だと思うけど限度も考えときな？」

「ご、忠告、感謝、し、ます」

私が一礼すると、妹紅さんは俺に早く歩くよう促した。

「やは、り、遠い、です、ね」

「空を飛ばば楽なんだけどな」

私は空一面に広がる緋想の雲を見る。

雲行きはまだ怪しい。

「慧音といえば」

妹紅さんが思いついたように喋る。

「霖之助も確か慧音の事が好きだった気がするんだが？」

「……ええ、確かにそうですよ」

森近霖之助。魔法の森の入り口で香霖堂という何でも屋を開いてる幻想郷で数少ない名の知られている男性。

そして私の、恋敵。

「恋敵ねえ……そんな関係でお前の要望を聞いてくれるのか？」

「仕事、と、私事、は、別、です、よ」

彼は巫女と魔法使いの所為で毎年赤字だ。

だから、少しでも利益になるなら私との関係は良好でしょう。

少なくとも、ビジネスにおいては。

「そんなものなのか？」

「そんな、もの、なん、です」

確信を持って返答する。

「まああんたが言うなら間違いないわね……お、着いたよ」

私は遠くに見える香霖堂を見つめる。

近くに妖怪の気配はない。

「護衛、無駄、でした、ね」

「私としては何もないのが一番なんだよ。並んで歩くだけでお金が手に入るからな」

妹紅さんは快活に笑う。

綺麗な笑い方が、私にはとても羨ましい。

それから少し歩くと、私達は目的地に辿り着いた。

暗い雰囲気を纏った入り口が、来客者を招いているのか避けているのかは私には解らない。

「私は適当に待ってるよ」

「では」

妹紅さんの台詞を聞きながら、私は香霖堂に入った。

香霖堂に入って真っ先に迎えたのは、埃っぽい机の上で本を読む霖

之助だった。

「やあ、いらっしやい……ってなんだ、君か」

「客、に、対して、随分、と、無礼、だ、ね。ここ、は、無礼、も、売って、る、の、か、な？」

相手の皮肉を受け、こちらも皮肉で返す。

「相変わらず一言多いよ、君は」

霖之助が本を閉じ、こちらを向く。

「で、今日は何の用なんだい？」

私は率直に用件を言った。

「銃、を、探し、て、る」

私がそう言うと、霖之助は驚いた顔をした。

「へえ……君が戦闘手段を欲するとは、何かあったのかい？」

「別、に？ 少、なく、と、も、君、が、思っ、て、る、内容、で、は、ない、よ」

何だって慧音さんを脅して恋人になるつもりだろうなんて思考に行き着くのだろうか。

相変わらず過保護な気がありますね。

「自分、の、身、くらい、守れる、よう、に、した、く、なった、だけ、さ」

私の台詞に、霖之助は怪訝そうな顔をした。

「……やっぱり君の真意は解らないね。やはり眼が見えないのは不気味だよ」

「それ、なの、に、自分、の、思考、は、読ま、れ、てる、だか、ら、気に、くわ、ない、でしょ？」

嫌、がられ、ても、能力、なの、で、悪し、からず」

だから、古明地さとの気持ちは、私にはよく理解出来る。

「で？ 売って、る、の、かい？」

「少し待ってくれ」

霖之助はそう言うと、店の奥に入っていった。

私は店の中を見回して時間を潰す。

「お待たせ」

私が適当に店の物を弄っていると、霖之助が大きな荷物を抱えて戻ってきた。

いや、商品に触るなと思われてもね。

「今売れる武器はこれだけだよ」

霖之助は荷物を広げ、銃器を並べた。

「マシンガン、スナイパーライフル、地雷、ランチャー、ハンドガン、グレネード、ショットガン……」

どれ、も、これ、も、粒、揃い、だ、ね」

私はおもむろにハンドガンを手取る。

「Mk. 23……レーザー、を、標準、装備、か」

「おや、詳しいんだね」

霖之助が意外そうな顔をして聞いてくる。

少し詳しいのは、たまたま見た事のある武器だからだろう。

「P90、M4 CUSTOM、SVD、M870 CUSTOM、
M60E4、C4、MGL-140、FIM-92A……」

他の武器もあらかた見る。

うん、どれもこれも見覚えがありますね。

「あれ？ 暗吾って銃マニアだっけ？」

「君が、知って、る、から、私、も、知って、る、だけ、だ、よ」

霖之助が能力で名称を知ってるから、私も名前が言える。
ただそれだけの事です。

ふむ、あらかた全部ありますね。

「全部、買うよ」

「毎度あり」

「で、？ 本当、に、これ、だけ、かい？」

私の言葉に、霖之助の動きが止まる。

「……君もいい加減意地が悪いね。知ってる癖に後回しにするんだ

から」

「何を、売り、たく、ない、か、は、知らない、けど、君、が、
売り、たく、ない、って、事、は、相当、価値、が、高い、ん、
だ、ろう、ね」

私は確信を持って霖之助を見据える。

相手からは、私の目は見えないだろう。

お互いに沈黙が走る。

「……君には負けたよ」

先に折れたのは、霖之助だった。

彼はもう一度店の奥に行き、布にくるまれたそれを持ってくる。

「これは本来なら絶対に幻想入りしない武器だよ」

そう言いながら、布を取り外す霖之助。

「RAIL GUN……」

それもまた、私が知っている形状だった。

「確か、に、幻想入り、しな、い、武器、だ、ね」

レールガンは多分、私がいた頃の最先端技術だったはず。

「それ、も、売って、もら、え、る、かい？」

「……条件次第だね」

私は条件が気になり、能力で知ろうとした。

「弾幕、ごっこ……いや、真剣、な、果た、し、合い？」

私がそう言っていると、霖之助は真剣な眼をしてこう言った。

「どっちが慧音に相應しいか、はっきりさせよう」

第二十四幕：傍観者（後書き）

武器の元ネタがわかったらブラックアウト！

第二十五幕：機関銃を持つ男

「お前ら、本当にいいんだな？」

妹紅さんの確認に、私と霖之助は頷く。

ここは香霖堂から少し放れた草原。

緋想の雲の影響か、ずっと晴れている。

（多分、この中で一番強いのは妹紅さんだから……この天気は妹紅さんの気質？）

至極どうでもいい事を考えながら、私は霖之助を見る。

彼の手には、刀が握られている。

「本当に近接武器無しでいいのかい？　今なら簡単な刃物なら貸すよ？」

「大、きな、お世話」

対する私は、サブマシンガンとグレネードランチャーを装備している。

これらは私が想像した以上に重く、おまけに重心がズレるのでいくら霊力で力を強くしても動きが鈍くなるのが容易に想像出来た。

「じゃあ行くよ」

「……ああ」

お互いが構える。

「始めっ！」

妹紅さんの声を合図に、戦闘が始まった。

「……………」

グレネードランチャーで牽制し、
霖之助が大きく回避した直後に出来る隙をサブマシンガンで回収する。

「……………」

しかし、私の射撃の腕も悪い所為で被弾を最小限に抑えられている。

「……ジリ、貧、だ」

呟くように言いながら、グレネードランチャーを連射する。

「くっ……近寄れない！」

大きく旋回して避ける霖之助。

その大きな動きが災いし、着地点で大きくバランスを崩してしまった。

先ほどとは比べものにならないほどの致命的な隙が出来る。

「……？」

私は引き金を引いたはずだった。

しかし、爆発も何もない。

「……しまっ、た」

慌てて確認するとグレネードが切れてしまっていた。
どうやらこちらも大きな隙を生み出してしまったらしい。

「……っ！ 今だ！」

霖之助はここぞとばかりに体制を整え、大きく開いた距離を一気に詰める。

「こっち、も、ある、事、を、忘れて、ない、です、か？」

体勢は辛い、グレネードの補充をしつつサブマシンガンで牽制をする。

「この程度！」

しかし、霖之助は怯むことなく進んでいく。

銃弾はほとんど当たっていない。

（銃口が安定していない事に気付かれましたか）

だとすると、早めに装填して応戦した方が得策ですか。

「装填の暇を与える訳が！」

私が装填に専念した事を瞬時に判断した霖之助さんの行動は、とても素早くて確だった。

「……だが」

何も刃物が無ければ格闘が出来ない訳ではない。

「鈍器、なら、ここ、に、ある」

霖之助が振り上げた腕に向けて、サブマシンガンをぶつけた。

「なっ……!!」

突然の行動に、霖之助は怯む。

「もらった」

私は一発だけ装填したグレネードランチャーを、至近距離で放った。

「勝負、あっ……!!」

勝敗は決したと思った。

しかし霖之助は倒れず、むしろ私を掴んでいた。

「何故……!!」

ペイント弾とはいえ銃弾は銃弾。

それ相応のダメージはある筈なのだ。

「……来るとわかってれば、後は度胸で片が付く」

霖之助らしからぬ、熱い台詞。

その真意を読み取るのに、能力は必要なかった。

「そこ、まで、慧音、さん、を……」

ならば諦めましょう。

そもそも、私は最初からそのつもりだ。

「です、が」

「？」

霖之助、貴方だけは慧音さんに相応しくない。

「慧音さんに相応しいのは……」

私は遠くからこちらを見守る少女を見る。

「妹紅さん、貴女です」

言い終わる前に、霖之助ごと灰にされました。

「痛い、です、ねえ……」

戦闘後、私達は妹紅さんの攻撃で負った火傷の場所を癒していた。

「お、お前があんなこと言うから……」

顔をまるで炎のように赤く染める妹紅さん。

しかし、誰がどう見てもやりすぎです。

「反省、します、よ」

しかし原因の発端は私なので、強く出れない。

「それにしても、霖之助は随分強かったね。見直したよ」

……そう、確かに霖之助は強かった。

だが、彼は公式で戦えないという設定だった筈。

「何、が、そこ、まで、君、を、強く、し、たん、だい？」

私は霖之助に問い詰める。

「言わなくても、能力で知ってるんだろ？」

「いや？」

生憎そういう話は、本人から聞く事になっている。

「それ、に、妹紅、さん、も、気に、なる、だろ、う、し」

私の言葉に、妹紅さんも頷く。

妹紅さんのその様子を見た霖之助は、諦めて喋り始めた。

「……慧音を守る為だ」

妹紅さんは納得したような顔になったが、私は更に顔をしかめた。たったそれだけの理由で、たまたま私と戦う時に強いなんて事はありえない。

「文々。新聞で君の特集を読んだ時、好きな人は慧音だと書いてあったのが始まりだった」

「……………」

妹紅さんが、ジト目でこちらを見る。

お前本当に恋愛の話苦手なのかよと言いたげな視線だ。実際、彼女の心はそう言ってる。

……納得した。

ライバルが現れたから、動いたのか。私がいたから、霖之助は動いたのか。

これが、私の生み出した不和か。

「……霖之助」

なら、修正しよう。

「なんだい？」

「さっき、も、言った、が、諦めろ」

君の恋は、叶わない。

「慧音、さん、は、君、と、付き、合って、も、幸せ、に、なれない。」

今、の、彼女、が、幸せ、に、なる、為、に、は、妹紅、さん、と、結ば、れる、し、か、ない」

過去に、あんな事が起こってしまったから。

「そう、で、しょう？ 英雄、さん？」

私はそう言って妹紅さんを見た。

その視線からは、侮蔑と驚愕が読み取れる。

「お前……知ってたのか！」

「前々、か、ら、知って、る、よ。慧音、さん、が、何、を、され、た、か、なん、て。」

いや、されそう、に、なった、か、かな？」

あくまで飄々と話す私。

憎まれるように、疎まれるように。

「慧音、さん、は、昔、三人、の、男性、に、襲われ、そう、に、なった、事、が、ある、ん、だよ。」

勿論、性的、な、意味、で、ね？

それ、を、助け、た、の、が、ここ、に、いる、妹紅、さん、と、いう、訳、さ」

妹紅さんは慧音さんを助けたのだ。

英雄的に、友情に則り、正しい行いをした。

「そりゃ、同性、でも、惚れ、ます、よ、ね。よく、わかり、ます、よ」

それだけで、人は簡単に人を好きになる。

「だから、霖之助」

せめて私と一緒に。

「諦めて、くれ」

私がそう言うと同時に、妹紅さんが私を叩こうとした。

「……っ！」

私の頬に鋭い痛みが走る。

しかし、妹紅さんは私を叩いていない。

「おい、何でお前が……」

青色の女性が、目の前を遮ったからだ。

「随分と言いたい放題いつてくれるじゃないか」

その人が、妹紅さんの代わりに私を叩いたのだ。

「……慧音さん？」

私は、口調を変える事すら忘れてそう呟いた。

第二十六幕：報われる者

「慧音さん……何で……」

突然現れた慧音さんを目の前に、私はただ動揺するしかなかった。

「全部見ていたよ。お前達の気持ちも全部、な」

慧音さんの台詞で我に返り、慧音さんの真意を読み取ろうとする。
……なるほど、そういう事ですか。

「実際、は、妹紅、さん、を、追い、かけて、きた、だけ、で、し
よ？」

「今いいシーンだから能力使用は控えような？」

怒られてしまった。

慧音さんが咳払いをし、流れを元に戻す。

「暗吾、君は私の過去を知っていたから霖之助を止めようとしてい
たんだろう？」

「……ええ」

まだ慧音さんが、男性に少なからず嫌悪感を抱いている事を知って
いたから。

霖之助の為に、慧音さんの為に勝負をした。
生み出してしまった不和を直す為に、全力で戦った。

「知ってた、から、諦め、まし、た」

妹紅さんへの思いが、間違っているとしても本物だったから。

「そうか……」

慧音さんは私の言葉を聞き、大きく息を吸った。

「君は馬鹿だ！」

そしてそのまま、私に言葉を叩きつけた。

「何故私の為だと自分を犠牲にする！ 何故自分の幸せを願わない！」

慧音さんの暴走した感情が、私の心を叩き続ける。

「何故私なんかの為に……！ そうやって笑って諦める！」

慧音さんが、泣きながら私を責める。

妹紅さんも霖之助も、ただただ見守る事しか出来ない。

私は、語りだす事にした。

「……自分、だけ、幸せ、じゃ、意味、が、無い、ん、です、よ」

そう、それはただの自己満足にしかない。

「私、は、貴女、が、幸せ、じゃ、ない、の、が、一番、苦、しい」

この思いは、知っている。

私を形作る、唯一の信念。

「慧音、さん、の、幸せ、が、私、の、幸せ、なん、です」

一番大事な、私の思い。

「……大馬鹿者」

「馬鹿、で、結果」

慧音さんは、泣き止んでいた。
そして、笑っていた。

「ありがとう」

慧音さんは何故か礼を言い、

「私は、そんな君が——」

そして。

「——大好きだ」

私に、口付けをした。

「……まったくもう」

「僕の負けだね」

妹紅さんと霖之助が何か言ってるが、
私の頭には入ってこない。

「……は、は」

ただ一つ、言える事は。

「私も、です」

今日が素敵な記念日になったという事だ。

夕暮れ時。

私は妹紅さんと慧音さんと一緒に人里へと歩いていた。

「まったく、霖之助が浮かばれない結果だよな」

妹紅さんが呟く。

「本当、です、よ。まさか、私、を、選ぶ、とは……」

これでは不和が大きくなってしまっただけじゃないか。
嬉しいけど、これで良かったのか……。

「私の男嫌いを直したのは確実に暗吾だ。だから選んだんだよ」

「早計、過ぎ、ます」

その気持ちたちが本物なのはわかるんですが、どうにも腑に落ちないところ……。

「まあ、いい、か」

運が良かったと割り切ろう。

RAIL GUNも御祝いとして貰いましたし、ね。

「悔し、そう、だった、なあ」

それと同時に、喜んでいましたけどね。
やっぱりいい人だ、彼は。

そうこうするうちに、人里に辿り着いた。

「私は買い物があるから、ここで分かれるな」
「では、また」

会釈して、反対方向へ進む。

「おう！」

「また明日な！」

慧音さんと妹紅さんと別れる。
足取りは、とても軽やかだ。

「恋愛、か」

ふと、霖之助の言葉を思い出す。

『どちらが相応しいか』

そんなの、本来なら霖之助が相応しいに決まってる。
それは彼は原作キャラだからだ。

でも、慧音さんは私を選んだ。

霖之助の熱意を見て尚、だ。

「たまたま好みが私だっただけですかね……」

立ち止まって思案する。

「……結局、人の気持ちなんてわかりませんね」

私は身も蓋も無く結論付けて、慧音さん達と同じ様に軽やかな足取りで家へと向かった。

「ん？」

不意に、見慣れた顔が視界に入った。

猫耳の少女と、緑色の青年が並んで歩いている。

……なるほど、やはりそういう事でしたか。

どうやら今日は二重の意味で記念日になりそうだ。

私は素早く近付き、相手の真正面に立った。

相手は訝しげな表情だ。

うん、やっぱり間違いない。

「やあ、久し、ぶり……?」

やっと、会えましたか。

「……? 湊」

第二十七幕：綻び

「やあ、久し、ぶり????湊」

「……!」

暗吾は緑にそう言った。

まるで、旧友に会ったかのように。

「え……嘘……」

側にいる橙は、驚愕の表情を浮かべる。

橙のその様子を見た緑は暗吾を睨み、反論した。

「おい暗吾、てめえ何出鱈目言ってるんだ」

「緑は、私の、事、を、暗吾、さん、と、呼ぶ、の、だけ、ど、ね」

暗吾はすぐさま、その反論を論破した。

「彼、は、私を、呼び捨て、に、は、しない、よ。私、の、目の前、では、ね」

三人の間に沈黙が走る。

それを破ったのは緑、いや、湊だった。

「……何でいつもいつも君は僕の邪魔をするんだい？　いい迷惑ですよ」

湊は緑色の髪から漆黒に変え、瞳を濁らせる。

「そんな……嘘よ、嘘って言ってよ緑、ねえ！」
「うるさいなあ！」

橙の否定の声を拒絶する湊。
表情は、目に見えて不快そうだ。

「いちいち偉そうに、僕に指図をするな！」

湊は橙に手を上げようとする。

「やめろ！」

暗吾は拳銃を取り出し、湊の腕へ発射した。
放たれた弾丸は見事に当たり、湊は橙への攻撃を止める。

「……邪魔するなと言った筈だよ？」

「知ら、ない、ね」

湊は傷を再生しつつ、暗吾を睨みつける。
暗吾は怯む事無く、湊に銃を突きつけた。

「……メメ、時間を稼げ」

湊が呟くと、彼の服から無数の槍が現れた。
おそらく、メメが身体を変化させて服になっていたのだろう。

「何いきなり話しかけてきてる訳？」

「いいから働け」

そんなやりとりの後、湊は黒々とした空間を作り、その中へ入って

いった。

「っ！ 待て！」

暗吾は慌ててその中へと入ろうとする。

しかし、メメがそれを防ぐ為にこちらを襲ってきた。

「また会いましたねえ暗吾。いい加減死ねばいいと思うよ？」

「誰、が！」

メメの攻撃を、暗吾は拳銃とサブマシンガンで応戦する。

「橙、さん！ 私、の、近く、に！」

未だ呆然とする橙に、暗吾は呼びかける。

「でも……でも！」

「いい、か、ら！」

酷く混乱した橙を説得するために、大きな声で呼びかける暗吾。しかしその行為が祟り、大きな隙を作ってしまう。

「もらっちゃうよーん！」

メメはその隙を逃がす事無く、腕を細長い刃に変えて切りつける。

「甘く、見る、な！」

暗吾はその刃を、拳銃で防御する。

攻撃を防ぐことに成功したが、拳銃の半分まで刃が入ってしまっ

いる。

これでは使い物にならないだろう。

「……戦略、的、撤退！」

即断即決。

暗吾は橙を抱え、人里から離脱する為に全速力で走り出した。

「あーあ、行っちゃった。追いかけるの嫌だなあ」

しかしメメは暗吾達を追いかける事無く、刃の切っ先を暗吾に向けるだけだった。

不信に思った暗吾は、能力で相手の心理を読む。

「ちなみに暗吾？ この剣、どこまで伸びるか知ってる？」

口と心で同じ事を喋るメメ。

その真意を察するに、時間はかからなかった。

「……しまっ、た！」

「しゃアない。よう分かるように、キミらの長さで教えたいわ」

しかし、もう間に合わない。

メメはその目を細め、こう言った。

「13 Kmや」

音速の五百倍の速さで、刀身が迫る。

誰がどう見ても、手遅れであった。

「……？」

しかし、メメの斬撃は外れた。
暗吾と橙の姿は、何処にも見当たらない。

「スキマを使ったのか。随分とありきたりな展開ですねえ」

至極どうでもよさそうに喋るメメ。

「んあ？」

不意に辺りを見回すと、武装した人間が集まっていた。
どうやら先程の騒ぎを聞きつけ、メメを捕らえに来たらしい。

「……追いつけたからいいか」

それを見ても尚、飄々とした口調を崩さない。

「捕まえろ！」

リーダー格の男性が、全員に指示する。

それを聞いたメメの動きは一瞬早く、背中に翼を生やして空を飛んだ。

「あばよとつつあゝん」

下で騒ぐ人間達を見つつ、メメはそう言って逃げてしまった。

第二十七幕：綻び（後書き）

もう当分更新できないかも。
そろそろネタ切れ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8608t/>

東方雷電記 ～ Light to come off in a fantasy ～

2011年11月18日06時15分発行